



北スラウェシ 日本人会

NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

第5号

タルシウス

特集

太平洋戦争とBC級戦犯



1999年5月

北スラウェシ州日本人会

〈 会報 タルシウス 第5号 〉

— 特 集 —

太平洋戦争とB C級戦犯裁判

目 次

◇ はじめに	川井 雄二	2
◇ B C級戦犯について	川口 博康	4
◇ 朝日新聞記事	6
◇ 秘録 大東亜戦史 蘭印編	20
◇ セレベス戦記	奥村 明	45
◇ セレベス島 ミナハサへの道	片山 清	62
◇ 夜光虫 医師が見た大東亜戦争	福岡 良男	81
◇ 孤島の土となるとも	岩川 隆	90
◇ その他の資料	105

はじめに

川井 雄二

これは北スラウェシ州日本人会会報《タルシウス》第5号であります。従来、この会報と内容を異にし、『太平洋戦争とBC級戦犯』の特集と致しました。しかし、これは「〇〇〇に関する考察」とか「〇〇〇における研究」というような仰々しいものではなく、廃版になったり非売品であったりして入手困難な北スラウェシに関する参考資料を集めたものです。

約二十年前、私がインドネシアを旅した時は、まだ戦争当時を知る年代層が多く、私が日本人と知るといろいろ声を掛けられたものです。

「叔父さんを日本軍に殺された」「日本の兵隊にビンタされた」「バキャロー」しかし本当に日本人を憎む者は絶対に日本人に会おうとしませんでした。

逆に当時を懐かしがる人も大勢います。「ワタクシワ....」「イチニサン」「アリガト」とうら覚えの日本語で話しかけられたり、「マシロキフジノケダカサニ....」「ミヨトウカイノ....」の歌をよく聞かされたりしました。

「タカハシさんにお菓子を貰った」という類の話もよく聞きました。日本の兵隊も一人一人は善い人であることを彼らはよく知っています。

しかし戦後五十数年が過ぎ去った現在、こうした戦時中の話を聞く経験をする人は滅多にありません。

このマナドにおいても当時の様子を知る古老たちも年々少なくなっています。カラビアン飛行場跡やテイリン基地跡を見ようと、地元の人に尋ねても誰も知らないのです。

このマナドの地は日本軍の蘭印攻略の初戦時、パレンバンと共に落下傘部隊が活躍したという「神兵の伝説」はあまりにも有名で、隊長堀内中佐の逸話などの断片的知識も多くの人が耳にされていることと思いますが、その戦闘内容やその後の日本軍の活動内容となるとほとんど知る人がいないのが実情です。また、そのことに関して調べようと思っても、関連資料があまりありません。

実際、日本軍占領期の資料は、非常に少しか残存していません。それは、終戦後、日本国内と違い、インドネシアに連合軍が上陸してくるのがかなり遅かったため、日本軍が関係資料を大規模に焼却してしまったからです。日本軍の焼却から免れた資料も、その後4年間にわたるオランダとの独立戦争において、散逸したり、焦土作戦の中で焼滅したりしたのです。

その現在残っている資料でも、大部分はジャワ、スマトラに関するもので、スラウェシ島、特に北スラウェシに関する資料はほとんどありません。1993年、インドネシア史研究会発行の『日本占領期インドネシア年表』を見ても海軍地区の年表中、スラウェシに関する記事は主にマカッサルであり、マナドに関する記述は僅か数箇所しかありません。

こうした状況の中、軍人として、軍属として、記者として、戦争を実体験された方々が書かれた手記や回想録は、当時の様子を知る上で大変貴重な資料となります。第一次資料がない空白の間を、私たちにはこうした手記や回想録でしか埋めることができないのです。

今回ここに掲載した資料は全て日本側からのものです。
インドネシア側から見た日本占領期の様子は、下記の書籍が参考になります。
《ふたつの紅白旗ーインドネシア人が語る日本占領時代》 木犀社
インドネシア国立文書館〔編著〕 倉沢愛子：北野正徳〔訳〕

現在私の手元に、『ミナハサの歴史』というインドネシア語の本のコピーがあります。（『SEDJARAH MINAHASA』 TAULUH. M. 著 1951年発行）

ミナハサ人の先祖とされているトアールとルミムットの伝説に始まり、オランダ植民地時代、日本占領時代を経て、独立戦争までを著したものです。

これによると、日本占領期のミナハサ民衆の生活は悲惨で、困窮を極めたといえます。あらゆる物に課税され、宗教活動は制限された。労働しても契約通りの賃金はもらえない。日本軍は『強盗』と同じである、とさえ言っています。

この日本占領期の項は、機会がありましたら翻訳し発表したいと思います。また、この本の原本は、北スラウェシ国立博物館付属図書館にありますので、興味のある方は是非ご一読下さい。

冒頭でも触れましたが、この特集号では「資料の提供」ということを主目的としています。その活用方法は、会員の皆様各自に委ねたいと思います。

また、他に資料をお持ちの方は、編集部までご提供下さると幸甚です。太平洋戦争或いはBC級戦犯に関する皆様の所感、雑感などもお寄せ下さい。ある程度集まりましたら、特集第2弾として纏めたいと思います。

表紙の写真説明

ビトゥン地区のマネンボ・ネンボ (Manembo-Nembo)にある
元海軍軍人の慰霊碑。碑にはこう刻まれている。

表：金真云鬼 風薫り雲は流れ海碧き南海のこの地君よ永遠に眠れ 裏：1987年10月15日 元海軍第十四期飛行専修予備学生 元山戦闘機隊建之

この慰霊碑に関して、建立の由来などご存じの方がありましたら
編集部までお知らせ下さい。

B C級戦犯について

川口 博康

私は仕事でフィリピン、インドネシア、南太平洋諸島を訪ねる機会が多くありました。いずれも第二次大戦の跡が生々しく残っている所が多く、そのつど凄まじい戦闘の残骸に胸を熱くしてきました。(戦艦、貨物船の無残な姿、トーチカの内部が火炎放射器で真っ黒に焼かれている跡、艦砲射撃の弾が洞窟の上に命中し生き埋めになった跡、海一空からの放火で島の形が変わってしまったところ等)

このミナハサの地にも当時駐屯されていた兵隊さんたちの生活のあとや記念の塔等に出会います。しかしイリアンジャヤや他の地方のような激戦の跡はどこにも見る事はできません。当時こちらに駐屯されていた方からのお話(天国と地獄)や私たちの会報でも当時の事が福岡氏や青木氏によって紹介され、また川井さんに見せて頂いた当時の新聞記事でもこの地が昔からすばらしい土地であったことを知りました。

今回の一連の騒動でも安全な場所として多くの人がジャワ-ジャカルタから避難して来た事実も目撃しており、また地元の人達もミナハサは安全ですと誇りをもって言っていましたので、ここは土地-人々ともに良い所-パラダイスに違いないと一人勝手にがってんし家まで作ってしまったのですが、今年になって当時こちらに駐在されていた村上氏から戦後メナード裁判で29名もの方が戦犯として処刑-死刑になっていた事実を知らされました。

何故、オランダ軍や地元民とも戦闘をやっていないところでこんなにも多くの戦犯-死刑をだしたのか、という疑問が起きました。その後、B C級戦犯についての記事に出会い私の無知さからショックを受けましたので一部この地に関係したものを中心に紹介しておきたいと思います。

上坂冬子氏は「戦争が遠くなった今、敗戦から5-6年の間に慌ただしく行なわれた国際的報復の事実について知らない世代が社会の中堅となり知っている世代もはや忘れかけている。無知な人は学ぶべし、忘れた人は思い出すべきであろう。」と言っています。

私は本当に無知からB C級戦犯という裁判があったことは知っていましたがその内容は知りませんでした。私が疑問に思った事は以下の事です。

- 1 B C級戦犯について。
- 2 オランダ裁判とは。
- 3 オランダとの戦闘も比較的少なく、原住民との関係も比較的良好だったのに地元の人達から別れを惜しまれたという堀内大佐が何故復員後逮捕され、又この地に連れ戻され死刑にまでなったのか。

異文化の中で生活することがどんな事かおぼろげながら少しずつ身に染みて分かってきつつある今の私にとりましてB C級戦犯のことは多くの教訓となりました。B C級戦犯とサラリーマンが共通しているところは、国の為に戦ったのに何故日本人は彼らを戦犯として扱うのか。サラリーマンは会社のためによかれとやった事が何か事件があると会社は知らないという。

庇おうとはしないのか。組織とは組織の目的のために働いた人を称え庇わなければ組織と言えないのでは。ヤクザはそういう意味では立派と思う。国の為、会社のために戦った人を何故称えないのか。感謝と有難うとなぜ言えないのか。国の為に死んだ人のことに対して何もしない。おかしい。

渡辺—谷沢の対談の中で「武」なき社会に名誉なしと言っています。

現代日本の特徴は「恥じを知る」ということがなくなった。

武士社会における根本命題は、もし自分が恥ずかしい事に関与してしまった場合どう対処するかということです。つまり、恥ずかしいことをしたら腹を切る。

そうでなければ人間は武士ではなく町人であると――

敗戦から何故か日本人は責任を取る事を怖がり嫌がるようになった。敗戦の時、BC級戦犯の多くは自ら名乗り出て死刑になった人がたくさんいた。少なくともこの時までは恥じを知ることが責任をとるという観念が日本人に溢れていた――こういう人を見て日本人は称えた。

しかしBC級戦犯の扱いによって「自ら罪を背負って死んだ人はみんな損をした感じ」になってしまった。

マイナス評価はされても偉いとは言わない。無駄死になった。

日本人を代表して死んだ人がこういう扱いでは、誰でも責任をとろうとは思わない。勇者として扱わなければおかしい。

名誉ということ

今の日本は実利社会になりすぎている。人間社会には実利では計りしれない価値のあるものがある。名誉というのは実利を超越した観念であり、名誉という価値を認めなくてはならない。名誉という概念がなければ「恥じを知る」という概念も生きてこない。

戦死の道を選んだ人を称えない限り、其の社会は「奴隷の社会」になってしまう。「武」というのは命懸で名誉を守る事です。「武」なき社会に名誉なし。戦後の日本では命がけで名誉を守ることが軽るんじられ卑しめられ続けてきた。

ある処刑された人は残された妻に対して、子供の将来について男子は黙って百姓をさせろ決して進学させるな。と言い残しています。

進学すれば組織人としての仕事に就きたくなるだろう。組織人になれば上からの命令には嫌でも従わなければならない。自分は組織の命令通り生きて来てこの結果になった。子供だけにはこの思いをさせたくない。

以下の各書籍から当地に関する記事のみ抜粋させて頂きました。
青木氏、村田氏、ウォーラン氏、トミー氏など多くの皆さんから資料提供頂きました。
感謝致します。

「孤島の土となるとも」	講談社	岩川 隆
「追憶」	375大隊戦友会	青木次郎
「読売」	東京裁判50周年特大号	1998/10 読売新聞社
「誰が国賊か」	クレスト社	谷沢永一 渡辺昇一
「セレベス戦記」	図書出版社	奥村 明

朝日新聞

縮小版

これは、昭和17年から昭和18年の2年間分の朝日新聞 縮小版から、ミナハサ及び北スラウェシに関する記事を抜粋したものです。

縮小版のコピーのコピーになり非常に読みづらいので、記事の一部をタイプ・アウトしました。

□□□とあるのは、判読不可能な文字。

○○○とあるのは、機密保持のためか、原文自体が伏字になっているものです。

タイプ・アウトにあたっては、なるべくオリジナルに沿って、漢字を旧字体にしました。(據點、英國、應答など)
ワープロ内に無い旧漢字は、新漢字に直しました。

【川井 雄二】

敵性蘭印の面上に一撃

米英追従に狂奔



総督府首脳は恐日病
米英追従に狂奔



旗幟港ニカラタと(上)面市ドナム



南洋での樂園

反政廳の色濃きメナド

坂氏 著

メナドは、フィリピン島のミンダナオ島の南東部に位置する島である。この島は、南洋の南洋群島の南東部に位置する島である。この島は、南洋の南洋群島の南東部に位置する島である。

メナド島の住民は、元々ミンナハサ人といはれる。これは一説には日本人の子孫ともいわれるほどで色は白く日本人そっくりの顔をしている。住民のうちでは自他共に許す最高級のA種文化の程度も進んでゐます。従つて官吏や事務員になる住民はこのミンナハサ人に限るのですが何から何までオランダ人の真似ばかりで私たちの雇つてゐたミンナハサ人の女中なども日曜日にはハイヒールを履き教會に出掛けると言つた調子でした。邦人は明治の終頃には相当来ていたやうです。水産業が多く今でも邦人の半分は鯉漁業に従事し年に百五十万トン水揚げしてゐます。資源は實に豊富で金、銅、ニッケル、鉄なんでもあります。大資本で開發すれば立□に採算がとれます。その他コブラ玉蜀黍、茶、コーヒー皆よく、米は日本□□の技術をもつてすれば自然的条件に恵まれたところですから二毛作も可能です。□□は非常によく七十度から八十度でそれに猛獸、□疫もありませんからまさに南洋の樂園です。日本人の進出には最も適した島でせう。

南洋での水木園

反政廳の色濃きメナド

米英の走狗と化したまま帝國の打ち鳴らす警鐘にも目醒めぬ蘭印に対し帝國の槌は遂に下され、セレベス島のメナドと蘭印ボルネオのタラカンに相前後して精銳の敵前上陸が決定された。そのメナドとはいかなる市か——セレベスに在十五年の南洋貿易大阪支店長稲垣辰男氏に話を聞く。

邦人はセレベス全島で六百人。メナド地区だけで三百二十人くらゐゐりました。表面的には蘭印の政廳も圧迫を加えたわけではありませんが危険を感じて戦前どしどし引きあげ、いまのこつているのは百十一名、うち婦女子が六、七名となっています。

住民は親日的で反政廳の空氣は□□独立運動さへ二時三時ありましたが結局知識のレベルも低く実力もないので抑へられています。

メナド地区の住民は俗にミンナハサ人といはれる。これは一説には日本人の子孫ともいわれるほどで色は白く日本人そっくりの顔をしています。

住民のうちでは自他共に許す最高級のA種文化の程度も進んでゐます。従つて官吏や事務員になる住民はこのミンナハサ人に限るのですが何から何までオランダ人の真似ばかりで私たちの雇つてゐたミンナハサ人の女中なども日曜日にはハイヒールを履き教會に出掛けると言つた調子でした。

邦人は明治の終頃には相当来ていたやうです。水産業が多く今でも邦人の半分は鯉漁業に従事し年に百五十万トン水揚げしてゐます。資源は實に豊富で金、銅、ニッケル、鉄なんでもあります。

大資本で開發すれば立□に採算がとれます。その他コブラ玉蜀黍、茶、コーヒー皆よく、米は日本□□の技術をもつてすれば自然的条件に恵まれたところですから二毛作も可能です。

□□は非常によく七十度から八十度でそれに猛獸、□疫もありませんからまさに南洋の樂園です。

日本人の進出には最も適した島でせう。

街を練る旗行列

北セレスの両地 住民も喜ぶ占領



【〇〇基地にて足立特派員廿三日發】
 北セレスの両地、住民も喜ぶ占領。去る十一日海軍特別陸戦隊がセレベス島東北岸の軍事據点ケマに敵前上陸を敢行した日、ケマ北方のビートンとギリアンを攻略するために、わが〇〇隊長以下四十名は、〇〇艇に乗って同地を出發した。

前大戦に英國の兵站線を攪乱するために獨艦エムデンが根拠地にしたといふレンベ島を右に見て〇〇艇はギリアン沖合三千メートルに差しかけた。ギリアンの波打ち際には椰子の木かげに點々と垂蓋銃座らしきものが望見されるが、敵影は見えなかつた。ばんばん、隊長が機銃の威嚇射撃を命じた。

街を練る旗行列

北セレスの両地 住民も喜ぶ占領

住民も喜ぶ占領

【〇〇基地にて足立特派員廿三日發】

海軍陸戦隊が蘭領印度に歴史的な上陸第一歩を印してから、北セレスの一角には明かな親日風景を描き出しているが、これもその一つ、僅か四十名の海軍部隊が一隻の〇〇艇で出帆、ビートンとギリアンの據点を占領した、という愉快な報告である。

去る十一日海軍特別陸戦隊がセレベス島東北岸の軍事據点ケマに敵前上陸を敢行した日、ケマ北方のビートンとギリアンを攻略するために、わが〇〇隊長以下四十名は、〇〇艇に乗って同地を出發した。

前大戦に英國の兵站線を攪乱するために獨艦エムデンが根拠地にしたといふレンベ島を右に見て〇〇艇はギリアン沖合三千メートルに差しかけた。ギリアンの波打ち際には椰子の木かげに點々と垂蓋銃座らしきものが望見されるが、敵影は見えなかつた。ばんばん、隊長が機銃の威嚇射撃を命じた。

だが對岸からはさらに應答がない。いよいよ上陸敢行である。機銃一銃に小銃数銃という僅かな武器をもつて〇〇艇はギリアンの海岸に突入した。

四十名は砂浜に跳り上がったが依然として敵影はない。さらに部落の奥深く入っても敵兵はおろか部落民の姿も見えぬ。灼熱の太陽が静かに濃いかげをなげてるばかりである。

一同が呆気にとられていたところへ突然がやぐと人影が近付いて来た。酋長に引き連れられて部落民が降伏を申出て来たのであった。今度は酋長を案内役にしてのビートン攻略である。ビートン北方七キロの地點に黒煙が上つてゐた。

酋長の話によるとビートンは邦人の漁業盛んなりし頃人口四千を算えたが、今は約二千、二十四名の蘭人部隊が駐屯してゐた。この朝皇軍の來處を知り、邦人の漁業會社に火を放つて抜け出したので、今は一兵もあないといふ酋長の言葉を信用して、威嚇射撃も行はずに船を操り入れる。

ところがこの町の人達は避難もせず皇軍の到着を待つるらしい。さすがに邦人の開拓地だけあつて、戸毎に日章旗を掲げたのである。いづれは邦人會社の使用人でもあつたらう、数十名の町民の先頭に立ち、大きな日章旗を振りながら隊長の前進に出た青年があつた。

隊長はこの愛すべき青年の日章旗に「帝國海軍昭和十七年一月十一日占領」と大書してやちた。青年は得意満面、皇軍歓迎の旗行列を作つて、町から町を練り歩いたのであつた。

かくてギリアンも文字通りに無血占領された。皇軍の進駐を喜んだ町民は、今部隊の荷揚や地上の整備などの軍の作業に欣然協力しているものである。

落下傘部隊 蘭印奇襲

陸軍部隊スマトラに進駐 海軍部隊メナド攻略参加

大本営発表（十五日午後五時）帝國海軍落下傘部隊は去る一月十一日セレベス島メナド攻略戦に参加し、捕らたる戦果を収めたり

大本営発表（十五日午後五時十分）強力なる帝國陸軍落下傘部隊は一月十四日午前十一時廿六分蘭印最大の油州地たるスマトラ島パレンバンに對する奇襲降下に成功し敵を破滅して飛行場その他の要地を占領し、同時に更に敵軍を破滅中なり、陸軍航空部隊は本作戰に密接に協力するとともに、すでにその一部は本十五日午前同地飛行場に降下せり

編者注： 去る1月11日、海軍は既にメナド攻略戦において大東亞戦争初の落下傘部隊による奇襲作戦を敢行し、大いなる戦火を収めていた。しかし、近く落下傘部隊によるパレンバン攻略を計画していた陸軍側の申し入れにより、メナドにおける落下傘部隊の活躍は機密事項とされた。そして陸軍のパレンバン攻略作戦敢行の翌々日の2月16日にメナドとパレンバンの両落下傘部隊の活躍が同時に報道されたのである。

ハワイ眺の奇襲に、マレー沖の海戦に、帝國海軍の大胆果敢、しかも細微なる作戦は米英を驚駭し、全世界をアッといはせたが、帝國海軍は去る一月十一日セレベス島メナドの上空に大東亞戦争初の落下傘部隊降下の奇襲作戦を敢行、輝かしい戦果に無敵の勇名に恥ぢぬ武者振りを示して三度全世界をアッと驚嘆させた。

【セレベス島〇〇にて足立特派員（海軍報道班員）攬】
一月十一日蘭印セレベスの一角に奇襲降下した海軍落下傘部隊は、この朝メナドおよびケマに敵前上陸を敢行した我が陸戦隊との挟撃作戦によって、北部セレベスの完全制覇に成功したのだ。多年覆面のうち血みどろの猛訓練を積んだ粒選りの精鋭が、今ぞ覆面を脱いで挙げた赫々の戦果である。この日記者および本間海軍報道部映画班は海軍機に同乗して同部隊に従軍彼のドイツ落下傘部隊がクレータ島に對して試みたよりも遙かに雄大な規模と獨得の戦技をもって展開した近代空中作戦の壯観を目の辺りにすることができた。

初陣の壯観に勇む我が落下傘部隊勇士らはこの朝未明、〇〇機編隊の海鷲に分乗して〇〇基地を出發、記者らの飛行機も遅れじとこれ續いた。訓練に訓練を重ね確信に確信を重ねた勇士らであった。だがはじめて實戦に臨むその心境は如何なるものであつたらう。勇士らを敵中に運ぶ〇〇機の銀翼は真東から昇る朝陽に照り映えて未曾有の壯挙を祝福するかのやうであった。巻雲を衝いて快翔〇時間機はメナドを眼下に見る。火は市街の海岸寄り六箇所から噴いてゐる。逃走に際して敵が自ら火を放った石油タンクである。陸戦隊は今激闘を續けてゐるのである。高度三千米、勇士らの奮戦は、險の奥にしのぶばかりである。

赤い屋根、青い屋根、人影一つ見えぬ碁盤目の街々は今嵐を前にして沈黙の底に沈んでゐるやうであった。この時低く編隊を組んで我が落下傘部隊〇〇機は目指す降下地点の上空へと進入して来たのである。記者がハッと息をこらした瞬間、〇〇機からパッと一齊に開いた〇〇個の大輪の花、今純白の落下傘は見事に開いて静かに降下して行く。ついで〇〇個、さらに〇〇個。

緑の芝生の上に相續いで花を開く落下傘部隊の妙技であった。それは深海に浮游する海月のやうに美しく、また南國の空に咲いた葦のやうにあでやかであった。芝生の緑と落下傘の白と機翼の銀とそしてそれらうの濃い影とが大きく交叉してさながら五色の花園であった。さらにもうひとつの編隊が、次いで他の編隊が碁盤の上に並べた石布石のやうに整然と白絹の傘を降ろして行つた。芝生の全面を埋めて降下した大輪の花は静かに花びらを閉じた。かくて蘭領印度の一角に輝かしい歴史の第一歩を印した勇士らは、今ぞ生涯における最も緊張した瞬間の行動に移りつゝあるのであらう。残念ながら落下傘を放れた勇士らの敢闘の姿は地上の同色にカムフラージュされて、上空から見ることができない。激烈な銃声が轟いてゐるかも知れない。だがそれも機の爆音に消されて聞く由もない。遙か〇〇キロを隔てた海岸には既に陸戦隊の上陸を見たといへ、直接周囲の総てを敵に囲まれながら踏みしめた大地を確保しつつ一歩々々戦果を上げてゐる勇士らの姿を想像して記者は思はず眠頭に熱いものを感じたのであつた。われくの海軍機は落下傘部隊の降下成功を見届けたのち附近に着水した。真冬の温度から赤道直下へ記者らも敵中降下をしたのであつた。突然ビュンといふうなる音がして側近く大きな水音が立ち上つた。續いて二發、三發、明らかに敵陣からの砲撃である。海軍機からも機銃をもつて応戦すれば敵陣は間もなく沈黙。

今度は附近一帯の部屋から火の手が幾條となく上りはじめた。蘭軍得意のわれとわが手をもつてする破壊戦術であるうか。附近の家の屋上高く日章旗と海軍旗がさつと翻つた。落下傘部隊は早くも軍事據點を占領したのだ。日の丸を立てたポルトはするくと進んできた。われくは落下傘部隊勇士の出迎へを受けて蘭領印度の土地を踏んだのである。だがそこで記者は戦慄の激しい現実を知つたのだ。地上で聞く落下傘部隊の戦闘は上空で想像した以上に壮烈なものである。降下した軍事據點のなかにはトーチカ陣地が設けられ、わが部隊の降下は敵の猛烈な射撃のさなかに行はれたのであつた。果敢なる落下傘部隊は着陸と同時にトーチカの内外に激戦展開したのである。こゝに精銳部隊の眞価を遺憾なく發揮し堅固なトーチカを相次いで占領、さらに突進してくる戦車、装甲車と對戦の末、これを捕獲、軍事據點および附近の市街一帯の掃蕩を完了したのであつた。ついで十二日朝には精銳落下傘部隊の増がみことな着陸ぶりを示して軍事據點に到達。正午頃にはメナドに敵前上陸の陸戦隊との握手も成つて、こゝに我が國最初の落下傘作戦は畫期的成功をさめたのである。



大東亜圏を征く

⑤ 橋本本関雪三

メナドの街

古来、山水の氣凝つて人間が産まれるとされている。言葉をかへていへば環境が人間を産むわけである。

こゝメナドの町は、軽井澤の町を彷彿さす。メナド富士―クラバット山は、さしづめ浅間山に當る。その鄙びた姿は、會津の東山を思はせ、日田の盆地を偲ぶ清静さである。

その村人の聲にも清〇を感じる。道ゆく人々は日本人と見れば丁寧に帽子を取つてお叩頭をして行く。わざ／＼車から降りるのもさへある。その動作は閑雅である。

それだけでない。その容貌は日本人そっくりである。こんなに日本人そっくりの顔をした民族は私の知る範囲ではまづ無い。地理的に近い支那や半島人よりも更に能く似ている。飛行場のある場所は〇〇メートルくらゐ

の高地ださうで、そこからメナドの街まで自動車で約一時間半を要する相當遠い距離である。従つて、市内は暑い、飛行場のある場所は非常に涼しい。近くにトンダノ湖といふ湖があつて高原にあり勝ちな霧が多いから〇〇し得ない場合があると小俣機長の話である。

◇◇◇

爆撃された商〇地帯を過ぎ、近くの市場を覗いて見た。慘〇たる焼け跡が大半取り片付けられ、新たに建設が行はつゝある。破壊は一旦にして、建設は容易ではない。

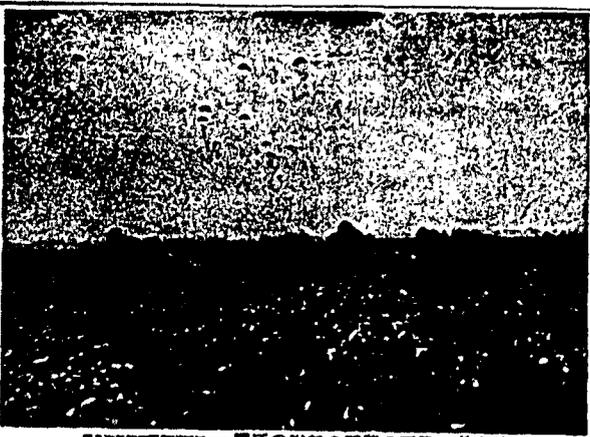
その饒舌に敬意を表し、市場に處狭く積まれた、鯉、鰯、車えびなどに食指を動かしつつ、そのあたりに集まつた澤山の牛車に繪〇ころを湧しつゝ、翌日を期待して、同姓、橋本部隊長の官舎に客となつた。

官舎は一寸小高い場所にあつて、静かである。夜間に起つて空を仰ぐと無数の星が南方特有のうつくしさを見せて、虫の聲がそこにもこゝにも旅情に沁み入る。暫く、臥戸に入るを忘れて、五体を露氣に浸しながらいつまでも立儘した。

あすはメナト奇襲の日

白傘に弾痕八十四

敵前五米彈雨に躍込む神兵、



メナトの下降時落下の跡の痕跡

敵前五米彈雨に躍込む神兵、

【足立本社特派員（海軍報道班員）記】

【足立本社特派員（海軍報道班員）記】

【足立本社特派員（海軍報道班員）記】

【足立本社特派員（海軍報道班員）記】

【足立本社特派員（海軍報道班員）記】

【足立本社特派員（海軍報道班員）記】

【足立本社特派員（海軍報道班員）記】

【足立本社特派員（海軍報道班員）記】

それからさらに一箇月目、原住民主催の皇軍慰問音楽大會がランゴアン中央運動場で開催された。この日参加したインドネシア人は一万数千名を数へ美しく着飾った男女が腕を組み、御馳走を盛った籠を下げながら嬉々として集まって来た。各部族選抜の音楽團がそれ／＼得意の音楽を演奏し、インドネシア曲のあとには必ず日本の曲で結ばれた。審査員は兵隊さんであった。投票の結果はトンダノ楽團が最高点で優勝したのである。だが最後に展開された少年團の縦隊教練の見事さは勇士達とそして原住民を□□たらしめずにはおかなかった。落下傘部隊勇士指導のもとに組織されてゐた数百名の少年隊員はインドネシア少年の日本語の号令で密集教練から散開突撃までも見事にやつてのけたのである。

原住民の『空の神兵』に對す敬愛の度は信仰的のままで高まつて行つた。だが別離の日もつひにやつて来た。その日、ランゴアンからメナドまで七十キロの道路の両側は別れを惜しむインドネシア人で埋めつくされてゐた。手に手に花束を抱いて落下傘部隊の自動車を待つてゐた。自動車が通過するとき、彼らは泣きながら花束を勇士達へ投げかけた。

白傘に 弾痕八十四
敵前五米・彈雨に躍込む「神兵」

帝國海軍がセレベス島メナド上陸に日本軍初の落下傘部隊の奇襲作戦を敢行したのは昨年一月十一日であった。フハリと大空に咲いた純白の落下傘はあでやかでさへあるが、傘の一つ／＼に全員戦死を賭した決死隊員があつたのだ。降下用意—降下—猛烈な敵弾—敵前着陸、激戦、死闘、肉弾—敵陣地脱取—かくてわが軍初の落下傘部隊は、銃後一億がわが軍にひそかに豫想した興□に答へるに十分な輝かしい戦果をあげた。回り来た一周年を前にメナド落下傘部隊の部隊長として一番機から第一番に降下して、敵陣に殺到した○○部隊長に武勲の陰の労苦と心労を聴く。

部隊長は「部下にも武勲を話すなといつてきたが、敵のみないところと降下したのだらうなどといふ誤傳もあり、あの激戦に殉國の英霊となつた勇士に対する禮だと信するに至つたので、敢えて當時の様相を率直に語ることにした」と語り出した。

自信満々戦場へ

海軍落下傘部隊は身命を賭した懸命な猛訓練を経て十分な自信をもつて戦ひに臨んだ。某基地を出發しようという数日間連日細雨で傘を乾かすのに苦心したが、出發の際は、からりと日本晴の上に無風の申し分ない天候だった。勇躍壯途についたが、やがて、一番苦手の雨がやって来た。私の乗っている一番機から二番機が見えないくらい猛烈なスコールとなり、その上風も出て、しまひ

には自分の翼端さへ見えなくなつた。飛行機にはどこからともなく雨がもつてくる。傘がぬれはせぬかと何よりこれを心配した。豪雨中の飛行一時間それが次第に□れかゝるころ、飛行機はいつか水面すれ／＼に飛んでいた。陽光を見たらうれしさは忘れない。

彈丸の□に降下

大編隊の輸送飛行機隊は翼を輝かして目的地に勇躍快翔また快翔を續けた。降下地点はメナド市から約七十キロ南方のランゴンのカラビワン飛行場である。椰子畑を切り開いて出来た余り大きくない飛行場だ。降下高度は僅か○○メートルである。世間の人の豫想してゐるほどの高度はともない。海軍では初めから予備傘を持たない。一つの傘でしかも飛び降りた振動がまだ十分止りきらないうちにもう着陸せねばならない。しかも狭い飛行場に全員はみ出さぬやう□的に降下する。が、かうしなければ瞬時に着陸はできない。一秒置きどころか間断なく鉄砲の彈丸の如く飛び出す。地上には無数の拒馬がある。そのうち身辺へ雨のやうに敵弾が注がれてきた。あとで傘にあたった彈丸を調べると、一番多いのが八十四個で、普通でも二、三十は當たっていた。

額も上げ得ぬ彈雨

傘をあやつりつゝ、拒馬や竹槍を避けて着陸した。敵弾は何處からともなくビュン／＼飛んで来る。自分の落下したのは敵のトーチ力から約五米といふ近距離。鉄兜の紐をしめ直したいと思つたが、手を出せばその手がやられる。それほど彈丸は近くまた多かつた。顔を地にびたりつけて鉄兜で地を一厘きざみに掘つた。

右や左が見たかつたがそれすら出来ない。彈丸の音を長年聴いている経験で、今は一切身動きはできないぞと直観した。

しかし何時までもちつとしてをれば味方全員戦死だ。地べたに顔を押しつけたまゝで、左の方をやつとの思ひで覗いた。そこに二番機の先□に飛び下りた副官の染谷秀雄少佐がをつた。

壮烈—死の肉弾

染谷は兵學校の時の生徒で今は副官だ。二人で眼で合図しようとした必死の一瞬、染谷の頭部に敵弾があつた。僅かにゆがんだ聲で「部隊長残念です。しつかりやつて下さい」といふ。「うん、やるぞ、しつかりしろ」と返事すると「部隊長彈丸が少なくなつた。突撃しませう」といふので「もう少し待て」といつたがそのとき既に彼は意識不明だつた。意識が消えて行くにつれ敵弾が少なくなつてきたと思つたのである。彼は猛然立ち上り、近くに降下した彈薬箱によるめくながら近づいていつた。染谷に向かつ敵の掃射は峻烈を極めた。彈丸がどれほど染谷にくひ込んだか知れない。彈薬箱にたどりつく前に染谷はぼつたり倒れた。死んで染谷の手は彈薬箱にとゞいた。しかしそのとき染谷はもう何をやる氣力もなかつた。

遂にトーチ力奪取

かゝる間にも、あとからあとから部下が降りてくるのが僅かに見える。力強さもあつたが危険だなあと思つた。このとき横の道路に装甲車が来た。帝國海軍初戦の落下傘部隊に汚点をつけてなるものかと、嚴肅な氣持ちに胸がひきしめられた。

右方では米原中尉が悲壯な面持で、突撃に移らうと機をうかがつてゐる。俊敏な中尉は地ならしの十分でない地点を見つけ、その低いところに跳び込み、さらに機を見て私たちをねらひ撃つてゐた一番近いトーチ力へ飛鳥の如く躍り込んだ。

これをきつかけに、飛行機のぐるりにあつた八つのトーチ力の奪取に成功したのである。この米原中尉は頭をぶち抜かれていた。トーチ力に跳び込みざま戦死だ。死してトーチ力を占領してゐたのだ。

美し日本の兵士

着陸直後の激戦中には実に美しい話が多い。負傷してゐる部下に傷口を傘でしばれといふと、「傘でしぼるですか」と反問した。日ごろ落下傘を命より大切にしていたので、こんな言葉が出たのだと思ふ。二等兵が戦死した一等兵の握つて離さぬ銃を借りるとき、彈丸雨飛のなかで丁寧に「敬禮」をしてゐたのも嬉しかった。自分は「全滅する積もりだつたのに、何んだ、これ位の戦死で」と心で感謝しつづつ口を氣にしていた。

全く天祐の思ひ

敵はかねて落下傘部隊に備へ、飛行場へ向けて八つのトーチ力を作り、三百の拒馬、さらに無数の竹槍を天に向けて立てゝをり、奪取したトーチ力内にはいづれも三万發以上の彈丸を打つた空の莖莖があつた。「天祐神助」とは言葉のあやぐらゐに思つてゐたがこの戦争の結果天祐といふことを思はざるを得なくなつた。

秘録 大東亞戰史 蘭印編

発行者：富士書苑

発行日：昭和28年10月15日

これは、第二次世界対戦中、報道員としてインドネシアで活躍した記者が戦前・戦中・戦後の各地での体験を回想して綴ったものです。

当時の一般兵士より幅広い知識を持った新聞記者が著したということと、引き揚げから僅か数年後の昭和28年という、まだ記憶が生新しい時期に書かれたということもあって、当時の様子を知る上で貴重な資料です。

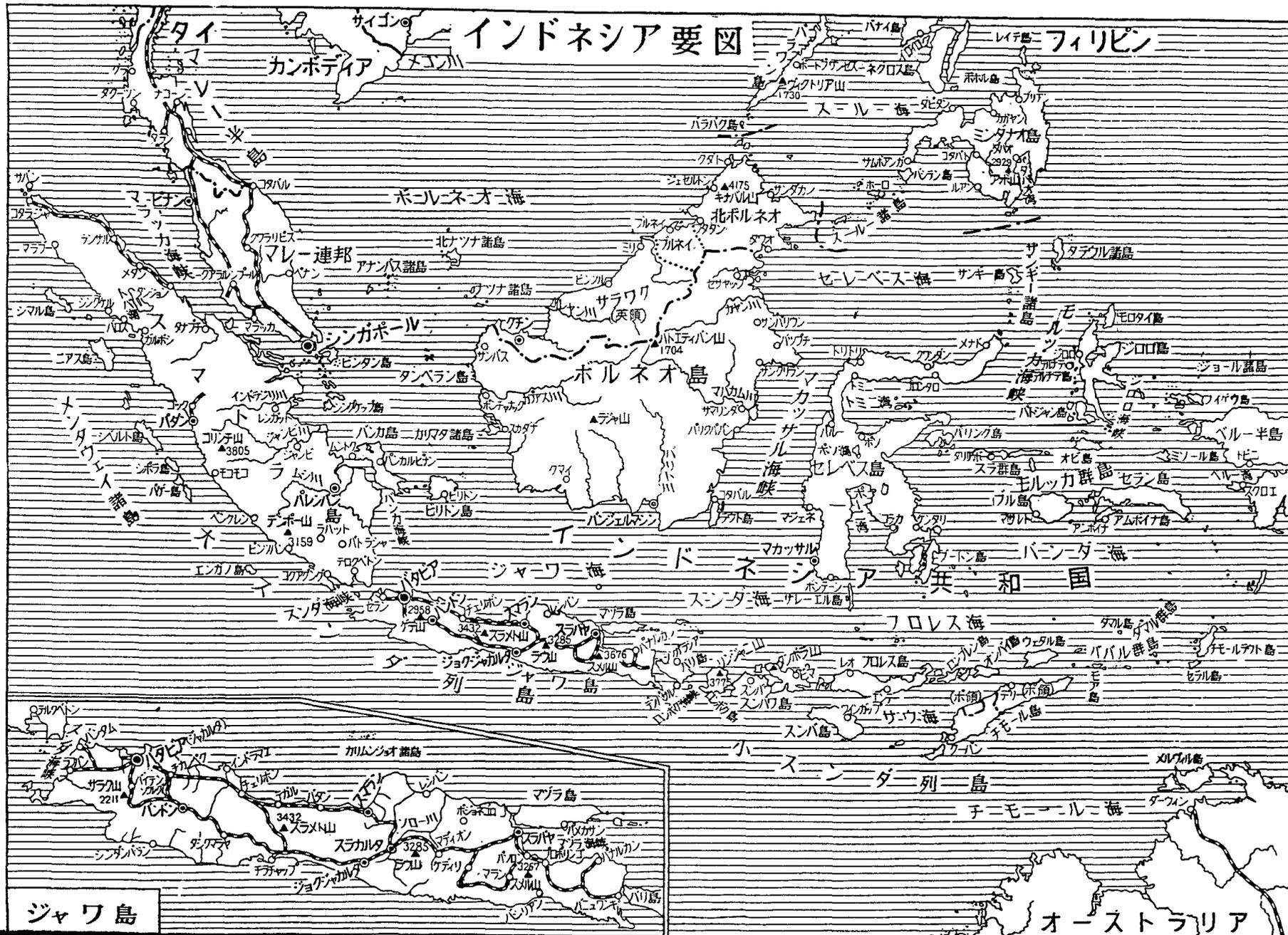
全26編より成っていますが、その中、インドネシア独立小史、インドネシア風物誌等5編を朝日新聞の谷口五郎氏が執筆しています。

ここでは、下記の4編を収録しました。

- | | | |
|-------------|-------|-------|
| (1) ミナハサ風土記 | 朝日新聞社 | 斉藤 良輔 |
| (2) 赤道の獄 | 河北新報社 | 為田大五郎 |
| (3) ペンに倚りて | 朝日新聞社 | 谷口 五郎 |
| (4) ジャワの日本人 | 朝日新聞社 | 河合 政 |

【川井 雄二】

インドネシア要図



21

ジャワ島

オーストラリア

ミナハサ風土記

落下傘部隊後日譚

空の神兵、よびせるミナハサ族の護衛。忘れられた陸戦隊のウツブン。落下傘部隊の栄光が、かもし出したセレベス後日譚。——そして残された愛情の点描。

朝日新聞社出版局

齋藤良輔

落下傘部隊と陸戦隊

「あんな方、このメナドで、落下傘部隊の話をするのは禁物ですぜ」 同じセレベス島でも、ぐっと南の端の、マカッサルの港町から、また新しくやってきた報道班員たちをつかまえて、古顔の通訳が、ソッとこんな注意をした。

「え？ 何んだって、キミー——変なことを言うじやないか。だいたい、ねえキミー、このメナドってところは、海軍落下傘部隊の、派手な奇襲上空で、一

羅その名を轟かせた土地だぜ。まあ、言ってみりゃあ、落下傘部隊あつてのセレベスさ。何しろ、こんどの戦争で我が落下傘部隊が、はじめて舞い降りた戦場といえは、このメナドだからなあ。永遠に戦史の一頁を飾るって、ヤツよ。その、自慢の手柄話を、しかも現地メナドで、しっちゃあ不可んというのは、いったい、どんな筋なんだい？」

「それが——いま、メナドを中心に、このミナハサ地方一帯の警備に任じている、海軍陸戦隊の兵隊さんたちなん

です。もともと、ハッキリ表面に出して、どうこうと言うんじゃないですけれど……」

「だって、通訳さん、そりゃあオカンイじゃないですか。落下傘部隊の「空の神兵」も、いま、その後を引きついで警備している、この陸戦隊も、空と陸から、力を合わせてメナドを攻略した、同じ陸戦隊の仲間でしょう。」

「メナドだけじゃない。マカッサルだって、ケンドリーだって、この日本の本州くらいもある大きなセレベス島を、海軍特別陸戦隊の手だけで、みごとに占領した。その輝やかしい戦果を分かち合ひ、喜び合うべき、いわば、血肉を分けた戦友同士じゃ、ないですか」

「それだから——とも言えましよう。まあ、暫らく、このミナハサで暮らしてご覧なさい。それが、だんだん判かってきますから」

複雑な表情をした通訳が、ボツンとつぶやくようにそう言った。

赫々たる空の神兵

その、メナドを急襲した海軍落下傘部隊の活躍が、その折、どんなに華々しく報道され、宣伝されたか——当時各新聞のトップを飾った、従軍報道班員の手記を取り出してみよう。

「ハワイ島の奇襲にマレー沖海戦に全世界をアツといわせた帝国海軍は、去る一月十一日セレベス島メナドの上空に、大東亜戦争初の落下傘部隊降下の奇襲作戦を敢行、輝かしい戦果に無敵の勇名に恥じぬ武者振りを示して三度全世界をアツと驚嘆させた。」

蘭印セレベスの一角に奇襲降下した海軍落下傘部隊は、この朝メナドおよびケマに敵前上陸を敢行した我が陸戦隊との挟撃作戦によって、北部セレベスの完全制圧に成功したのだ。多年覆面のうちに血みどろの猛訓練を積んだ粒選りの精鋭が、今ぞ覆面を脱いであげた赫々の戦果である。かのドイツ落下傘部隊がクレータ島に対して試みた

よりも遙に雄大な規模と独得の戦技をもって展開した、近代空中作戦の壮観を目の辺りに見ることができた。(A 報道班員)

落下傘部隊の新戦場メナドは足下なのだ。落下傘部隊〇〇機の大編隊は悠然とセレベスの大空を征くのである。基盤目の市街はすでに死滅して、白い鋪道に一つの影をひくものもなく、港内に一波のあがるものもない。まるで伊豆の上空のようにメナド富士をはるかな背景に、赤や黄色の屋根が緑の樹木の中に、また芝生の上には牛や雞が陽を浴びているひなびた景色がひろがっている。降下地点はその附近であつた。

準備完了。〇〇機から一齊にツツと糸が垂れたかと思えた瞬間、パツと開いた純白の落下傘四つ、五つ、六つ。〇〇機からたぐり出すように間隔正しく飛び出す大輪の花輪、編隊の幅をそのまま大空に整然とした絢爛豪華な花園をつくった。傘の純白は紺青に映え、

四囲にわく雲と妍を競ひ、見る見る大空をうめて幾十、幾百、幾千、戦場にえがき出した人造景観の極致は、メナド富士を背に、今靜々と新戦場へ降下する。飛行機を離れると忽ち機械の音が耳につく。新戦場のここかしこにパツと大地が燃えて、敵のトーチカは火を吐いている。見下す着陸地点には亭々たる椰子、有刺鉄条網をめぐらした、拒馬(バリケード)が一面に置かれてある。

全員見事に着陸した。落下傘に無数の敵弾をうけたものもあつたが、犠牲者は一人もない。大空の最初の敵前着陸は無血成功であつた。着陸に当って牛の背に降りたものもあつた。近づく大きな牛だったので「シッシ」と追つたが、牛は大空の勇者を鳥とでも思つたらしい。目を細くして見上げたまま動かかなかつたので、とうとう牛の背に降りた。

また大空に手を掲げている椰子に落下傘を受け止められたものもいた。隊

22

員は身体を振り子にして見事椰子の幹に飛びつき椰子の木から敵前着陸に成功した。
隊員は忽ち身軽になって敵トーチカににじり寄った。

オランダ兵は射撃が巧いことで知られているが、なるほど最初の手合せの敵弾は極めて低く、その熾烈なことは支那事変の怪談の比ではない。

間もなく味方の擲弾筒の弾丸が、トーチカ附近で猛烈に炸裂し、それに呼応して突撃が始まった。

熾烈であった敵の攻撃が忽ち潰えた見渡す限り緑の牧草の上に十六光の軍艦旗が高く翻ったことは、落下傘隊員の勇気を百倍せしめ、カカスの街は忽ちわが掌中に帰したのだ。(丁報道班員)

といった戦記が、つぎつぎと報道され、これこそ近代作戦の華、めざましい戦果、とばかり、軍艦マーチの囀物入りでもてはやされた。

地空一如の抉撃作戦

先陣を越された陸軍でも、これに遅れじと、スマトラのバレンバンに落下傘部隊を強引に降下させたが、これは何んといつても二番煎じ。トップを切った「メナド組」の方が、精戦の「海軍景気」とダブって、全国の人気をすっかり独占した形となってしまった。

——大空に、大空に
たちまち開く、百千の
真白きバラの花のよう……
ああ、神兵は天下る……
ああ、神兵は天下る……

こうした讃歌が、夜ごと日ごと、ラジオから流れ出すところになると、メナド落下傘組は、いつか「空の神兵」という、燦然たる代名詞をたてまつられ軍国の英雄になりきっていた。

だが——現地メナドには、この「空の神兵」の難れ業を成功させるため、地上から、血まみれ泥まみれの協同作戦をとった陸戦隊が存在していたが、

その行動は、ほとんど世に報道されなかった。

やはり、運、不運ともいうものなのだろうか。同じ陸戦隊、しかも同じメナド作戦に力を合わせながら、すべて「空の神兵」の華やかさに打ち消されて、地上部隊の地味な苦闘ぶりはいわば、書かれざる戦記になってしまった。

ここでは、その詳細な「戦記」を紹介するのが目的ではないから略すが、あらましの状況はつぎの通りだった。

メナド攻略は、海軍特別陸戦隊が三手に分かれて行ったもので、主力の門部隊、牙部隊(佐世保鎮守府)は西海岸のメナドを衝き、別動隊の戸部隊(鎮)は東海岸のケマに上陸、横須賀第一落下傘部隊、島討部隊はメナドの背後六十キロのミナハサ高原、カカス飛行場附近に降下して航空基地を奪取、敵の背路を肉弾で断つ——作戦とあるから、期せずして、三鎮守府所屬の各陸戦隊の腕くらべとなったわけだった

ミナハサ娘の憧れは

しかし——そうした劇的な興奮が、次第に日を追って薄らいでゆくと、今度は妙に冷たい感情が、地上部隊の間から、蛇の舌のようにチロロチロロと頭をもたげてきた。

かつては、落下傘部隊の戦友に對して、あれほど温かい感動を寄せていた筈の、その同じ心の底からわき出るものとしては、全く思いもよらず、逆な感情だった。

ことに、その落下傘部隊が、進軍がなすか一カ月後には、再びチモール島クバンの新戦場めざして出かけてしまったその後——このメナドを中心としたミナハサ地方に、地上別動隊だった陸戦隊の手によって、静かな警備時代が訪れてくる頃になると、これらの居残り警備隊員の胸には、この心の溝がはつきりと刻まれていった。——というのはい——落下傘部隊が、再び姿を消してしまつた後のミナハサには



陸戦隊と空挺部隊は遂に涙の握手を交す

昭和十七年一月十一日、予定通り敢行された落下傘部隊降下に呼応して、佐世保、呉の各陸戦隊も、この朝午前四時、東西の両海岸から敵前上陸を行つた。

「飛行場へ、飛行場へ——」
「落下傘部隊を見殺しにするな。孤立させるな」
こんな合言葉を交わしながら進軍し六十キロの山道に待ち伏せする蘭印軍

と血みどろの白兵戦を演じながら前進した。
この敵前上陸部隊の、当時の戦闘詳報の一節に、
「一月十二日、海拔六〇〇米の高地トモホンを発して、敵の抵抗を排除しつづ進み、午前七時十分、メナド方面部隊とケマ方面部隊との連絡、合流に成功。司令官は、飛行場めざして三縦進撃を命じ、牙部隊は右縦隊となり、トモホンを南下。戸部隊はトングノ湖に沿ひその南側を進み、司令官は同湖北岸沿ひに進撃。途中、牙部隊は、レム附近において戦車を有する敵と遭遇。火焰放射器にてこれを倒し、十二日午前十一時三十分、ついに落下傘部隊と握手。声をあげて泣く」
とあるから、戦闘開始後三十一時間ぶりに、たがいの無事な姿を発見して抱き合つたまま、嬉し泣きに泣く、空と地上の両陸戦隊員の感激的な場面がその武骨な文字からも、眼のあたり浮んでくるようだ。

ポツカリと大きな風穴ができたような空虚さだけが取残されていた。

現地、ミナハサ族の話題といえはあの素晴らしい「空の神兵」の思い出だけが、いつまでも飽きずに繰り返えされているだけで、後に残っている地上警備部隊の存在は、その意味では、ほとんど無視されているのに近いことを、次第に思い知らされてきたからであつた。

「猫の眼と赤い髪とが、六百年の間インドネシアを苦しめるであろう。だが六百年たったら白馬にまたがった大王の使者がインドネシアを救いにやってくる」

という、ジョヨボの予言が彼等の間であまねく信じられてきたというが、その予言通りの(?)解放の喜びを、ミナハサ族は、

「その大王の使者が、白い大きな絹の傘を背にしてやってきた。大空から救いが来た」と、大きな身ぶりで表現する。一

にも、二にも「落下傘部隊」なのだ。「パラシュートで降りてきたナカムラさん、私の弟、抱いてくれました。私のお父さんに、六本しかないタバコみんな下さいました。優しく、素敵な兵隊さん——」

黒い瞳のミナハサ娘が、ウツトリした表情で懐く追憶の対象も、やはり「空の神兵」サン一刀倒だつた。

もともと、地上部隊が、上海陸戦隊以来歴戦の古強者だけに、どこかむくつきき鬚男の壮漢ぞろいなのに比べてさすがに落下傘部隊の方は、年も若いし、降下訓練で鍛えあげた姿態は雄鹿のように柔軟だし、それに、東京附近の育ちらしく、キビキビした近代的な青年たちだつた。

だから、内地に劣らず前線の現住民の間でも、こうした人気の焦点にまつりあげられたことは止むを得ないことだつたらうけれど、その「空の神兵」が立ち去った後々々でも、まだ、その「若き英雄」の讃詞ばかりきかされて

いる警備部隊は、全くやり切れない気持ちにもなってきたらしい。

「何も、メナド攻略は、落下傘部隊ばかり倒したわけじゃないンジャ。我々だって、陸軍なら馬に運ばせる機関砲を、この肩にかついでからに、山また山をふみ越えて頑張ったんじゃ。」

古強者共は力んでそういつた。

が、どうしたことか、こっちは、エンの下の力持ちみたいな恰好になつてしまったんだ——ということも、世間の評判から、次第に彼等は感じてきた落下傘部隊の話という、警備隊が不機嫌になる理由の一つは、まさこんなところにあつたようだ。

日本の風土のミナハサ

こうして、落下傘部隊が、華々しい話題を置土産に、このミナハサの地を去つてから半年近い月日が去つたが、その後、表面的にはともかくも至極平和でのんびりとしたその日その日が過ぎて行つた。

ミナハサ——それは、奇妙な形をしたセレス島が、北東へ、ニユツと、タコの足のよう伸ばした半島の地区である。

赤道直下にありながら、涼しい海の微風に、気候も温和で、日中でもせいぜい七十度から八十度。猛獣も悪疫もなく、南洋の楽園といわれる一角である。

しかも、ここに住むミナハサ族は、



ミナハサの風土は日本的でともすると内地の田園を思わせる種の種を運ぶ農夫。

一説に、昔、海外雄飛した日本人の子孫などと伝えられるだけあつて、肌は白く、髪は黒く艶やかに、時おり、日本娘そっくりの顔かたちをしたミナハサ娘に見参することも珍らしくなつた。いわゆる「ミナハサ美人」の産地である。

彼らは、インドネシア人の間では、自他ともに許す最高級の人種で、文化の程度も進んでいるといわれるだけあつて、オランダ政府当時に、その下で官吏や事務官、あるいは士官になる住民は、ほとんどがこのミナハサ人に限られていたという。

インドネシア領最初のキリスト教会が、メナドに建てられた、という歴史が物語るように、ミナハサ人はすべてキリスト教徒であり、回教徒が大部分を占める同族インドネシアの中で、彼らこそは、日曜ごとに、ハイヒールをはいて教会へ、スイス人牧師の説教を聴聞に行く文化性、「西欧文明」追随者としてのプライドがそこにあつた。

適当に文化的で、利口で、ノミ込みが早い、このミナハサ人が、偉大なるヨーロッパ人種を駆逐した空の神兵——ことに、自分たちと顔かたちのよく似た、その英雄的な日本兵の来訪に熱狂したのも無理もない。

インドネシア外領で、文化程度の高いついられる代表的な三種族、アンボン人、マカッサル人、メナド(ミナハサ)人の中で、他の二種族が、「アンボン・ソンボン」(傲慢なアンボン人)とか「マカッサル・カッサル」(ならず者のマカッサル人)とか悪口されるのに比べて、彼らだけは、日本軍隊に対して「メナド・マイルド」(温和なメナド人)の微笑を、要領よく示したし腕をふり、頬の皮膚をつまみながら、「ミナハサ・トモダチ」と叫ぶ愛嬌は忘れなかつた。

もともと、これは多年オランダの植民地政策に押し至められた、彼らの卑風な媚、とのみいうことは出来ない。落下傘奇襲が成功した直後の日本軍の

前に、「ミナハサ・トモダチ」と叫んでとび出して来た、日本人そっくりのその眼の色、肌の工合——男も、女も老婆も、赤ン坊も、我れがちにと出迎えに現われたミナハサ人の胸には、この「同じ皮膚」という身近かな感動があったことはたしかに違いない。

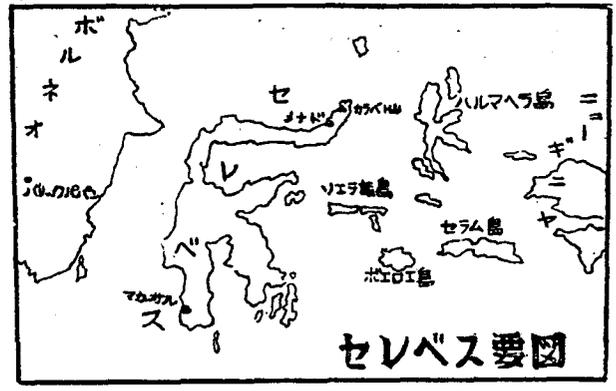
それはまた逆に、陸戦隊の日本兵たちが、彼らに対して同じような親しさを感じたこともあった。

ことに、こうした親しみを深めさせた力の一つは、この地を第二の故郷としている、古い在留邦人出身の通訳たちが、「ミナハサが、いかに日本的であるか」を、機会あるごとに話してまわったことにも原因していた。

なるほど、戦火が鎮まって、一応余裕のできた日本兵たちの眼に映じてきたものは、日本的なミナハサの風物であつた。

爽涼、内地の九月を思わせる微風がサヤサヤと、稲穂の波の上に吹き過ぎる。カラ、ガラ……囃子がなつて、あ

去之から聞いてくるのか、兵隊たちが、こうした話題をとり交わすころには、彼らとミナハサ人たちの親交も日に日に深まってゆくかのように見え



たしかに——ミナハサ人と日本人が同じ種族か、どうかは別にしても、眼もあざやかなコブラ椰子の、緑の並木の上に、あの忘れ難いメナド富士(ハカラバト山)の姿を仰ぐ朝の爽やかな一刻。「コンニチワ」と行き交うたびに挨拶しながら、清潔なメナドの街角を日本語学校へ通う子供らの群とか、盆踊りに似た豊年祭へ出かけるため、日暮れの田舎道を賑やかに駆け過ぎてゆくベチャ(馬車)の鈴の音。さては、飛行場からメナド市に通ずる街道のほとりにあるキノロ温泉の、野天風呂の岩かげで、老いたる農夫が、夕月に吹き鳴らす竹笛の調べなどが、はるばると北の国からやってくる、いまこの地を警備する日本の「ものもの」たちの現に、ふしぎな郷愁をよびおこさせたのは疑いもないことだつた。

だが、この甘く和やかな気分もながくは続かなかつた。

やがて、今度は「落下傘部隊のいさおし」を偲ぶ「お客さん」が、陸統とつめかけてきたからだ。地上警備の陸

ちこちの田の畦から白鷺が舞いあがるこれが落下傘部隊が奇襲した、カカス飛行場にほど近い、トングノ湖畔の田園風景である。

日光の中禅寺湖と同じくらいな、この湖のほとりを行くと、彼らの古い石の墓を祭見することがある。まだ、キリスト教がはいってこない頃のものであろう。苔むした文字こそは読めないが、まさしく日本風な石塔である。

そんな石のお墓の直ぐそばでは、稲田の刈り入れに忙がしい農民が、人影に気づいてか、フツと顔をあげて笑いかける。

軽井沢高原あたりの、澄んだ空気に日射しを感じさせる稲田のなかで、ひよつくりこんな場面によつかると、兵隊たちは、「ハテ? どこかで見かけた笑顔だが——」と、とまどいしながら首をひねる。そして、このミナハサ農民の顔つきが、なんと、遠い北の生まれ故郷の農村で別れてきた、なつかしい人々の面影にそっくりなのに気がつ

いて、思わすドキッと驚いたり、その驚きのテレかくした、こっちも不要領の、ニヤニヤ笑いを返えしたりするのである。

異国に湧く郷愁の感

「メナドは、昔、ここへやってきた日本人が、ミナト、と呼んだ言葉がなまったものだ。知っているか、ゴロンタロの町なあ、あれも、何百年か前に、南方発展の先駆者として乗りこんだ五郎と太郎という開拓者の功勞を記念して命名されたもんじゃ」

「おい、安藤一水。貴様と同じく、アンドンという、名前のメナド人がいるぞ」

「ミナハサは、日本人の血をひいた種族だそうだな。自分たちもそう言っているということだが、なるほど、よく似ているのも無理ないぞ。何しろ、そうなること先祖は同じだから。ことに、ワシなんか天草生まれじゃからほんに近い親戚よ、ハッハッハッ」

戦隊員の心は、またこれで妙にさざ波をたたされてきたのである。

お客さんの来訪

落下傘部隊警備の古戦場に近い、ラングンの町の入口には、BENZV INI PORN、と書いた、大きなアーチが建てられた。企劃院総裁が内地から来訪する、その歓迎のためである。続いて、艦隊司令長官閣下が、威儀を正して乗りこんでくる。京都園地の大御所といわれる老画伯や、大衆文芸の巨匠とよばれる作家が「高級報道班員」という資格でやってくる。戦時国会代表の議員団も顔を出す。

飛行場からメナドの町まで、六十キロの街道は、そのたびかり出されるミナハサ少年団などの旗の波で埋められ何カ月か前、オランダの正確な狙撃兵と悪戦苦闘しながら、ただこの落下傘部隊のために、地上陸戦隊が血を流した、その街道には、こうした各方面の名士視察団の自動車行列を運らね、景

25



送迎用自動車の陸戦隊員は不満気に話した

気のいい砂ほこりを、沿道警備の兵隊たちに浴びせかけていた。

ことに、ラングマンの町などは、この目まぐるしい送迎で忙殺された。

人口二万、どこかの家の竹垣にも、ト

ーモロソンの葉がそよぎ、真紅のカナ

ナの花が庭に咲きほこっている静かな

町。どこか、青梅街道の宿場町を感じさせる、この部落の主だったミナハサ

人たちは、何かといえはこうした「日

本の名士」たちの座談の席に呼び寄せられ、偉大なる日本、偉大なる「空の神兵」について、知っている限りの形容詞をならべさせられた。家々の軒さきには、日章旗が掲げられ、その旗竿は、カナナ、アジサイ、ダリア、コスモスなどの美しい花束で飾られた。リボンをつけた少女たちが踊り、学校教師の指揮のもとに、少年音楽隊が覚えただばかりの「愛国行進曲」を吹き鳴らした。

全く、毎日がお祭りのようだった。

しかも、ほとんどの「お客さん」が落下傘部隊だけに興味を集中させ、話題は、明けても暮れても「空の神兵」で持ちきりだった。

さすがに、長官随行の参謀などは、居並ぶ警備隊幹部に対して、「落下傘部隊に呼応せる協同作戦の功績」について一席述べたが、その言葉にもやはりどこか儀礼的な響きを感じられたのである。

メナドの警備陸戦隊にも、ついに討伐命令が下った。

まるでデキモノが、ふっきれたような勢いで彼らは出かけていった。(今度こそは、バラシエートがない。自分たちが主役だぞ！)それに、久しぶりの戦闘である。警備中のモヤモヤを一べんに吐き出したい気持だったに違いない。

それだけに、いくら彼らが上海戦以来の剛の者ぞろいとはいいながら、この討伐戦には捨鉢的とも思われる荒い戦いぶりを続けていった。

そして、今までにない犠牲者——小隊長二名以下七名の戦死者をたちまちに出してしまったのである。

新聞は、はじめに、この陸戦隊の奮闘を大きく——それもたった一度だけ載せた。

「ミスター・シマダ、私は、明日から

民政官の横暴

誰かが、落下傘部隊だけか見向きもしない事実を、はつきり見せつけられてくると、一旦和んだ警備隊の心境はだんだん硬化した。来る日も、来る日も、落下傘部隊古戦場見学の車の仕度やら案内やらばかりさせられたり、そうした視察団の沿道警戒を繰り返えしさせられている彼らの表情にも、はつきりと、やりきれない気色が浮んでくるようになった。

「ワシらは、こげんなこと、決して愚痴でいうんじゃない。いうんじゃないが、このミナハサは決してバラシエートだけで占領したんじゃないのだ。そりゃあ、バラシエートは人気者だ。花形だ。だが、あっちの英霊の墓には、毎朝ミナハサのベッピンさんが花を供え、内地から交替でやって来る偉い人たちもみんな黙禱を捧げていくというのになあ。これからメナドへ下る山道に処々建っている、別働陸戦隊の戦友

どうしたら好いのでしょ？」

現地の銀行業務経営のため、内地の銀行から派遣されてきた島田氏の宿舎——メナド市のホテルへ、日が暮れて間もないころ、一人のミナハサ娘が、息せき切って訪れてきた。見れば、髪から、ワンピースまで、グッショリと濡れている。ついさっきまで降っていたスコールでやられたものらしいが、何かといえは「サヤ、マール」(私、恥かしい)と口癖にいうほど気取り屋のミナハサ女性にしては、よほどの重大事件がおこったに違いない。

島田氏とは顔見知りのミス・ケイ・カンドー。戦争前までは、メナドの日本総領事館に勤めていたという若いタイプストだった。

最近、このメナド地区に着任してきた日本の民政官から「日本人関係のすべての就職を禁止されてしまった」と泣きながらうったえるのである。

理由をきいて島田氏は驚いた。

話のいきさつ、というのはこうであ

の土曜日の前には、線香一本あげてないことがあるんじやから……片手落ちってもんよ。こんなこっちゃ、兵隊はだんだん動かなくなる」

送迎用自動車のやりくりを担当している、兵曹長が、フトこんな言葉を洩らしたことがある。

この頃になって、中部セレベスの奥地へ、新たな討伐戦が開始された。

オランダ軍の元メナド守備隊のデ・

ヨング、ファン・ダーレン両中尉が、

二十数名の土民兵を従えて、まだゲリラ戦を続けているというのである。情報によれば、一旦ジャングル内に身をかくした両中尉は、或る夜、ロンドンに亡命したオランダ女王の放送を傍聴して、いよいよ抗日戦の肚をかためたのだという。

「このメナドでは、落下傘部隊の話は禁物です」

と、この討伐戦に参加するためやって来た従軍報道班員が、老通訳からこのように注意されたのは、この時であ

26

陸戦隊員の鬱憤

217 ミナハサ風土記



「白地に赤く……」と歌う混血児

る。戦争勃発と同時に、彼女は、メナドの日本総領事とともに、オランダ軍によって捕えられた。ミナハサ人であるという理由で一旦は釈放されたが、彼女は越くまで「日本総領事館の一員」たることを主張したため、日本人と一緒にジャワに連行、抑留されてしまった。

間もなく、ジャワ作戦。日本軍の上陸によって解放された彼女は、喜び勇

んで、ミナハサへ帰ってきた。そしてメナドの民政部に出頭して、「さあ、これからはいくらでもお手伝いできます。どんな仕事でもやらせて下さい」と申し出たものだ。

ところが、彼女に与えられた仕事というのは、タイプライターでもなければ、日本語翻訳でもなかった。西日本の或る港の税関官吏がりだというその民政官が、ニッター笑っていった言葉は、

「どうだ、そんな仕事より、俺のメカケにならんか」

という意味のことだったらしい。仰天した彼女は、若い女の怒りもこめて烈しく拒絶した。ところが、それから暫くして、どこの会社へ働き口を探がしに行っても、ハネつけられてしまうのである。彼女——元総領事館勤務タ イピスト・、レイ・カンドーを雇用してはならないという達しがまわっているとのことだった。

危険なこのシッへ返えしに、憤慨も

し、生活のために困りもして、島田氏のもとに馳けてこんできたというわけだった。

その翌日から、島田氏は、ジャワ銀行メナド支店の接収整理の仕事に、彼女を強引に雇い入れ、この小波乱はともかくも済んだ。

しかし、こんな事件が、二、三重なつたのがキッカで、島田氏のもとに反民政部派の人たち——元貿易商の経済顧問、建築担当の技師などが、茶飲み話に集まって、この対立から、民政部のいわゆる「悪政」が、ヒョイヒョイと明るみに出てきた。

戦鬪と酒には、底抜けに強いが、政治の方は「全然わからんのでう」という警備隊長は、天神様みたいな刀をブラ下げて威張りかえり、この民政官一行が内地からやってくると、待ってました、とばかり一切の行政をまかせきりだった。

それで、民政官はお山の大將だったある民政官は、二号にしたミナハサ

娘の家から毎朝、お役所まで自動車でご出勤。おかげで、その送り迎えの自動車を運転する下役が、「俺が、日本から水盃までして、セレブスまでやってきたのは、何もタイコ持ちの真似をしにきたんじゃないぞ」と憤慨して正面衝突。とうとう、マカッサルへ転任させられてしまった、という噂話ととび出した。

「ミナハサでも、良い家庭の娘たちはこのごろ結婚をさかんに急いでいるようです。妙な日本人がふえてきて、イタズラされてはかなわんというわけからでしょう」

「こんなことで、今までの信頼が失われていくのは残念ですなあ」

「結婚といえは、トングノ湖あたりへ行くと、腹の大きな娘が時々、ヤマモトサン、イマ、ドコニイマスカ、なんて訊ねるんですよ。あれらは、いったい、落下傘の子ですかねえ。また、混血児がメナドにふえますねえ」

日本人が顔を合わせると、こんな話

が出るようになった。

メナドの町はずれには、大谷派の坊さんの経営する日本語学校があった。そこには、かつてこの地に立ち寄った日本の雑貨商、漁夫などが、ミナハサ女に生ませた混血児が、無邪気に「白地に赤く、日の丸染めて……」を合唱していた。

陸戦隊ミナハサを去る

討伐戦が終って、陸戦隊の一部はヤがて移動することになった。ミナハサを去って、どこへ行くか——兵隊は誰もそれを知らなかった。途中、警戒の掃海艇が、アメリカの潜水艦のウヨウヨいるマカッサル海峡を通り抜けて、メナド港にはいつてきた。この前、落下傘部隊が移動の時にも、やはり付添いにきたのと同じ掃海艇である。

「この前、落下傘部隊が、この港を出ていく時の見送りといたら、物凄かったもんですよ。何しろ、日本人そっくりのミナハサ女が、日本の国防婦人

会そっくりの白ダスキをかけてね、金切り声の日本語で、サヨウナラを口々に叫ぶんだ。ハンケチや花束を振ってね。甲板から眺めていると、内地の妻や愛人に送られているような錯覚に陥入ったよ。兵隊も喜んだ。防諜上、どうも面白くないのだが、どうも止めさせられもせんぞね、弱ったよ……」

掃海艇の艇長が、潮焼けした顔を苦笑いさせながら、こう語った。

いま、行先も知らされず、小さな輸送船にスシ詰めに乗せられていく、この陸戦隊の後姿を黙殺して、この艇長までが、落下傘部隊の、当時の華やかな見送り風景を、まだマザマザと思ひおこしているのだった。

「燈火管制発令」——こんな警報が、いままでも、ともかくも平和だったメナドの町にはじめて響きわたって、戦火の記憶もかなり薄れかけていた人々を、久しぶりにあわてさせたのは、それから数日後の夜であった。

死刑囚

大尉は収容と銃口の前に立った。すかさず掛る号令、耳を聳く銃声、ガツクリと身体が崩れた。かくて、チデンの鬼、と恐れられたジャワの死刑囚第一号は静かな最期を遂げて行った。

朝日新聞社企画部長

河合政

私は見た

物のゆたかな従順な民族のインドネシア、そういわれたジャワで、私はマル報だった。

マルに報の字を記した迷子札のような金風を、袖にくっつけておかねば、外に出られぬ報道員だった。そしていくさに負けると、はじめて軍人軍属なみに昇格して、波止場の苦力であり道路人夫であり、清掃人夫であり雑役夫であった。日本人としての誇り？そんなものは、まさかなぐり捨てられた。自尊心も外聞もあつたものではなかつた。

た。

しかし、私は最後まで新聞記者であつた。

私は見た。日本人のさまざまな成果的症状を、敗戦にうちのめされたものと、勝ちいくさにおこるものを、報復に燃える憎悪の目と、その前で相咬む同胞の姿を、あるいは従容と銃口の前に立つ人を、あるいは罪を恐れて脱走していった人々を。

辛い記憶も年がたてば楽しいものという。私にとつても楽しい思い出はある。しかし、私はまだ断じて楽しいかつたことなどつづらうとは思わなかつた。

死刑第一号の判決

戦犯裁判、そして死刑のトップは、西部ジャワ、チデン抑留所長の會根憲一大尉であった。抑留者に対する苛酷な取扱、私刑、病人に薬品を与えなかつた等々が、この一大尉に科せられた罪で、日本人の、特に軍人軍属以外のわれわれにとっては、一大尉のみが処刑されることはおかしいのであつたが、きびしい命令の執行者で、直接の抑留者からチデンの鬼と恐れられた會根大尉は、憎悪の焦点になつていて、その裁判にしても唯憎悪と報復だけのものではあつた。

その弁護がオランダ語以外を許さぬといふこともその大きな一ツ、裁判の最中、裁判長が弁護人や被告に罵声を浴びせて、発言を中止させたりして、傍聴人をよろこばせようとしたものだ新聞は「チデンの鬼」の太々しさを誇張して、人気とりをやつた。

いかなる弁護も許されず、被告のた

めに利益となるような証人も申請させない。しかも裁判の形式をとつて、一応言わせた上で死刑にしようという事が、初めからわかっているだけに、作業に明けくれる日本人にとって辛い話であつた。

作業隊のために発行しているガリ版のニュースは、この実情を日本人に知らせるべく、公判前から記事を書き、ストライスウェク刑務所における彼の動静を報道した。これはやがて日本人を刺殺するものとして禁止されてしまつたが、当時の資料が幸いに残っているので、死刑第一号の會根大尉のことを記録しよう。

二十一年七月十五日(月)

オランダ側臨時軍法會議の戦犯者裁判は、十五日から開廷され、ここにバクビヤ抑留所勤務であつた會根憲一大尉が、俘虜並に抑留者に対するあらゆる種類の罪名の下に裁判される。同大尉は終戦後連合軍当局に逮捕され、十一月下旬シンガポールに護送、半蔵

巨る嚴重な取調べを受けた後、去る五月バクビヤに戻され、ストライスウェク刑務所で裁きを待っているが、十一日、はじめて弁護人平賀司政官との接見を許され、種々打合せを行つた。ジャワにおける日本人としてはじめて戦犯者裁判に立つ會根大尉は、軍司令官以下戦友の心づかいを泣いて感謝するとともに、無量の思いをこめて、「作業隊のみんなによろしく、會根は堂々と裁きを受けます」と語つていたという。同大尉は和歌山県日高郡由良村の出身、本年三十六才である。

二十一年八月六日(火)

會根大尉に対する第一回公判は、裁判長病氣のため延引していたが、五日午前九時から開廷され、わが方からは平賀司政官が弁護人として、又小川法務部長、堀内司政官、山西中尉の三氏が傍聴人として出席した。法廷はもとジャワ奉公会本部、かつての抑留者らしい多数の男女が傍聴席を埋め「チデンの鬼」と彼らの間に呼ばれた會根

大尉に好奇と憎悪の視線を集中した。この日會根大尉はやや衰えた身に正しく軍服をつけ、戦友心づくしの差入れの帽も新しく、毅然たる態度で入廷し、起訴事実と簡単な証拠調べを受けたが主として収容所関係の出来事についてであつて、チデン抑留所には触れなかつた。第二回は七日に行われるが、進行状況から推して、第二回は判決まで進むのではないかと見られる。尙この朝、日本に協力した罪によつて混血の一青年が懲役七年の判決を受けたが、一人の附添も弁護人もないみじめさに、わが方からの人々は暗然としたといふ。

同年八月七日(水)

會根大尉第二回公判は七日午前九時開廷、この日、わが方から傍聴人として、馬淵軍司令官、宮元参謀も出たが開廷前會根大尉と会談する機会を得て種々激励した。審理は俘虜収容所における殴打事件を主とするものであつたが、この日裁判長は、殴打する心境に

28

訊問を進めたところ、「會根大尉は收容所における殴打はあくまでも職務の遂行のためであるが、われながら神経質であったことを認める、殊に今日の心境においてそれを思う」とのべ、いかにして心境が変ったかの訊問に対し「逮捕早々チデン抑留所に連行されてオランダ將校らに激しく殴打され、シンガポールにおいては全く理由のない私刑によって殴打され、虐待され、昏倒したこともあり、殴られることがいかに苦痛であるかをしみじみ知った」と言え、裁判長も陪席の英人將校も驚き顔に事実を確めた。かくて審理は漸くチデン抑留所に移り、間もなく開廷、第三回目は九日である。

無抵抗の日本軍將校がまる裸にされて、衆人の前に立たされた揚句、糞溜に追いこまれ、クビまで浸ることを強いられたという。取調べに対し否定するたびに、手指の爪を一つずつ剥がれた將校があると云う。日本軍もやったから——というのかも知れない。そしてそれは事実かも知れないが、軍に深い嫌悪の情をもったわれわれが、こうした事実を涙を呑んだのである。

この戦犯者を附近に駐屯している部隊の兵が襲うのである。守衛に武器をつきつけて門を開かせ、監房を開かせて、誰でも構わない、日本人を前庭に引きずり出して多勢で殴るのである。この殴られる大部分が死刑囚であったと、別の監房にいて目撃した人々がジャワに帰って報告している。會根大尉もこれに會って、心境説明に當って口に出したのであろう。

年八月に至る間に、直接間接に死に至らしめたもの二百七十二名、いかなる弁明を行うと雖も一点の同情、情状酌量の余地なしと、死刑を求刑、論告を終った。これに対しわが平賀弁護人は、被告の行為は計画的のものに非ず、反則者の懲罰が、適当を失したのである。又多数の死亡者で、若し被告に責任ありとせば、一人一人についてこれを審理すべきであり、戦犯裁判なるが故に単なる推定によることは、フェアプレーに非ずと弁じつつ、親が子を、兄が弟を叱責する如くに、被告の度を失した行為を責め難じ、日本人として国際法規による裁きの前に、まず武士道に反する行為として罰されねばならぬ、弱きを扶けるこそ武士道の重んずるところではないか、と喝破、そして被告は戦争の緊張から解放されていまま全く悔いて、すべてを自白し事実を認めている。ここここに到ったのは決して被告個人の責任のみでない。

裁判長並に陪席の諸官の明察を信ずる。願わくば正しい裁判を以て裁かれたいとのべ、最後に被告はすでに死も覚悟して断を待っていること、聖書マタイ伝十八章二十一節を引用して、寛大な処置を希望して弁論を終った。判決言渡しは追って通知されるが、この日傍聴人はもともと多く、「チデンの鬼」に集る憎悪の注視は息苦しいばかりであった。

本人らしく立派に死ぬかということを考えている。私がシンガポールにいた時、日本人被告には差入れはもとより面会もなかった。そしてそのまま処刑されていった。それを思えば自分程幸福なものはないと思う。

62

彼は會根大尉に面会して帰ると、必ずその印象を語った。ある夜は怒りに身をふるわせ、ある夜は自分の無力を顧みて泣いた。

いかにしたたかしくても、いかに正しい理論を以て相手の虚をついても空しかったのだ。

會根大尉に残されているのは死だけだったのだ。

一方、この二十一日、抑留所関係の戦犯容疑で收容されていた軍人軍属十二名と朝鮮人五十三名(主としてスマラン地方)が、突然釈放され、すぐに各作業隊に配属された。

病人以外に休養することは許されなかったのである。

この中には一度中部ジャワの港から帰還船のついで、シンガポールに近いガラン島まで行った老警察署長らがいる。ガラン島上陸の時、誰か警察関係の人はいませんか？と軽く声がかかったので、ハイと手をあげたら、同時に手をあげた二三人とともにッチ

ットとわきへ呼ばれ、何かの相談だと思っているうちに別の船に移されてそのままジャワに戻され、グロドック刑務所に投げこまれてしまった。以来ほとんど取調べはなかったが、毎日刑務所内の作業に狩り出され、折々首実

検された。ある時、自分らが支配していたオランダ人の抑留者が、警察の正

服をつけて現れ日本語で「氣をつけ」「頭中」を命じた時には、ゾオッとした。しかしすでにこれを予期して、思い切りぶしうひげを伸ばしていたので、顔をしかめてその場をのがれ、以来ひげによる姿貌に努力して、ついに白目下に出たわけだった。

同年九月六日(金)

會根大尉は六日死刑の宣告を受けた。この日さっぱりと理髪した會根大尉は、午前九時平常の如く出廷、流石に緊張する裁判長、傍聴人の視線の中を静かに位置につくと、裁判長は慎重に判決要旨を朗読、つづいて死刑の判決を朗読した。一瞬しんと静まった

法廷に、會根大尉は静かに頭をさげて退廷したが、傍聴人の中にはいかなる関係の人か、涙を浮べて目送するものも見うけられた。

諸種の事情を綜合してこの判決は、予期されていたが、尙一縷の望みを以て罪一等の減じられんことを祈ったわれらの希望は、空しくここに崩れ果てた。判決後の會根大尉は微笑裡に、「覚悟はできております。安心して下さい」

と言ひ、約一時間、平賀弁護人に心境を語り、後事を托したが、特に、「抑留以来さまざまの心づかいを以ていたわって下さった皆さんに、會根が心から感謝していることをお伝え下さい。自分の行為が日本の名を傷つけたことに思い到って、唯々慚愧にたえません」

と力をこめて語っていたという。かくして會根大尉に残るものは、刑の執行のみとなったが、われらはなお最後の瞬間まで彼のために福音の訪れ

ることを祈るものである。

天皇陛下万歳

右の記事がニュースに掲載されると間もなく、嚴重な命令が来て、戦犯裁判について、くわしいこと及び主眼をまじえた記事は許さぬと通達された。會根大尉の動静はかくて、平賀弁護人と小出哲夫神父から伝えられることを口伝によつて知らせるばかりとなつてしまつた。聖書に読みふける彼、懸命に和歌をつくろうとしている彼。九月二十三日のニュースは、はじめてま

まづ彼の歌をのせた。

判決の言渡しをうけて

慈父たりしあゝ阿南隊長いまはなし
我も呼ばれ慕いてゆかむ

アンボン島派遣諸兄の訃を悼み

ともどもに睦みし友は先立てり君眼
せよかし我も至らん

弁護人も神父も若い熱血漢である。

これが腹の虫を殺して死を待つ人を激さめ激励するのだからどんなにか辛かつたろう。二人ともキャンプに戻るたびに泣いていた。この報告を聞いて馬淵司令官も泣いた。

それからしばらくして會根大尉の死刑が執行された。その日は馬淵司令官平賀弁護人、小出神父の外に、會根大尉と同郷の二人が作業隊から出て来て刑務所の一室で面会し、しばらく話合つてから、小出神父だけが附添つて刑場へ行ったのだが、二人は腕を組んで歩いて行ったという。この前日であつたと思うが、會根大尉は小出神父によつて洗礼をうけていた。

その夜、キャンプに戻つて来た小出神父は昂奮して食つてかかるようにモノを言つたり、上を向いてラテン語で何か叫んだりした。酒好きでユーモラスな神父は、日頃祈りの中のドミニエがノミネーにきこえるなどといわれて、いつも笑いを絶やさなかつた人だが、この夜は恐ろしいつきつめた表情で、

流暢に何か言つたあとは深い沈黙に陥るといふ態度だつた。その夜の話を神父は刑場へ行く距離の歩数をかぞえながら、同時に會根大尉の耳に口を近づけて、神の福音を説いていった。會根大尉はしっかりした歩調で歩きながら、神父の言葉に子供の如くにコックリ、コックリとうなずいた。

「あいま召されてゆくものすなおさ、純粋さ」神父はなにか叫びたいような気持で、そこまで行きついて立止り、もう一度深い思いで會根大尉を抱いた。

銃殺の刑場に静かなまなざしを投げた會根大尉は「神父さん、バンザイをいわして下さい」と口早に言った。バンザイはむすかしい、これはえらいことになつたと思つたが、神父はオランダ軍の執行官に歩み寄つて、「祈りを許して頂きたい」と申し入れて諾をとつた。銃を持った七人のオランダ兵も指揮官も、唯漠然と見まもるばかりの中で、ニコリした會根大尉は、所定



ダーと銃口が火を噴いてガクッとして膝を折った

の位置につくと易々と目かくしを受け「どちらですか」と平静に方角を聞いた後直立「高らかに「天皇陛下ペンザイ」を三唱、そして十五メートル位はなれて構えられた銃口に、静かに向き直った。

間髪を入れず命令、銃声は一発のようについた。ガクンと前方にのめって膝をついたがそのままグッとうつ伏せになった。

その姿をカッと目をひらいて見つめていた小出神父、とたんにいま発射した銃を持ったまま三人ほどのオランダ兵が、フラフラとよろめいて倒れてしまった。

「チデンの鬼」會根憲一大尉の、静かな、そして厳肅な死刑であった。

小出神父によって語られたのは、およそこのようなものであった。

もちろんこれはニュースに掲載することではない。しかし一度耳にしたら永久に忘れない印象的な、その様なふんい気と話であった。

歌をつくろうかな

會根大尉に死刑の判決のある直前、法廷は同じく抑留所(スマラン)で、激しく抑留者を殴った木村成坤君(二五)の公判をはじめていた。この明朗そのものの朝鮮青年は、自分のやったことには絶対まぢがいも不法もないと主張しつづけ、日本軍人の命令でやったことだからというように弁明させる

べく、平賀弁護人が、懸命に説いたがついに主張をつづけて、九月九日公判そして十一日には死刑の宣告をうけてしまった。

「何故殴ったか」という裁判長に、「生意気だからだ」と応じ、「竹棒で殴ったか」に對し、「イヤもっと固い棒だ」と答えるこの青年を救うみちは全くなかったのだ。

余り相手を怒らしてはと平賀氏が制しても、「いいんですよ、覚悟してんだから、僕は悪いなんて決して考えやしませんよ」と言うばかりだった。

死刑は明かであったし、しかも相手はいそいでいた。

十一日に死の宣告をうけた成坤君は翌日から独房に移され、厳重な監視下におかれたが、最後まで朗かで「何をいってやがんだい」といったような調

子、しかし、九月十四日平賀弁護人が「何か書いておきなさい」とペンと紙を渡すと「うたをつくろうかな」と笑って、次の手記をのこしている。

十一日宣告をうけた翌十二日より独房に移さる。朝ごとの起床合図の空砲の音に、今朝も目ざめ密越しに望楼の方を見れば、衛兵のもてる銃の先よりかすかに煙立ち消えぬ。このときふと思ひ出でたるまます。

銃声に
ふるさとの夢破れて
煙のごと消ゆ
思ひ出の山川
そのすがた姿らねど
変りたる我がすがた
死はおそれずといえども
友の情に我は哭くかな

死刑判決の日、平賀弁護人が待っている部屋へ、お早うございますと快活に言って入って来た彼は、キリッとした軍風の服装の肩から正しく水筒

をつるしていた。

いままで例のないことだったので、「ホウ、水筒ですね」と平賀氏が言うと、彼はニコニコしながら、「エエ、おなかをこわすといやですか、熱いお茶をつめて来たんです」と答えたという。それまでこらえた平賀氏は、この答えでもう胸がいっぱいになり、何も言えなくなったと語っていた。

木村成坤君が第二回目の死刑執行だった。

目かくしを拒んだ彼は、それまで一度も、口に出さなかった「朝鮮独立万歳」を叫んで死んでいった。

これより数日前の九月三日、東部のスラバヤ刑務所に収容されていた小スラバヤ地方の越野民政長官ら十七名と、チモール島クーバンの戦犯容疑者三十名が、船で送られて来てそのままグロドック刑務所に収容されたが、翌日全部釈放、ホッとする間もなくこの日、

シंगाポールからは山本藤一郎少将中田大佐、法務部の栗原曹長ら十三名が、イギリス側の調べを終ってオランダ側に移され、同様グロドックに収容された各作業隊から百六十九名の多数が指名されて、この日チビナン刑務所に送られた。憲兵が大部分で、いずれもことあるを予期して、重労働に服していた人たちであった。

この戦慄のなかで近藤周一軍医中尉の公判が進んでいた。中部ジャワ各地の抑留所に対し、医薬の供給が十分であったというのを中心にした罪でこの審問の粗雑さに正義感を爆発させた平賀弁護人は、検察官が死刑を求刑するや、その場で法理論を展開して一歩も退かず、ついにその場から退けられ、アンボン島へ島流しという目に会った。

しかしアンボンの戦犯法廷で彼は、数人の死刑の求刑をくつがえしている東部を中心にして各作業隊は、あらゆる余計な物資を集めては差入れを行

った。
 煙草を巻く紙の代用として軍用便箋が切られ、麻雀牌までも手離された。同時に刑務所内の生活もいろいろと詳しく洩れてくるようになった。山本少将の指揮下に収容者一同、規律正しく獄内作業にいそしんでいると言っても、トラブルは絶えなかったらしい。配給されたパンが他の者より少し小さいかったとて、たけり狂った高級将校の話などは、差入れに行つた若い将校が、受取りに出た収容中の戦友からささやかれたものだった。

ジャワに残つた最後の西ジャワ作業隊が閉鎖したのは、二十二年の三月であつた。

帰国に雀躍する一群と、帰国の話に男泣きする戦犯容疑者の一群があつたわけだ。

その頃死刑を宣告されたのが、かつて軍宣伝部にいた芦田大尉だった。美校出の弱々しい美青年だったが、俘虜護送の隊長としてある島にゆく船中、

部下が俘虜を殴打、弱い性格からこれを押え切れなかつたという気の毒なものだったが、法廷ではすべては自分の責任であると主張、部下の中にはこの弱い隊長にそんなことができるものか、などというものもいたが、やはり責任者として死刑にされた。「日本人の、かんたんに人を殴る習慣これがどんなに相手に屈辱を与えていることか。殴ってはいけない、殴るなかれと、どうか日本のみなさんに言つて下さい」

これが芦田大尉が最後に言つたことだった。

脱走

ジャワにおける作業隊の解散、全員帰還の決定は、司令官以下の幹部をホトとさせるものであつたが、同時に残される戦犯関係者の問題が大きく浮び上つて来た。

二十二年四月三、四日ごろ、日本人すべてがジャワを去ると伝わつたため

であつたらうか、チビナン刑務所に収容中の七、八名が、突然脱走を企てて二三名は射殺されたが、あとは塙のり越えて、外部に待ちかまえていたインドネシア軍のトラックで逃げてしまつたという事件が伝えられた。

この頃までに死刑を執行されたのは會根大尉、木村成坤君で、近藤軍医大尉、芦田大尉が判決済み、死刑を求刑されているのは、安井軍医中尉、永松大尉、新地警部、岩政憲兵大尉、大塚憲兵曹長、大山、柏村、松岡各雇員らだった。この雇員という人たちの中に朝鮮人が多かつたことは、問題を複雑にし面倒にしていた。日本軍の方から

は、これらの人々がすべて、日本軍の使用人であり、日本軍の命令によつたものであることの上申も行われた模様だが、一顧も払われなかつた。

一方シンガポールの軍法会議でも、ジャワ関係の俘虜虐待で、阿南中佐、倉島、島田軍医、植田各大尉、川井、森岡、曹長が死刑の判決をうけ、前軍司令官の原田熊吉中尉と軍参謀馬杉中佐はすでに死刑を執行されていた。

オランダの目が光っている限り、戦犯者についての相談や資料の蒐集は困難である。

関係者はすべて分担してあらゆる資料を記憶し、あるいはメモをとつてこれを隠し持った。そして船がジャワを離れるとすぐ、船底に集合して資料をとりまとめた。

私は唯一ひとりの新聞記者として、これらの一部始終をみていた。
 みんな真剣だった。そしてみんなが熱心に申し合せたのは、日本に対する憎悪感を個人に集中、されてはいる戦犯

容疑者のために、内地へ帰つたら全員が、その実情を吹聴すること、進駐軍の取締りは厳重であろうから、これはまず各自の家族に理解させ、さらに近隣の関係、知人関係等に伝えてゆくようにする、そして実情をとりまとめたものを、マッカーサー元帥に提示して出来る限り速かに戦犯取扱の緩和をはかつてもらうというようなことであつた。

要するに内地の事情が何にもわかつていないのだから、果してこんなことが可能か否かも見当がつかないのだがこの集りを領した空気は、快いものだった。

各人の報告には、やる方ない憤懣や悲嘆があふれて、実状報告とはいいたいものではあつたが、祖国を目ざす船の底で、俘虜生活に疲れた元軍人、元軍属あるいは邦人が、おのれの今後このことはさておいて、戦犯者のために相談会をひらいたことは、内地の実状を知らないだけに純粋な感じがした。

この船底会議は結局、報告書の作製と、最後の餞別として、乗船したものから、差入れ品を買ひ求める費用をつくる物品の寄附をあつめることを決定した。

これも快いことであつた。命令受領者によつてこれが各班に伝えられるとすぐ、物品は所定の場所へ統々と持ちこまれて、忽ち大山を築き上げた。内地は特に衣料に窮しているから、失わぬようにといつていたにも関わらず、衣料を主とするこれらの寄附は、内地到着の直後、金に替えられる間もなく心づくしの品物となつて、ジャワに送られたことはもちろんである。

憎悪と報復の裁判

さて私は一応ジャワの戦犯者についての記憶を以上の如くにまとめてみたが、これは私の知つた範囲にすぎず、又極めて平板な記録にすぎないのだ。掃蕩船の船底で耳にした報告の、身の毛もよだつ獄舎生活、常識を以ては考

32



検事こそ神の名において裁くべし……

えられないマカッサルの戦犯裁判、死刑に次ぐ死刑、一体このような話が、いつ如何なる人によって公表されるのであろうか。

疑問はまだ多い。戦犯として、戦犯なるが故に、恐るべき憎悪と報復を志とする裁判をうけた人々の家族は、この実情を知っているであろうか。

私はジャワに関する限り、当然の報いとして戦犯の刑を受けている多くを

知っている。

従って船底の会合においても若干の批判をもって報告を聞いていた。

それだけに新聞記者の残っていたいなかったと思われるマカッサルの話は、私の記憶の限り書きとめておきたい。

これを話した人々は、二十二年の二月にマカッサルから、ジャワのチビナン刑務所に移された囚人であり釈放者である。

マカッサル裁判の裁判長は、オランダ軍の中佐で、これがかってマカッサルの市民収容所に収容され、日本軍によって支配されていたのだから、すさまじい報復だった。

彼は検事が五年を求刑すれば十年を判決し、十年は二十年、ある海軍上曹がシンガポール裁判で無罪として釈放されたのを、死刑にしてしまった程のエラ物だった。

検事は、かって日本軍の俘虜になっていた大尉で、恐らくは日本軍の激しい鞭の下で歯ぎしりした人であろう。

こうした中で簡単に死刑が判決されて行ったのだ。

終戦と同時に逃亡した憲兵が捕われ日本軍の裁判によって無期を判決、進駐した海軍もこれを承認したが、オランダは改めてこれを死刑にしてしまった。

囚人処刑の故を以て軽く取調べをうけた民政部の一零部は、いきなり死刑を判決されて憤慨、貴様たちに殺されるものかと、自殺してしまつた。

樫井軍医大佐、同秋山大尉の公判では、被告が用意した説明用のメモを、開廷前に取り上げてしまつて説明せず、さつさと死刑を求刑、この法廷では収容所附近の兵器倉庫に防空壕を造つた田辺という海軍大尉が、その故を以て五年を求刑されていた。

公判廷をひらくと共に、出廷した十五戦犯容疑者中、十一名までが死刑を宣告されて、残りの八十名は当然混乱した。命が惜しいのではない。堂々と戦つて来た身が、堂々と裁かれようと

マカッサルでこの男に既せられたら命はないと言われた程、罪人をでっちあげたらしい。ニセ投書、ニセ証人が彼の武器で、傍聴人がびくくりする程の求刑をしては、被告を見おろしてニヤリと笑つたというのである。

それは実に、死の恐怖よりも、そのような無謀極まる求刑をする検事に対する、憤りの方が先立つものであった。ある戦犯容疑者はまなじりも裂けんばかりに検事を睨みつけ、またある戦犯容疑者は腕を固くしげられていながら身もだえして検事席におどりあがるうとした。

同胞だからとて日本人戦犯を同情的に見るのではない。もちろんわが戦犯の中には残虐行為をした者もある。しかし、ほとんど正常な精神状態を失っている戦場における行為は、ある点では精神病者と大同小異であるといえよう。それを以てこれを見れば、法という名を藉りて自己の野望ともいべきものを満足させるこの検事こそ、

するの、唯憎悪と報復だけの裁きをうけるのは堪えられない。

脱獄を主張するもの、自決を言うもの、日本政府が、セネバス、ボルネオアンボン、モロタイ、ボンチアナックの各地を見放したとして恨みを言うもの、ついに苦心の末に、マニラ、シンガポールを歴て、マカッサル司令部に陳情すべき密使も発せられた。この密使が携行したのは血判状であつたことである。

当時の日本政府に何の打つ手があつたらう。しかし死刑、有期を問はず、戦犯容疑者としてとらわれた人々は、唯ひたすら祖国の救いを待望した。他には救われる何らの方法も考えられなかつたのだ。

だがしかし、当時の日本政府にはなんの力もなく、また国民の感情も戦犯者に対して国家の恥だという觀念が強かつた。いすくぞ知らん、これら戦犯の半数以上が、まったく無実の罪で処刑されていたのである。

神の名において罪せらるべきではあるまいか。

裁判の通訳は憲兵大尉と称していたが、これが公判になると被告の弁明など決して採り上げず、イエスとノー以外には通訳しなかつたという。しかも公判廷以外の取調べの折には、必らず殴り蹴とばし、拳銃をつきつけたりした。極り文句は、「ぐずぐず言う」と公判廷から追い出して、欠席裁判で死刑だぞ」だった。

日本から来た弁護人は、ここでは俘虜待遇である。いかに弁護しようと努めても、被告との面会はオランダ側の立会なしには許されず、法廷では金網張りの席におかれて満足な発言もできない。

このような条件の裁判なのである。司令官鎌田中将は刑務所から、手錠足枷のまま法廷に引き出された。下士官は後手にしげり上げられて出廷した。教人を珠数つなぎにするのは普通のことだった。

ペンに倚りて

— ジャワ新聞の足跡 —

インドネシア独立宣言の大見出し、これこそ三百年に渉るオランダの圧制、それにつづく日本軍政、この二つの双壁の間に萎縮していた報道の自由が、八月二十七日を期して獲得された民族の気概だった。

朝日新聞社外報部

谷口五郎

義街で賃刷り

裏街の間の口のせまい薄ぎたな華僑の印刷工場で、バサリバサリと平版印刷機で千部か二千部を「じか刷り」していたのが戦前のインドネシア新聞であった。

形ばかりの事務所を編集して、こんな町工場で賃刷りをやっていたのだ。この種の新聞はいずれも民族政党の機関紙の性格をもっていた。政党運動は全国的な組織だから全国紙的な立場をもっていたはずだが、発行部数は少しもびなかつた。購読者は党員やその

シンパで一人で三十部、五十部と買ってこれを同志にばらまくという方法でそれも週刊紙などという貧弱さで、一年とはつづかぬものが多かった。

日刊紙としてインドネシア商社の広告をのせた四頁紙もあったが、外電も貧弱で紙も悪く、贅沢な広告をもった八頁建てのオランダ語新聞とはとても比較にならない。混血児を入れて二十五万のオランダ人を中心に、インドネシアおよび華僑の知識層を讀者にしていたこれらのオランダ語紙は、いずれも商業新聞だが、発行部数が二万もあれば最大の新聞に属し、オランダ

ことであつた。

朝日から鑄造機を空輸

ジャワ方面作戦部隊の宣伝班は、高雄港でジャワ上陸作戦待機時代から活躍をはじめ「うなばら」という陣中新聞をだしていた。

三月はじめジャカルタ入市と共に新聞班はとりあえず東印度日報社を接収して、新聞の発行をはじめた。オランダ政府は全建物をそのまま敵産として管理していたため、紙も活字も機械もそのままであつた。印刷機は平版で一枚ずつ差込んで刷る旧式な日本製の印刷機ではあつたが一応は間にあつた。やがて同市最大のオランダ語新聞「ジャワ・ボーテ」紙を印刷していたユニーク工場が接収されて、本格的に陣中紙を印刷することになった。ところが引越中、運転手の不注意から少なくない活字を積んだままトラックを運河のなかに落してしまい大きな打撃を受けた。こんな事情で陣中紙が活字の不足に

ダ人記者たちは相当高い生活水準をもっていた。

通信社としてはアネクがあつて、ロイター、アヴァス、UPや同盟との特約をもっていたが、この外電通信を賣うことの出来るインドネシア新聞は極めて少なかった。

インドネシアでも中等以上の教育を受けたものはオランダ語が読めるのでニュースを読むだけならばオランダ語紙の方が報道が早いから、それだけでも魅力があつたわけである。

華僑紙は二百五十万の華僑を対象として華字紙が発行されていたが、植民地生れで華字紙の読めぬものに対しては華僑なまりのインドネシア語新聞が発行されていた。

また日本語新聞としては「東印度日報」が唯一の邦字紙で、ジャワを中心にしてスマトラ、ボルネオ、セレベスなどに在留する日本人八千を讀者として約二千部を発行していた。専属の工場をもつて四頁の夕刊紙を出していたが、

悩んでいたとき、村山朝日新聞社長がジャワを視察に来た。「陣中新聞が活字にこまっている」という話を聞いて帰ったが、それから間もなく朝日機でジャワ軍司令部に対して、日本活字に使用する完全な字母と鑄造機が寄贈された。こうした新聞に対する朝日の誠意が大きく評価されて、当時の今村均司令官はジャワ地区における邦人新聞の委託經營権を朝日新聞に与えることを決意したというのが朝日のジャワ進出の真相である。

当時日本内地では、南方のどの地区の新聞經營権をとるかということが大きな問題であつたがどこがよいかについては意見がいろいろ対立していた。やがて鈴木文史朗初代社長が赴任したが、まず問題となつたのは「うなばら」という新聞の題字であつた。はじめて聞いた印象では海軍関係の同人雑誌のように感じるとか、新聞という言葉は日本人が作ったものであるから、当然これを使うべきだとか、さらに新

定価は一月五ギルダーで、戦前の為替で十円に相当するから、十数員建てで一月をそここの日本の新聞にくらべると法外に高いものであつたので、部数は少なくても、独占的立場にものゝいてわざと順調な経営をしていた。日本新聞は特異な立場で日本の商榷擁護の論陣を張っていたが、オランダにドイツ軍が侵入してからは、日本が枢軸国として取扱われたため、同紙の生命であつた同盟電は一切の軍事、政治記事の新聞掲載を禁止されたのでわれわれはロイター、アヴァス、アネタなどから取材せざるを得なかつた。同時にジャカルタにいた日本からの特派員たちは、日本語による通信を禁止されたので、もっぱら英語で特電を送っていた。

われわれ現地新聞記者の家宅捜索は一切ならず抜打ちに行われ、またしばしば警察警告も行われたが、最後の邦人総引揚げまで退去命令を受けたものを仲間から出したことはやむを得ぬ

聞名にはそこで発行される地域名を冠すべきだという彼一流の主張が勝を占めて、結局ジャワでは「ジャワ新聞」ということに落ち着いた。またスマトラでは「スマトラ新聞」、ボルネオでは「ボルネオ新聞」と決定された。

最も心配された新聞巻取紙や写真材料もジャワでは他の地域のような心配はなかった。戦時中の日本ではグラフ印刷には水インクで刷っていたが、ジャワでは堂々と油性のグラビア・インクでグラフ「ジャワ・パール」を出すことが出来た。

別にインドネシア語新聞の指導紙としてアジア・ラヤ紙を発行したが、この編集長には旧ハリンドラ党の書記長、スカルジヨ（現ローマ駐在インドネシア大使）が起用された。

取材から校正まであらゆる日本式の記者活動がインドネシア記者に大きな影響を与えたことはいくらでもない。カメラや写真鉛版の技術、紙型のとりかたまで、インドネシアにとっては学

ぶところが多かった。しかし思想宣伝は必ずしも容易ではなかった。

新聞の官報化

インドネシア住民対策のなかでも、言論の指導という仕事は極めて困難でなかでも新聞による宣伝や思想指導は日本側のヘマのために全く占領者の任りよがりの観があった。

最初、軍宣伝班が新聞指導をはじめたころは、宣伝班のなかに新聞課というものがあつて新聞対策を考えていたが軍政が布かれることになってから新聞事業の責任は軍政当局に移された。

しかし軍の機構は最高指揮官のもとに参謀長があつて、これが軍政当局者であると共に司令部の当局者であつた。ところが宣伝班は司令部に直属するため、新聞の指導監督は、司令部でもやるし、軍政部からもやるという矛盾を生じて、早くもインドネシア言論界から、軍の内部の所管争いを見すかされるという醜態を曝した。

ものもいた。もともと彼らはインドネシアが独力で独立できるとは考えていなかった。アジア人である彼らはアジアのどの國かの助力ないし協力が必要とすることをよく知っていた。だからといってインドネシアの独立の問題に全然ふれないで、日本軍にいや応なしに忠誠を誓わされるということには、彼らは夢にも思っていないことであつた。

目の前でオランダ人が捕虜となつて引き立てられて行くのを見て、彼らは胸のすく思いがした。またこれまで市をきかせていたオランダ語新聞が姿を消して、その社屋に彼らが乗込んで、はじめに輪転機で新聞を刷ることも痛快であつた。しかし新聞発行の自由が認められず、全島の新聞が十紙足らずに制限され、特許制となつたことは、まず彼らの不安をよんだ。次に事前検閲という取締法は、オランダ時代にも彼らの経験しないことであつただけにその驚きは大きかつた。

やがて軍政監部という軍政機構が出来て、宣伝班は宣伝部としてそのなかに入つたが、検閲権だけは司令部で離そうとはしなかつた。いずれにしてもインドネシアはあらゆる文化資料の輸入国で、とほしい資料を土台にして、少数の日本人が統制を加えて行こうというのだから、無理な取締法を適用せざるを得なかつた。

新聞条令は簡単なるものであるが、インドネシア新聞に対して、まず日本軍に対する忠誠を要求した。また経営は許可制度とし、ジャカルタに四種、バンドン、スマラン、ジョジャヤ、スラバヤに各二種のインドネシア新聞（うち華僑紙二紙）が許可された。一社の発行部数は約一万であつたが、そのうちアジア・ラヤ紙だけは全国紙として約三万を認められたが、インドネシア語紙としては空前の発展であつたといえる。

これらのインドネシア新聞経営者に対しては「敵性」として接收したオランダ

特に官廷記事の取扱いがやかましくこの種の記事の組み方の不注意や誤植があると、それだけのことで軍検閲班は、これを最大級の新聞事件として取りあげた。やがて「軍政下では、とても肩がこつて新聞などは作れない」という嘆きが若いインドネシア記者からもたらされた。

取締る側からいうと、ガリ版などであらゆる都市や農村で新聞を作られてはかなわぬ。新聞数を最少限度に抑えて、事前検閲をすることは事務的に便利であり、各監督地域から万一の好ましくない事件の発生を防ぐことが出来るから、その地域の責任者の功績をまもることに役立つのである。こうした便宜主義によつて毎日不安な新聞経営に當つて、不敬、機密、禁止記事に戦々兢兢としたのはインドネシアだけではなく、朝日新聞が担当したジャワ新聞も同様であつた。軍に対する態度がけしからぬといつて、ジャワ新聞

ング語新聞や華字紙の施設が与えられたのである。

こうした新聞対策は、インドネシアにとって最初はいかにも日本軍が気前よく、インドネシアの新聞を理解しているように感じられた。

日本軍があまりにあつてなくジャワ作戦に成功して、彼らに対する施策をどんどんやつて行つたので、彼らとしては、その当時ただあつてにとられるばかりであつた。三百年にわたつたながいオランダ政権の弾圧にこらえて来た彼らとしては、疲れ切つていたのであるし、何をいおうとしても、かれらは日本軍の威風に圧倒されたかたちで、しばらく時の経つまでは彼らの意識の一つの空白が生じていたといえるのであつた。だが彼らの屋敷に突然入りこんで、その床の間に坐つた客人を、そのまま彼らの主人公にするかどうかということになると、問題は本のすから別なのである。日本軍に対して無批判で協力出来ないとい訴える

社長までが軍演習班にこぎ廻されるという突状が終戦まで続いたのであった。

そのほかに憲兵隊が、暇にまかせてこれらの小新聞をほじくり廻すことを重要な仕事としていた。このため新聞は活気を失って官報となり、新聞記者は官報編集者となり下っていった。日本人新聞記者たちのニヒリズムはこんなところからも生れていた。

占領新聞の最後のあがき

海外からのニュースは日本軍占領地区では同盟通信社電報一本に統一され東南アジアに向けて放送される短波ラジオも禁止されていたが、全般的に日本軍の形勢が悪くなると、日本軍の嫌うニュースが流れこむことを何としても阻止することが出来なかった。「近く独立を与えよう」という空軍形をあてにしていたインドネシアも、ようやく軍政にあきて来た。ビルマ公路の鉄道工事のためにジャワの鉄道の一

部が引きはたされ、また多くのインドネシア労働者が「労働者」としてジャワ以外に送り出された。

各州に割当てられたこれらインドネシア青年は強制的にジャカルタに集められ、牛馬のような待遇で、ビルマのみならずアジア各地に送り出された。オランダ人捕虜たちと一しょに強制労働にかりたてられ、ジャワの都市では多くのインドネシア婦女が日本軍の慰安所に入れられた。

一方日本内地からの料理屋業が露骨に進出して、高い垣の中で終日酔いどれ軍人を相手に日本人の最も醜い生活をさらけ出した。占領以来すでに数年軍政方面に關係なく、いわゆる駐在軍となった軍隊は、すでに上陸当時の士氣を失い軍隊内部の乱派は日を追って激化していた。ジャワ龍城の命令で、タコツボ、トンネル、築城などの工事がはじめられるころには、インドネシア新聞の経営はようやく困難を加えてきた。

いろいろな軍政布告の乱発ごとにその解説がかかげられ、各州の生産、供出の美談、日本語の紙上教育、軍政協力の問題などに大きな紙面がさかれたが、もはや馬の耳に念仏であった。

しかし、そのままに放置すればおそらく全ての新聞はインドネシア読者からポイコットされるにいたるであろうと懸念されるにいたった。

この間に幾度かインドネシア新聞編集責任者たちの全国会議が開かれて、とにかく新聞経営についての対策が協議された。日本軍の新聞による最も大きなねらいは、インドネシア文盲撲滅にあるとか、またこの戦時中に軍政違反者をインドネシアのなから出来るだけ出したくない、などと強調して購読料を支払う読者の減少する傾向を食い止めようとした。

ところが、軍政三年目には、現状維持も困難なほどに用紙資材の不足を来すまでにいたった。どうしてこの危局から救うか。ジャワには新聞生産の能

力がなかった。しかも、人心把握の必要はますます痛感されていた。

終戦前年に組織されたジャワ新聞は四分五裂の一步手前であった各地のインドネシア新聞の経営のボロをかくすために作られたものであった。すなわちインドネシア新聞の経営を一元化するためにジャカルタに本部事務局(谷口、福島、田寺、富永)をつくり、ジャカルタ(磯部、辻)、バンドン(高柳、スマラン)稲葉、ジャクジャ(宮川、スラバヤ)熊本)の諸記者が指導員として各紙に赴任した。

指導員の役割は困難を極めた。インドネシア新聞社長を監視するというだけではなしに、地方の軍政当局や部隊との連絡役となり、資材の調達、人事会計の指導や社員たちの病氣や結婚の世話までもして、これらの新聞の命つなぎに懸念の努力を傾けた。さらに軍政の当初新聞発行の特許を与えられなかったインドネシア新聞に対する損害を補償した。また当時の特許新聞の施

設を組合財産として会計を一本化した。こうしてプールされた利益の中から損失新聞の会計を助けるようにして経営を合理化し、さらに利益の残りを国内の手すき紙生産奨励につきこみ、これを買上げて各紙に割当てを行い、地方にはまだ話されているスダ語、ジャワ語、マドラ語などの地方語を用いたタブロイド新聞二十万部を週刊として刷って一部二センで売った。

この試みは確かに奥地のインドネシアを驚喜させた。文字のわかる若ものが声高に読むと村人たちは輪をつくって聞き入った。

あたかも日本軍ジャワ龍城作戦の一環としてインドネシア部隊の新編成を計画し、インドネシア兵(兵補といっていた)を募集していたので、このような奥地への宣伝はかなりの効果をあげた。「けがれた英米兵の足で祖国を踏ませるな。セレベスやボルネオはすでにけがされようとしている」このようなアジは、かつて大東亜共栄圏を説

いた当時よりも、一そう切実なインドネシアへの訴えとしてひびいたのであった。

解放された新聞へ

すでに軍に協力を誓ってここ数年軍政下に生きてきたインドネシアの中には日本軍に対する一種信仰的な信頼をもつものもあった。

「こんどの戦争は聖戦だ。日本はどんな不利な戦局に立っても、そう簡単に降伏しないだろう。ジャワで孤立しても数年は持ちこたえることが出来るだろう。その間に独立をものにしよう。独立問題が解決しない間に日本軍が敗北すれば、またオランダ政権が復帰するであろうから、日本と協力したインドネシアは戦犯となるか、あるいは永遠に辱げられないだろう。われわれはすでに苦杯をのんだのだ。いまさら日本を見棄てることは出来ない」という悲壮な決意をもつものもいた。しかしこの戦局の推移を批判的な目

で見ていた知識青年層の立場は異なっていた。第一に毎日の新聞にかかげられる戦況ニュースのなかに幾多の矛盾を感じ出していった。また軍政の行き詰りもかなりはつきり見透していた。彼らは「あすにもアジアから消えて行くかも知れない日本の影の薄さ」を直感していた。

彼らは国連軍の構成国であるオランダが、インドネシアの再支配を要求しても、これと闘うことの出来る立場をつかもうとあせっていた。すなわちシンガポール基地の日本海軍が浮腰になりだしたところから、スマトラやベンカ島を経てジャワへいろいろな逆宣伝文書が流れこんで来た。そのなかでも、共産主義理論による植民地解放論や共産ガリラに関するパンフレットなどが徐々にインドネシア記者たちの手に入りはじめた。

彼らは秘かにこれらの文書の写しをとったり、回覧したりしていた。往年のインドネシア共産革命指導者タンマ

ラッカの民族戦線統一論もその一つであった。彼は「日本軍なきあとのインドネシア独立は、民族の名において独立を宣言する民族革命以外に方法は無い」と主張し「このためにはインドネシア青年層が民族の主導権を奪う熱烈な戦線統一運動を展開しなければならぬ」と説いた。また「スカルノ、ハッタ何するものぞ。われらインドネシア青年は今日ただ今から民族の先頭に立つべきである」と叫んでインドネシア記者たちに呼びかけた。

当時のタンマラッカの立場はトロッキーの共産主義理論におかれていた。しかしこれと平行して、シンガポールやオーストラリアからスターリンの共産主義理論も入りこんでいた。いわゆる新民主主義による植民地解放、民族独立論がインドネシア青年たちを引きつけ、日本帝國主義の打倒が公然と主張された。戦前マルキシズム理論で鍛えられていたスカルノ、ハッタらは少しもおどろかなかった。

「きみたちの理論はわかるが、理論だけで八千万の民族をまとめて引きずって行けるか」

と反問されたとき、青年たちは迷った。共産政権の先頭に立つタンマラッカをインドネシア民族のシンボルにすべきか、スカルノ、ハッタの民族運動のコースを守るべきかについて、青年たちの間では各所に秘密会合を開いて夜を徹した激論が交された。

しかし人口の八割を占めるイスラム教徒の民族を率いて行くためにはスカルノ、ハッタを中心とする民族運動の主流を否定することは出来なかった。毎日のインドネシア新聞は情性的に検閲班ににまれぬような低調なものとなっていたが昭和二十年八月十五日東京からの同盟電がビタリと止まった。

もちろん「玉音放送」はひたかくしにされていたが、インドネシア記者たちは「日本敗北」を直感した。「東京電が来ない!」これはジャカルタの同盟通信社に勤務するインドネシ

ア無線の驚きばかりでなく、インドネシア新聞界に大きなショックを与えた。空電か機械の故障かと騒いだが、それに引きかえ、他地域からの入電は刻々として日本の降伏を伝えている。

「日本が敗けた!」
「日本軍の占領は終わった!」
「敵国もなくなる!」

「いまこそ思う存分ものがいえる新聞ができる!」
「民族のための新聞、独立のための新聞をつくれ!」

記者たちの顔は日本軍上陸当時のように生き生きとしてきた。その翌日からインドネシアの手で戦前のアンララ、インドネシア通信社が復活された。ジャワ新聞社内のアジア・ラヤはムルデカと改題された。「八月十七日インドネシア民族は独立を宣言す」は少しも日本軍を恐れることなく堂々と各紙にかかげられた。いままでも日本軍に強く抑えられていた力の反ばつが一時に来たのだ。

全てが終わった。間もなくジャワ新聞会事務局の緊急総会が開かれ、彼らとの別れのあいさつが交された。この四年の被占領下の生活で彼は確かに疲れていたが、どの記者の眼も異常に鋭く光っていた。しかし、長い間一しよに生活して来た彼らのわれわれに対する態度は案外もの静かであった。

この新聞会はわれわれにとって、思い出の多いものだ。いまわれわれは日本と一応別れるが、敵国人と別れるような気はしない。少なくとも、オランダがジャワを棄てて逃げだすときに、インドネシアがオランダ人と涙の握手をして別れるという事はなかった。この現実はどうにも否定出来ない。われわれはいまポーズをとって芝居をする気にはなれない。

「今にして思えばインテリの失業救済機関の観があり、思想的には異域同舟だが、よく大きく抱きこんで来てくれた。われわれのなかにはコチコチのイスラム教徒もいるし、急進的な共産主

義者もいる。アジアのなかに敵国をもちながらわれわれが繁栄するとは考えられない。やがて再びよるこびの握手をする機会のあることを願っている」

若いとはいえ彼らも人の子の親であった。「これからあなた方はどうなるのだ。捕虜になるのか。キャンプは決ったか。一たい故郷の家族といつ会えるのだ。ジャワでは戦争はもうないとのことだが、この降伏命令は全軍に徹底しているか。武器はどうなる……!」

会合後のこうした談話を交しているとき、北隣からどう然たる銃声が聞えた。階下に降りて見ると、武装団が隣りのドイツ人洋服店に押入って洋服地を奪って行ったところであった。事務所前にあつたわれわれの自動車はすでにインドネシア人たちに奪われていた。私たちは、次第に激しくなっていく奔馳の音をききながら、スタンドの灯の下でマージャンをはじめた。

ジャワの日本人

ペンと剣の相剋。國際愛が掛く非喜劇。敗戦心理と郷愁が生む虚無の彷徨。燦く空石。燃える情熱を振りなして繰るジャワの日本人行状記——

朝日新聞社企画部長

河合政

ジャワの報道員

ソンの抵抗

アスビコウジョウニチアイタシ、ヤハは強、陸軍兵器本部長である齊藤彌平大中将のことである。発信は東京、受信は台北、マレーの作戦が一段落して、寺内元帥がシンガポールに入って間もない時だ。
文人との交遊を好む彌平大將軍が、南方戦線の視察に出る最初の地で、話相手に、新聞記者をえらんだのである。軽く考えて台湾軍司令部副官部に

電話をかけ到着時刻を聞くと、「後刻知らせる」との返事、待つ程もなく血相変えて、支局に駆けこんで来たのは、報道班の将校と憲兵である。「支局長チヨット重大問題で」と応接室に入るなり、「斎藤閣下の来島は軍の極秘事項である、どうしてどこから情報を入手したか」の詰問だ。思わず吹き出してしまつて、電報を示すと彼らも啞然、筆者とヤとの關係をいろいろ聞いてメモをとって引きあげて行つた。程へて、「何人にも洩らさず、唯一人たるべきこと」の条件で時刻の通達があつた。



中野求めた、黒田は快くこれに応じて

特別仕立の飛行機でやって来てしまつた。そして祝宴の席上、くだけた態度で文史朗と朝日新聞礼賛を一席やうて年来の友誼にむくいたのであつた。

文史朗が赴任すると、派遣軍参謀部が外ソ方に向けた。参謀の鼻息をうかがう連中も尻馬にのつて、「自由主義者がやって来やがった」と冷笑した。

ジャワ新聞が創刊を披露するための祝宴にも、軍の幹部は一人も姿を見せなかつた。自由主義新聞に泣きペソをかかしてやれなどという隘口も伝わつて来た。しかし利かんの文史朗が泣き寝入る筈がない。

相手の態度から持ち前の闘志を燃やした彼は、かつて平和会議に使つた時からの朋友である黒田中将(給軍参謀長)に打電して出席を求めた、黒田は快くこれに応じて

かくしてジャワ新聞は華々しく発足したものの、軍人軍属の圧迫は終始一貫終戦まで、強いて言えば昭和二十年八月十五日までつづけられ、あくまで戦つた文史朗の次の社長、野村秀雄は持前のいんきん下重さを以つてやや気分を緩和したもの、事毎に底意地のわるい扱いを受け、三代目東口真平は在ジャワ報道員(マル報と呼ばれて左腕に大きな鑑札をつけた)の代表として、その待遇改善を総司令官に直接陳情すべく、シンガポールに赴く途中、不時着で奇禍死という有様、ジャワ新聞が十七年十二月発刊から終戦までのありようは、まさに苦難の連続であつたと云えよう。ここに挙げるいくつかの例は、その身近な例にすぎない。

硬軟二代

鈴木文史朗がソンと鼻で笑つて言つた。「会おうじゃないか、僕が会つて話をしようじゃないか」

さて翌日のその時刻——ひっそりした台北飛行場にかり立つた彌中將は、整列して出迎える将星を無視して、「オーイ、どうじゃァ」と巨艦をはこんで来て言つた。
「シンガポールへ行くぞ。新聞社は朝日ときまつたからな、君も来てもらうことになつてるぞ」
「あんたは戦線視察でしよう」
「ちがう、ちがう、二十五軍じゃ、山下が満洲へ行つてわしが代つたんじゃ」
それから二三カ月して、シンガポール都心の丘にある広大な官邸で彌將軍が言つた。

「わしは朝日新聞がここで新聞をつくるという決定を聞いて赴任したんじやよ。そのつもりでであつたら、古野伊之助がやって来あつて、同盟に交つたといふんじや。何やらわからんが、わしが昭南新聞の題字を書かされたよ、朝日はジャワか、ええ新聞が出るじやろ」
ジャワ新聞の初代社長として、鈴木



鈴木文史朗 機嫌を損じるといふのであろう。担当社員と

この起りはジャワ新聞の運営上、必要欠くべからざる仕事の承認を、宣伝部の高級将校が汲つていて、埒があかないといふのだった。事情も必要もわかつていながら、簡単に承認してしまつては威信にかかわるし、参謀の機嫌を損じるといふのであろう。担当社員としてはこの際、社長に強い態度で出られてアトをまそくするよりも、一席催して頼みこむという手を用いた方が、いいのだった。言ひ出したら引っこまない社長である。
文史朗はすぐ相手に電話をかけて意見を申し入れた。相手はこと面倒と見て外出するとか、来客とか言つて避けようとしていたが、
「これからすぐ二三分でよろしい」といふ文史朗の強引さに負けて承諾、文史朗は自動車で行つて、二十分

ばかりして戻って来た。

「なんだいありや、文句も何もありませんし、すぐ承諾したばかりか、社長がわざわざお出でにならずとも、なんて言っちゃよ」——吐き出すように言った。

文史朗は中佐や少佐とか、参謀とか言っても相手にしない。

「そんな連中に何がわかるもんか」と軽く片づけてしまうのだが、仕事の担当者には、それらが一番大事な相手なのである。宣伝部の高級将校は翌日担当記者を呼びつけて、

「生意気な文史朗めが、いい気になるよと承知せんと」と思まき、側近の軍属らもこれにならって、自分らの手を凝らすに直接交



野村秀雄 村を根にもち小姑的な新開いじめを

つづけた。
野村秀雄さんが着任して主要都市で

社長就任の披露をやった。ジャカルタ、バンドン、などをまわってスマランに来た時である。
例によって野村さんが型の如く丁重な挨拶をのべて席についたとたん、若い少年のような顔立ちの憲兵隊長が席を立ち、ソカソカと野村さんに近づくと、

「オイ、軍が朝日新聞に頼んでジャワで新聞を出してもらったと言ったな」と詰問した。

「イヤ御委嘱を受けたと言いました」野村さんがモノやわらかに答える。

「同じことじゃないか、何を言うか、軍の命令以外に何がある。命令だ。命令でやることになったんだ。ふざけたことを言ったな。考えがあるぞ」

米村というこの少佐の横暴と酒癖は有名だったらしく、一座は又かといつた面持でシンとしてしまったが、激しい捨てりふを残して隊長が席を蹴ったあと、どうやら生色を戻して裏に入り散会した。

この深夜、ホテルの野村さんは、就寝後間もなく憲兵の来訪をうけ、隊長官舎に同行された。すでに十二分に酔っていた隊長は、

「何で呼び出されたかわかってるだろうな」と切り出して、軍命令を軽んじた故をもって逮捕するとか、軍法会議に付するとか、イヤ味とおどしの連続二時間余り、あくまで下手に出て、積み上げていた野村さんもたまりかねて、ソファにふんぞり返っている隊長の胸もとを、双手でつかんでゆすぶるながら、

「これ程はつきり言ってるのにわからんのか」と大喝するに到った。

恐らくは野村さんの最初にして最後の、悲痛な激怒であつたらう。こうなると薬が利きすぎたとも思つたか隊長は、「じじい、怒つたな」と高笑いしてごまかし、野村さんが怒りを納めたと見ると、改めておどし文句をならべる。酒癖といえはそれまでだが、相手は職権を凶器に使っているし、しか

する佐藤氏の女性問題、数名の将校らが佐藤氏を迎えて案内役をつとめていゝなどという話が理由なのだが、作詩の中に、巷ゆくあそびめの動作にも皇威のかがやき——と、うたっているのを、皇威を売笑婦に云々する如きは不敬だと断じ、新なる版図とうたつた点をも難じて、逮捕だ、逮捕だと思まく。こうなると、班長も軍属も口が出せない。例によって新聞の責任者が呼び出され、いや味とおどかしの末に、語句の修正ということになった。

当の佐藤氏は「彼らの言おうとしてゐることはわかりますよ、貴社に迷惑をかけたくないから、とに角修正しましよ」と苦笑していた。

面子さまさま

軍司令官が代って着任後二三日して、報道班から音沙汰がない。新聞として放任するわけにもいかないの、会見記を書くべく副官に連絡すると、二つ返事で快諾して来た。

もすでにこの凶器をふるった例があるのだからどう仕舞もない。
散々いじりまわされて放免されたのは私曉だった。しかも最後に言ったのは、
「オイ、今夜のことを他へ洩らすようなことはないだろうな」という太ましい言葉であった。

春夫の修正詩

軍政監部報道班の検閲係には、軍人軍属以外に憲兵准尉がいて、これが班長の将校よりも睨みを利かしていた。新聞についての知識を持たない連中が検閲要項によって原稿を検閲して、許したりハネたりするのだが、憲兵さん



春夫 夫として新聞にのつたものに文句をつけた。

「こんな軍政批判を書いた記者は処分する」だの、「混血人の記事などを扱

うのはけしからん」だのと、毎朝のように責任者を呼び出して、威力を示した。この憲兵が少尉に昇進して間もなく終戦になったのだが、とたんにこの男、軍政監部に働いていた日本ムスメを二人までも誘い出して、自動車でジャカルタを逃亡、中部をさして走らせるうちに、ガソリンが切れてつかまってしまったという。

詩人佐藤春夫がジャワにやって来たので、ジャワ新聞が新年の紙面に一篇をお願ひした。この詩稿が検閲にまわると、「流石にいい」とか「立派だ」とか詩が若干わかる軍属や兵隊がほめたものであったが、憲兵はたちまちこれに文句をつけてしまった。

「こんなもの絶対に許さん、書かせたジャワ新聞もけしからんし、佐藤なんて奴は、ジャワから追放の手続きをとる」というのだ。

元来、佐藤はジャワにやって来てても報道班を無視して挨拶にも来ない奴だ——というのが一つ、それに彼が記憶

昨日は報道班から連絡させるというので待っていると、横関係の軍属がいきり立って騒ぎ出した。俺たちを出し抜いて何故会見を申しこんだかというのだ。単独会見はいけないと言うらしいから、とに角新聞は急を要するのだから、会見すればいい。会見の形式などはどのようなかまわないと言ったが、相手は記事や会見は別問題だ。報道班を無視して会見を申しこんだ責任をとれという。これが班長でも憲兵でもない。雑役同様の軍属がワメキ立てるのだ。そして結局電話で報道班の中だけに聞えるように、「ハ、カヤロー」などと大声をあげてケリ。ジャワ新聞の幹部を怒鳴りつけてやったというのが本人の自慢で、大陸で新聞に関係したという一軍属は、「記者が一杯のまされて書いた記事にちがいない」などと食いついて来たり、愚にもつかない文章を書いて連載を命じて来たりしたものであった。

新任の参謀が新聞記者を集めて訓示

「お前達に言いたいことは沢山ある、資料もそろつとる。朝鮮の如きは実に緊張して、タルンどるものは一人も居らん。お前達がどんな生活をしようかは、すべて知つとるのだから、ビビビシやる。オワリッ」

報道員は軍属ではないし、一般邦人でもない。と言つて中間の特別に独立したものでない。軍人軍属の出入りする偕交社の飲食場所の利用は、許されているといつても大目に見る程度で一般邦人は偕交社に出入りは許されぬが独自のものを有し、これに対し報道員はお客様扱いで出入りする。

これが配給物となると、一般邦人はガツチリと組んで、軍の配給を捕う方法で十分に物資を手に入れるが、どつちつかずの報道員は、現地住民なみの配給で、めいめいがヤミ買いに狂奔した。

偕交社の給仕女は、全部混血女だった。この女たちにとっては、フンぞり

返って威張る軍人や軍属よりも、金放れのいい報道員の方がありがたいのは当然、従つて、報道員と見るといそいそと寄つて来て、特別にサービスしたものだ。これが相当高級将校を刺激していたが、ある時、女たちに鼻つまみの高級副官が、客を連れて来てモチなかつたところから、「報道員の出入り厳禁」を下命したものだ。

この禁が解けるまでには、相当の目撃がかかったが、このかん、高級副官をウンと言わせるまでの工作というものは、容易ならぬものであったこと勿論である。

国際結婚と落しダネ

帰国異変

西部ジャワに乾季がきて、火燧木の燃えるような花が散りはじめるところ、東、中部から引揚げを終つた船は、どうやら西部にやつてくることになつて

作業隊が活気づいてきた。

その頃進駐軍は命令を発して、日本人の無責任な情事関係は許さない。関係または同様して婦人の同意を得たものは、日本の責任において正式に結婚させ、正当な夫婦としてこれを優先的に帰還させるということになった。こうなるといままで頬かむりをしていた軍人や、脱走して女の家にひそんでいた連中までが、われもわれもと名のり出て来た。

弱り切つたのは司令部と呼んでいた本部だ。いままでは軍規をみだした奴とさげすみ、敗戦の原因をつくつたような野郎だと罵っていたものを作業もさせずに堂々と先に帰さねばならぬのである。

これを放任したら数万の作業隊員に必ず動揺が起る。これを防ぐためには本部が適当な手を打って、納得させなければならぬ。

恰も二十二三歳の若者ばかりの作業隊などは、自暴的に暴動を起し、若干

の犠牲を払つても、追放帰還の機会をつくらうとしていたし、軍医と結託した連中は、病気を口実にして先に還ろうとする。台湾や朝鮮の出身者は、郷里がすでに異国であることを理由として、泣いて優先帰還を陳情する。

中部から移つて来た連中は、終戦後の戦闘に協力したことをもって、一般邦人は軍人にあらざることを主張し、その後一年を経ずして、死刑を宣告された憲兵すら、満洲以来の長い勤務を理由にして、人を押しつけて還ろうとしたのだからこの混乱はひどかった。

一方進駐軍の戦犯者逮捕は急で、毎日のようにインド兵の運搬するジープが、物々しくのりこんで来ては、二人三人と引っこ抜いて行き、この恐怖が一そう帰還陳情や、脱走に拍車をかけたのである。

結局、国際結婚について——というガリ版刷りが数万枚つくられさることになった。

「彼らが先に還るといふことは、吾々

一同にとつても残念至極だが、これは命令なのである。軍規を無視した彼らであるが、進駐軍は彼らに人間としての責任をせよというのだ。こんな連中を残しておくことは、むしろ日本の上塗りなのだ。この命令を幸い、われらはこれらの連中を、いち早く追い払おうじやないか」

といったような主旨であった。これに対し特別に抗議も問題もなかつたが、軍規を無視、という言葉にからみついて来た隊長があった。

まるで軍人が関係しているような書きぶりだが、軍人にそのような不心得者はおらん。それは、軍属あるいは邦人の類にちがいないというのだったが、実は軍人が多く特に将校が多いこと、軍規云々は、司令官が特に、アトで入れた文句だとわかると、黙ってしまつた。

馴れ合い夫婦

本部内に国際結婚受付所が設けられ

て、登録が開始された。そうなるのと
のようにして連絡がとられたものか、
証人と現われて来た。

単に受けつけただけでは仕様がな
いので、一応書類をつくることになっ
たが、この結婚の証人が判事さん二人と
新聞記者だ。

男女を前にして外交官であるT司政
官と、判事のH司政官が、証書を讀ん
で聞かせ、オランダ語に訳して女に言
い聞かす。牧師役まで兼ねたものだが
神の手で結ばれたなどとは言わない。

「証人は新聞記者と判事ですよ。内地
へ還ってもいいかげんなことは許され
ませんよ」とまるで脅し文句だった。

六十歳を越えた軍属が、二十二三歳
の中国婦人と赤ん坊を連れて来たり、
露敵無比、部下にも恐れられた将校が
乳呑子を抱いたインドネシア婦人を同
伴したり、二十四五歳の一兵士が、十
六歳を頭とする五人の子持女を届け出
たり、終戦と同時に職場をすてて失踪
していた男が、突然混血女とヨチヨチ

歩く子供を連れて現われたりした。

この男はジャカルタを逃げ出して、
バンドンに潜伏していたのだが、イン
ドネシアの独立暴動で危なくなり、名
のり出たもので、女の母親が娘の日本
行を許さないで、本部の一室で夜更
けまで母親をかき口説いていた。

これらの国際結婚組は、そのまま別
に設けられたキャンプに移され、そこ
から港へ送られていったが、そしてみ
んな一様に彼らをさげすんだり、罵
たりしたものが、要するに早いもの
勝ちであった。

まともに作業ととっ組んで、血の汗
を流して、これで自分は満足だなどと
言ってはみても、残ったものは負けだ
った。

ジャワに限らず、いかなる外地でも
これは早いもの勝ちであった。

他人のなげきもよそに、自分たちだ
けが手をつくして、さっさと先に還っ
た連中は、残ったものための弁護も
説明もできない。なぜ残して来たかの

弁明をいかに上手にやるかが唯一つの
問題であった。

ウンでもない。自分をすてて去った
男を懸命に追う女を、巧みに誘いこん
で型の如く国際結婚という事にすれば
真先に日本に還ることができたのであ
る。だからこの国際結婚組にはなれあ
いが相当あったのだ。

可哀そうにジャワ新聞社の事務員を
していたメナド系の少女、カテリーナ
の如きは、日本人が好きであったが故
にだまされて、一商社の男に求婚され
ると有頂天になって承諾し、勇んで日
本に来たが間もなくすてられてしまっ
た。女は還るための手段でしかなかっ
たのだ。逆に日本にいる男を追う女が
あり合せの日本人をつかまえて乗船し
たというのも、もちろんあったわけ
である。

一方男を探し求めるさまざまな人種
の女は、連日数十人押しかけて来たが
相手がかからなかった。これらの半数
以上が子持ちであったことは、国際結

婚組が日本へ行ってから起すにちが
ない悲劇よりも、もっと深刻な悲劇を
思わせるものであった。

しかし、とに角事務当局としては、
うるさいものを追い払うことで一杯だ
った。日本へ行ってどんな問題が起ろ
うとも知ったことではなかったのだ。

もちろん真面目な組もかなりあっ
たし、中には人妻である女が、その愛人
である日本人と共に来て、結婚できな
ければ自殺する、などというのもあっ
た。

西部ジャワのほんの一部でこの騒ぎ
なのだから、中部、東部はどのような
ことになったのだろう。中、東部はイ
ンドネシア軍との交戦が激しかったた
めに、政治的なこの種の送還などは行
われず、唯集結地から乗船地へはこび
出されただけに終わっているのだ。

国際結婚組の送還が一段落してから
東部をひそかに訪れて、男の安否をた
ずね日本行を乞う女の数はふえるばか
り、日本人と関係があったために、あ

らゆる衣食の途を断たれて転がりこん
でくる母子、あるいは女、これらを神
父であるK軍属が一方所に收容して、
面倒をみてはいたが、とても手のまわ
りきるものではない。当時K神父は、
西部ジャワだけでも日本人の子供が
五千人はたしかにいると言っていた
ものだ。

フォン・エンディ女史

ここにフォン・エンディ女史を紹介
しなくてはなるまい。

エンディさんはスマラン市に住んで
いた混血女性で、そこで日本人と恋愛
した。彼女は氏名は言わないが、その
日本人がある商社の代表であり、日本
に妻子があることを知っても恋愛せず
にはおれなかった紳士だ、といってい
た。日本人はすべてこのエンディさん
の愛人に感謝しなければならぬだろ
う。

エンディさんはこの唯一人の人を送
り出すとすぐ、すべてを不幸な日本人

のためにささげる決心で、ジャカルタ
に出てきた。

そして本部に来てその決意を打ち明
ける一方、進駐軍当局と交渉して、
獄中の戦犯者への差入れから、日本人
にすてられた女子供の面倒までみるこ
ととなり、特別の証明書を出してもら
って、自由にキャンプに入入りして、
戦犯関係事務まで手伝った。

当然彼女に対してはさまざまな迫害
や圧迫が加えられたが、裁縫に熟練し
た彼女は、一日ミシンを踏めば数日間
の生活費が出るなどと申しあげていっ
て、車庫を改造した家に十人位の女子供を
收容してこの世話をしつづける一方、日
本のための仕事に全力をあげていた。
殺風景なキャンプの仕事場に、花を
絶やさぬ心づかいも自然だった。

この婦人の存在がいかに日本をたす
けたかは、やがて詳しく伝えられる日
が来るにちがいない。彼女はいまお
ジャカルタにあってこの仕事をつづ
けており、昨年は愛知県下にいる一日

本人のために、その妻子を連れて日本へ行くというところで決心したが、病気のため運期したという。 國際結婚のために一身を着して働く彼女は、決して自分不幸なものとは考えていない。彼女はつねにこの仕事でつくすことが、いかに幸福であるかというのである。



フォン・エンデイ女史

しかもその頃のジャカルタは日本人に対する憎悪と呪咀が充満していた。 戦犯法廷は裁かれる日本人を見ようとするオランダ人や混血人などで満員であつた。 作業隊の出入口や作業場で、険しい目付きの女たちが詰めかけて、日本人

の中から懐い相手を見つけ出して、MPに引渡そうとしていたし、千人以上の戦犯者を収容しているグロドック刑務所の前にも、多くの女性が群がって患者に対する罵しりをつづけていたのだ。 エンデイさんはこの群の中を平然と通って、日本人戦犯者のための仕事に就いた。

憂愁の便り

そのころ、國際結婚組からの音信が届くようになって、新聞にも日本内地の惨状が誇大に掲載されるようになった。

ストラバヤに着いたオランダ船は、早くも日本と日本人に会いそをつかして戻った三人の女たちを会わせ、この写真がデカデカと扱われて、センセーショナルをまき起した。

エンデイさんは苦笑してこれを読んだだけで何も言わなかったが、國際結婚の花嫁たちの音信には深い関心を示した。

していたようだった。 「子期したより日本の災害はひどいけれども、決心して来た以上はどんな苦勞でもするつもりです」

「彼の言っていたことは全部ウソでした。ちいさな家に両親だの兄妹だのが多勢いて、たへものもひどくてとてもがまんできそうもない」

「コーヒーも砂糖もない、くだものはカキというのがあるが、ちっともおいしくない。しかしこの熊本というところは、爆撃されなかったもので、他よりはいいそうです。砂糖をすこし送って下さい」

これらの音信はお嫁さんたちが、それぞれ実家や友達に宛てたものではあつたが、中間で読む日本人は、すべて終戦三年目を迎えて、祖国の現状をすこしでも知りたい思いで一杯であるだけに、特別の気持だつた。

しかし國際結婚組がいよいよジャワを去る日の記憶は、余りにもなまなましくい。

「あたしはもうイヤになつたの、彼はいよいよあたしが日本と一緒に行く」と決心してから、全然親切にしてくれない。まるで他人のように気取っていてキスもしないのよ。とに角あたしは日本へ行くけれど、どうせ日本にはアメリカ人やフランス人が沢山行つてゐるんだから、あたしはその中からいい人を見つけたらいいよ」

きついな調子で叫ぶオランダ語が、わかるのか、わからないのか、彼女の夫なる日本人は背広服をキチンと身につけて、酒々とその隣に立って、同胞の手を振つての歓送にも答えずに消えていったのだ。 「どうせすぐ帰ってくるわが、一寸見物に行くの」

「子供さんか置いていきたいんだけど」

彼が承知しないのよ」

こんなオランダ語が公々然と大声で叫ばれたのである。これらが永続する筈のないことは、はじめからハッキリしていたのだ。

エンデイさんは、こういうこともチャンスと知っていた。そして一応結婚というかたちで日本へ行く人よりも、幾された不幸な人々の中に、真に救われなければならないの多いことを知って、それにすべてを打ちこんだのである。

ダイヤモンド事件

発端

參謀部別班の若い将校が、日本の武者にダイヤモンドを与えたという噂がとんだ。

当時の報道員の大部分が、こうした噂を聞いても不思議にも思わなかつたのである。

しかし、戦い敗れて日本人の一部だけが、集結地を出て船着場に行くとい

う時になつて、一つの場所となつていたボゴール洲の入口で、オランダ官憲が日本女性の一群を急襲し、すっかり痺り支度をしていった一芸者を調べて、ダイヤモンドを取り上げると共に、身柄をもジャカルタにはこんだ聞いた時には、前記の噂を思い出してギシリとした。

というのは、そうした噂に上るダイヤモンドなるものが、はっきり言う者はいなかったにしても、いつとなく耳に入っていたからである。

その噂の主流となつていたのは、海を隔てて、マレーのジョホールに近いところに、農園を所有したオランダ人の所有品、日本軍が怒濤の如くシンガポールを目ざした時、この農園主が死んで、ダイヤモンドの全部を身につけた娘がジャワのがれ、ここで又日本軍の侵攻に会つて処置に窮していた。その娘に日本軍人が近づいて、結局はダイヤモンドを取り上げたという噂なのである。

暴力

或るカメラマン

終戦の混乱をいやが上にも厄介なものにしたのは、暴力の横行であった。軍人の場合を言えば、彼等の階級はすでにならんだといつて、将校をリンチし、あるいは殺した事件もある。将校が全く遠慮してしまつて、兵が勝手に作業隊をつくつてやつてあつた隊もあるが、いままで兵隊に君臨していた将校は、ほとんど、暴力をうけないまでも、それをおびえてしまつた。警務関係は特にこれがひどく、全く暴力になつて現われた。軍属、邦人の集結地であつた西部ジャワの、テガルパンジャンなどは、まるで最初は警察官の集結地であつた。

彼らはこと毎に刀を抜いて暴れ、拳銃を打つ放した。いわゆる上官にはこと毎に反抗して、いかなる制止をも肯んじまいとした。

かつて部長あるいは課長といわれた人々が、多く判、検事であつたことはやがてこの混乱をしずめるに役立ったが、部下のこの暴状に呆れた人々は、いち早く監獄部屋のような作業隊へ志願して出てしまつた。

恰もその頃、この集結地視察に来た床次徳二司政長官は、集結地を一巡して「実に平和ですな」などと報道員の宿舍をのぞいたが、軍属の暴状を聞かされて苦笑して帰つたことがある。報道員にももちろん暴力騒動があつた。

英印軍が進駐してもジャワ新聞は発行をつづけていた。進駐軍の一部隊がジャカルタ市内を行進した日だ。

私がこの場面を写真で入れるべく、写真部に依頼すると問もなく、カメラマンとしてもっとも若いAが、血相変えてやつて来て、「写真がほしいなら自分でやつてみたらいい。うっかりカメラを向けて、ポイントうたれたら誰が責任を持つんで

すか。バカバカしい、そんな仕事はてめんだ」と言つた。

ほんとに心からおびえているのだから、こちらも押し返せない。しかし、この時はハッと暴力を感じたのだ。集結地に入ると果してこの男が、手に負えない暴力漢になつてしまつたのだ。

しかも情ないことに、工場、すなわち印刷工の腕力自慢の男に従つて、誰彼かまわず喧嘩を売り、集結地の規則を破ることが、男をあげることにように振舞ひ出した。

食事の順番を無視してさえる者を殴りつけ、殴つた上この被害者の宿舍に押しかけて、責任者にわびさせ、わびねば殴るといふ異状だつた。

類は類を呼んで、この男を中心に五人がいつもバクチと酒の日常。いかに軍属共が乱れようと報道員だけは、文化人らしく平静なキャンプ生活をしようという申し合せも空しく

集結地の生活はこの男たちによつて、かきまわされた。

弁明もなし。説明もいらない。この男たちが当時朝日新聞社員だつたのである。

しかもこの元凶だつた男は、それから半年もたつた作業隊で、筆又交を思つて同僚の情でひそかに治療した。そんな苦のない病氣だから医務室へも行けず、数日なりつづけていた。これ



この野郎ぶち殺すぞと暴れ出した

も暴力の一つで、キャンプへ出入りする洗濯女を、禁を犯して物置に泊めた結果なのであつた。

判事隊長

作業隊における暴力は、お互いが鞭の下で重労働に従つている身の上だけに、憎むべきであつたが、また、つくづく情ないものであつた。

要するにヤケツソのふてくされなのだから、作業を拒否するとか、連合軍に抵抗するなどというのではない。むしろ、この輩は誰よりも恐れ切つていて、顔を合わせることもすら避け、唯、同僚、先輩、それから作業隊の責任者らを困らせるだけを、快としていたのである。

作業が激しいからみんな疲れる、しかも間断なく銃聲で監視されていることは、奇妙に見極めさせるものなのだ。従つて些細なことで衝突するのだ。暴力者はあらゆる機会に誰彼を刺殺して、ことを構えようとしてゐるのだ

から始末がわるい。作業がのろかつたりますかつたりすれば、叱責もビンタも班長にくる。これを知つていてのイヤがらせが多かつた。

思うたびにソツとする。タンジョン波止場の重労働の初日、英印兵の監視の中を隊列をつくつて行進していると、わきを進んでいいた隊列の中で激しい殴り合いがはじまつた。

一人はすでに評判になつていた低劣無智な暴力者、相手は文教関係の硬骨軍属。

どこへ仕事にやられるのか不安でビクビクしている暴力者が歩きながらわめき立てる醜態に、たまりかねて注意したのが切っ掛けで殴りかかつたところ逆にしたたか突き飛ばされ、「この野郎ぶち殺すぞ」と暴れ出したものだったが、誰かが止めるにきまつているのだから、思い切つた暴れ方だ。

この醜態を英兵二人が銃を持ったま

「さきさきしいた目で見つて見ていくらに負けて重労働を課された日本人が、いたわり合うところか殴り合っているのだから羨ましかった。」

この日の作業は石炭運びだった。激しい作業にへとへとになった二百三名が、ようやく昼食となって三十分すると、又作業命令だった。新しい仕事は隊長から伝えられると、先刻の暴力者がとび出して、

「こんなひどい仕事はイヤだ」と叫んで、同志をあつめるようにあたりを見まわした。

「イヤか、イヤならイヤでよろしい。作業は命令だ。イヤなものはずくにイギリス軍に引渡す」

隊長の鋭い声だった。暴力者はスコップを地に叩きつけて隊長をにらんだが、誰も相手にしなかった。

隊長は高等法院の判事であった。

で故園を捨てた青地老は、すぐ陸軍から企業担当者としてジャワに戻ることを命令され、妻女は郷里の長崎に移して住みなれたバタビアに帰って来た。そして長年の経験を生かしてホテルを営もうとしたが、すでに軍と特殊関係をもつ日本人に占められて、割りこみ隙もなく、止むなく日本人相手のレストランを開業したがこれももうまく行かなかった。

弱り切っていたところへ、海軍から慰安所の開設をたのまれ、いくたびか断ったが、ついに、御国のため」の仕事として押しつけられてしまったのである。

ここに必要な女性を抑留所から希望者をつのり、未成年者はことわっていちいち契約書に署名させたのは、青地老の性格でもあったろう。しかしこうした手堅さも空しかった。希望として働いた者の女はほとんど、被虐待者として証人にたち、裁判ではすべて青地老が、甘言を以て誘惑し未成

目耳口

先駆者の死

戦犯処刑者の中でも、青地老さん(六三才)の獄死は悲愴であった。青地老は抑留中のオランダや混血の女性を誘拐して、日本人相手の慰安婦にしたという事で逮捕された。たしかに青地老はジャカルタの都心に近いところに開設された慰安所のあるじであった。

だがこれは日本海軍の専用慰安所であり、青地老は海軍から命ぜられて、ここに勤務していたにすぎなかったのだ。

しかも海軍からはこのために一人の逮捕者も出ず、青地老ひとりすべてを背負ってしまった。しかも無期を判決された青地老は、刑務所参観者の前にさらしものにされ、悪罵と嘲笑の中で、判決後数日後に死んでしまったのである。死因は衝撃の激しさからとか

年者までも参制したとされて、あらゆる弁明も証言も一蹴されてしまったのである。

インドネシアの土になることを念願した青地老が、いかに懊惱しつつ慰安所の仕事をしていたかは、知る人も多い。そこに働いていた女たちも決して青地老を憎んではいなかったらしい。女たちは青地老を罪におとさねば、自分たちの生きるみちがなかったのである。

言葉珍聞

中国においても然りだが、日本人が大量に進出したジャワでも、日本人流にとり入れるマレー語というものは、すさまじいものであった。正式に文法を学ぶというのではなく、必要から単語をおだててゆくというマレー語、それが全ジャワを横行闊歩していたのだ。進駐早々に唄がはやった。へひとはオラン、さかなはイカン、めしはナン、クエというのは菓子ばかり

病死とか伝えられたが、多くの人は明かに自殺だと思っている。

青地老は大正十年頃夫婦でジャワに渡り、バタビアのモーレンフリート街に、日本人相手のホテルを経営した。ジャワに渡るほどの日本人は、ほとんど一貫から一族あげようとする連中で、目標も何もなく渡航してくるため、無一文となって食うに困るのだが、快気の青地老はこうした連中を、一カ月でも二カ月でも無料で泊らせ、激励しては、仕事を世話したりしていた。特に青地老はインドネシア語はもろろん、オランダ語も英語も流暢であったため、バタビアの裁判所は日本人の犯罪人を裁く場合には、必ず青地老に通訳を委嘱したものであった。

このままでゆけば青地老は日本人にとっては、思人的存在として名物にもなった人であろう。

思えば青地老の晩年は全く戦争にかきまわされてしまったのだ。あわただしく引揚げ船に乗って、何十年ぶりに

りなり

これはいいのだが、マレー語を自由に駆使するさる大人が、病気をしてジャカルタ病院に入院中のこと、白衣の大和撫子が補助看護婦のインドネシアを使う言葉を聞いた。

「スブラ(隣)のカマル(部屋)よ。メジャ(卓子)のアッス(上)にネボトル(びん)がアダ(有る)でじ。パウ(持つ)してネ」

「アドウ(嗚呼!)」と聞耳立てて、このすばらしいマレー語の結果を案じていると、生むは易しーインドネシア娘は、言下にスブラのカマルへ飛んで行って、メジャのアッスのポットルを取って、パウして来たのである。マレマカシ(ありがとう)ね、という挨拶がそれを示していたというのである。

これが人命に及ぼす薬品を扱ふところで用いられているマレー語だけにこの話がいち早く伝えられて、ジャワ新聞の寸評がとり上げてワラった。

セレベス戦記

奥村明 著

図書出版社

これは、奥村明氏が第二次対戦中陸軍の小隊長として、南方ハルマヘラ、セレベス前線に参加した終戦前後二ケ年あまりの体験を書かれたものです。

特に南部セレベスまでの3千キロの難路を軍装で踏破した地獄の冒険記として貴重なものと思います。

昭和19年7月マニラを出港してハルマヘラ島ーガレラに上陸、その後激戦の後セレベス島のビートンに移動、ミナハサを出発するまで、この地に関するこの間の行動を抜粋ー掲載させて頂きました。

【川口 博康】

光にみちた荒れ狂う海洋のながめは、断末魔の目に映る凄絶の地獄図というよりない。そっとするような美しさなのだった。トリック映画でしかみたことのない暴風中の船のすがたを、私は現実に体験していた。こんなに恐ろしく、心細いものとは思ってもよらなかった。異様に大きい海の荒れ狂うまっただなかに、なんと人間は小さく無力で、孤独であるのだろうか。

私たちは口々に念仏のようなものを唱え、海の怒りの鎮まるのを待ち、原始人のように祈りを捧げているよりほかに施す術を知らないのであった。

(どうか沈まないでくれ。たのむ、たのむ)

からだの蝶番がばらばらにされてしまったような暴風との悪戦苦闘は、およそ三時間もつづいた。船の速力は半減していたが、午後二時すぎにやっとモロタイ水道を通過、船を左へ転じた。風は次第に風ぎ、船のゆれも軽いローリングにかわった。波浪のあたらない場所へ匍いずってゆき、横たわっている兵たちの目は茫乎と霞み、あとはどうでもなれというようにうつろにみひらかれていた。やっと平常の呼吸をとりもどしたものの、みんな死にぞこないの蚯蚓(みみず)のようにヒクヒクとのびたままだった。

精気をとりもどしたのは、日がくれてからである。

空腹をおぼえ、夕食は乗船以来はじめて咽喉を通った。

「ひやひやの連続やったなあ。肝が上ったり下ったりや」

と言いながら、髭面が笑っている。人間らしい笑顔がもどった。やはり、あきらめてはならない。浮世の方が一、ということはあるのであった。

すでに危険水域は突破していた。空襲も、潜水艦の魚雷攻撃も受けなかった。赤道直下にはめずらしい長時間にわたる暴風の襲来こそ、敵機・潜水艦の出没を不可能にした原因だったのである。まさに大自然の天候異変が天佑となって、私たちを救ったというべきであろうか。

夜は水溜りの残った甲板上に、ずぶ濡れの毛布を敷いて寝たが、どうやら九死どころではなく九十九死に一生を得たような「悪運」の強さを、みんな冗談めいた語り草にして、にんまり唇に笑いをうかべた安らかな寝顔で、ぐっすり睡眠をとった。

翌、八月十七日の昼すぎ、海洋はるか沖に黒い一文字の陸地が浮かびはじめた。それは細長い山脈のかたちをあらわして迫った。

「セレベスだ。セレベス島だ」

という歓声が甲板上に沸騰した。

稜線のすんなり膨んだ部分は、標高二千メートルのメナド富士らしい。セレベス島の高山の一つにかぞえられるカラバット山である。私たちは狂喜し、目に涙をうかべていた。

午後五時すぎ、セレベス島北端東海岸に接した細長い小島、レンベ島との間の水道を縫って進む。やがてビートンの港にすべりこんで、二隻のボロ船は棧橋に横づけとなった。

港の光景、海岸線のたたずまいと一見しただけでも、ズタズタに切りさいなまれて悪戦苦闘中のハルマヘラ島とちがって、敵の侵攻のおよばぬ平和の息吹が感じとられた。オランダ軍を追っばらったあとの日本軍が、厳然として占領状態を確保している様子が一目で看取されるのだった。

私たちは安心しきった表情で、棧橋に降り立った。先頭を白木の英霊が行く。あの暴風は神風だったのだと思いつつ。そして、おそらくこの白木の霊が私たちをセレベスへ誘導し、国のために私たちを護りとおしてくれたのだ、と。

極楽の三丁目

セレベスは、インドネシア中央部東よりあるK字型の大島である。

面積は十八万九千平方キロメートルで、日本本州の八十三パーセントにあたる。北にミナハサ半島、東に東部半島、南部に南東半島と南西半島の二つが突出している。全島はほとんど山嶽地帯で、トンダノ、トゥティには大きな湖水がある。

人口約五万の南部マカッサルと、二万の北部メナド（ミナハサ半島）の都市をのぞいては、ジャングル、椰子林、草原、湿地にかこまれた山嶽帯に、小さい町や村が点在しているだけである。それぞれの地域に、多くの種族が割拠しているが、アラビア人や華僑をあわせて総人口およそ六百万と推定される。

部族の主なるものは、北部ミナハサ族約三十万、北部セレベス族・中部セレベス族・中南部トラジャ族を主とした山嶽族約百万、南西平野部の文明ブギス族とマカッサル族約四百五十万である。各種族ごとに独自の土語があり、酋長は絶対の権力を有しており、なかにはわが国の四国全島ほどを統治して威勢をほしのままにしている強大な酋長も存在するという。ほとんどがイスラム教徒で、キリスト教徒は火山土壌で人口集中のメナドに若干あるが、ハルマヘラ島の原住民よりは進歩している焼畑耕作をいとなんでいる。

島の共通語はマレー語であるが、都会地をのぞいては、ほとんど普及していない。住民の九十パーセントは無学文盲で、小学校すらもないのである。

この蘭領セレベス島を緒戦に占領したのは、海軍航空部隊であった。まず敵中に降り立ったのは、島上空を白い花吹雪で埋めた海軍落下傘の部隊の壮挙で、そのはなはなしはいまなお語り伝えられているほどであるが、したがって、爾後セレベス島は海軍の軍政下におかれた。私たちの上陸した昭和十九年八月の時点では、連合軍の反攻必至とみて、それにそなえるべく陸軍の精鋭関東軍が第二方面軍として転出してきてから約二年有余、北東部に二万、南部に一万余の兵力をもって防備していた。海軍は南北にそれぞれ約五千の兵力を配備しているだけで、陸軍が主力になっていた。軍司令官は、前にも述べたとおり終戦時の陸軍大臣阿南惟幾大将である。

ビートン棧橋に着いた私たちの目に、一キロほどの巾ひろい海岸線が東西に延び、椰子林とその背後に迫るジャングルの規模が、島の雄大さをおもわせた。宿営地へ歩いてゆくうちに、先駐友軍がメナド富士と教えてくれたカラバット山が美しくそびえて来た。さらに、ビートン港の対岸に細長い水道をへだてた東西二十キロにおよぶ海中に横たわるレンベ島の全容を望んだとき、その絶景に歓声をあげたほどだった。

日本軍の厳然と守りぬいている、治安の確保された島の平和ないぶきが、生きぬいてやっと上陸した私たちに、島の風景がより美しくより新鮮にみえたのも当然のことだろうと思う。

椰子林のあいだに点在する部落にも、戦争の爪跡はなかった。平和そのもののような現地人の素朴な暮しぶりをかいまみて、私たちは感動した。裸体で褌いっちょうのハルマヘラ土人とは全く違う。かれらは男も女も、日本の腰巻をダブルサイズにしたような、花模様や稿模様のサロンを腰に巻いていた。黒人ではなく、日にやけた褐色の肌の色で、裸足で歩いていたが、若い娘などは漆黒

の束髪に野性の花をかんざしにましている。

かれらのニッパ葺きの家の軒には、よく熟れたバナナの房がたれさがっていた。どこの家にもバナナの房がたつぷりと取り巻いている感じの豊かさに、私たちは目をみはった。バナナが大量に生る島にちがいない。ハルマヘラ島では、一本のバナナにもありつけなかった私たちである。

「こりゃ、バナナが腹いっぱい食べそうやで」と、みんなニタリ、ニタリごきげんである。

なんども死の恐怖に襲われ、生死すれすれの危機感を精神的にも肉体的にものりこえた私たちにあって、セレベス島は天国に近かった。生きていくという実感のすばらしさ。死の深淵をのぞかなかつたものに、どうして生の快楽がわかるであろうか。なにものかに手を合わせたいほどありがたかった。うれしかった。

私たちは行く先々で木を伐り、草を葺き、溝を掘って自分の住む家をつくったものだった。ところが、セレベス島では、すでに先駐友軍が建造してあった立派な宿舎をあてがわれたのである。棧橋から数百メートルの内陸部に、まだ真新しい小学校の講堂のような建物ができていて、そこへ案内されたときは夢ではないかと目を疑った。宿舎は「ガラン堂」と呼ばれた。当分、ここで起居することを命ぜられたのであった。スコールに遭ってもビクともしなかった。

宿舎の裏側からジャングルに入る周辺に、無数のバナナ島がひろがっていた。最初の命令受領で、連隊本部へ集合した将校たちは、現地人の宝である果樹を損じてはならぬ、という嚴禁命令をうけた。いまや独立の舟艇輸送隊でも、彷徨の通過部隊でもない。治安の確立されたセレベス島の守備隊として、軍規嚴正な第二方面軍司令部に掌握された以上、命令は遵守しなければならぬ、という厳しい達しであった。

しかし、命令受領の将校たちが自分の所属中隊へ還ると、「やるなら要領よくやれ」と兵たちに伝道したのである。軍命令はあくまで理想なのであって、裏には裏があった。背に腹はかえられな

い。
「通達主の将校が先頭に立って、中隊は全員「要領よく」食糧蒐集に出かけた。もぎたてのバナナを食って食って食いまくった。死ねば本望とばかりである。

その日一日で、息をもつかず三十本をたிரらげたつわものもあつた。かれはてきめん下痢と腹痛で七転八倒した。

「ばかもの！ セレベスまで来て、バナナと心中する気か。要領の限度をこえたやつは、軍命令にしたがって、嚴罰に処す」と、将校は叱った。そのあとで爆笑した。

私も率先垂範して、バナナを食ったほうである。セレベス島のバナナはじつに二百五十種ほどあつた。内地でみられた台湾バナナ風の規格型はもちろん、巨大な真桑瓜型のマンモスバナナから、小指大のモンキーバナナまで、大小、色かたち、味覚等千差万別なのである。私たちは、できるだけの種類を採集して来てズラリとならべ、かたづけしから味覚をたのしみ、吟味し、品評会を催したりした。三角形バナナ、てんぷら用バナナなど賞味していったが、日本人の口にあり最高の王者アンボンバナナを発見して、これに軍配をあげた。

アンボンは規格型に近い大きさだが、薄青い皮のまま中で中味は完全に熟れていた。一噛みすると薫香が鼻につき、甘すっぱい独特の美味とともに口中でとろけた。ピサンという現地のことばで、ピサンといえは、アンボンバナナのことになった。アンボンがあれば、何種類のバナナが傍にころがっていても、みむきもしなくなった。まことに、ぜいたくのきわみと言えよう。

「ああ、ハルマヘラに残ったやつらに、一つでも食わせてやりてえなあ」
 私たちは不遇な戦友の身を思いながら、この生活に堪能していた。セレベス産の旨いコーヒーにもありつけるようになった。その他、マンゴスチン、ランブータン、椰子の実、パイヤなども賞味できた。米は丸粒の旨いセレベス米が配給され、副食も水牛の肉、塩干魚、南瓜、胡瓜、茄子などが出廻ってきて、營養には事欠かなかった。空襲はなく、払暁、おびただしい小鳥の声をききました。

私たちは一週間ほどで、すっかり元気を回復した。ハルマヘラ島を地獄の八丁目とすれば、さしあたりセレベス島は極楽の三丁目ともいふべきか。信じられないほどの幸運であった。

米軍重爆B24一機が、セレベス島上空に侵入し、一万メートルの高度で旋回しつつ消え去ったのは、八月二十四日である。

「おいでなすったな」と、みんなドキンとした。偵察と日本軍施設の航空写真撮影、その出現のしかた、青空での旋回、消えかたも一切ハルマヘラ島大爆撃直前とそっくりそのままである。ハルマヘラを完膚なきまでに叩きふせた米軍連合軍はくびすを接して私たちを追いかけて来た。そう採るよりなかった。覚悟の前であるが、たった一週間の極楽生活とは殺生な、とみんな顔を見合わせた。ガラン堂は上からみとおしの好目標でしかない。離れるには惜しい環境であったが、撤収を余儀なくされた。二十八日に、ビートン西方十キロのさびしいK村に移駐した。ここは鬱然たる翠樹に囲繞されていて、待避壕を掘ればまず安全地帯とみうけられた。まだ極楽の何丁目であることはまぢがいらないらしく、近くに温泉川が流れていた。

ある日のこと、ハルマヘラの残留部隊から、連絡の将校と兵がカムイーを漕いでビートン港に着いた。全身を真黒にぬりたくった土人の姿で、シャツに階級章をつけていた。第四中隊長の瀬尾中尉と、兵三名である。

かれらの言うところによると、ハルマヘラ島の各港湾には一隻の船舶もなく、死の海と化した。二十一日に大空襲があり、ワシレ北地区にあった軍司令部は潰滅的打撃をうけ、吉田大佐、山本少佐の両参謀をはじめ、多数の将兵が戦死した。セレベスの戦友の顔もみたかったが、やむにやまれぬ気持で脱出し、連隊長の指示をうけに、決死の航行をつづけて来た、というのである。

「よく来た。しかし、危険海域をカムイーで突破できたものだな」

関根中佐は感激して言った。

「敵機には四回遭いましたよ。手を振ってだました。どこから見ても、土人そっくりですからな」
 瀬尾は豪快に笑った。が、関根中佐は中隊長の決死の独断専行を、人情でうけいれることはなかった。それは無意味な行動にすぎず、作戦圏外の無謀にほかならないからである。三日のち、瀬尾中尉以下四名は、全身に墨をぬりなおし、ふたたびカムイーをあやつって、ハルマヘラへ還っていった。

私は軍事機密、作戦、命令系統について、いつも判断に迷うほど無知であるが、下級であっても小隊をあずかる少尉が、なにことも知られないという事実にも疑問を抱いていた。それほど上層部の作戦指導が混乱し、大東亜戦争全域におけるわが軍の頑迷と狼狽ぶりが推察されるのであった。セレベスの第二方面軍司令部の将校から連絡の際小耳にはさんだのは、すでに東条内閣は敗戦の責任を負って七月十八日に退陣しており、小磯・米内内閣が誕生しているとのことだった。このような重大事が真実なら、なぜ軍司令部命令もしくは会報で、全将兵に伝達しないのか。おそらく将兵

の動揺と士気の遅緩、非戦論の発生をおそれてのことだちがいないが、事ここに至っては、知られないことの不安のほうが大きいのである。

連隊内の消息——たとえば決死の覚悟で連隊長の指示をうけに来た瀬尾中尉以下四名が、はたして無事ハルマヘラにたどりついたのか、また、ハルマヘラに残された三個中隊がその後どうなったのかさえ、私たちに知られなかった。敵の反攻に寸断されてばらばらになり、命令系統も混乱してしまふほどの敗戦なら、なんとしてでも、瀬尾たちをセレベスにとどめることができなかつたのか、これも私にはよくわからなかつた。

瀬尾たちがあわれにもカマーを漕ぎだしていったとき、戦争の無情・非情に息をつめるだけで、私たちにはどうすることもできなかつた。その直後、また不思議な軍上層部の命令が出て、私たちをおどろかせた。

それは第一中隊第二小隊長下村少尉（台北出身）に、比島マニラへの出張命令が出たことである。目的は関根部隊に配属されるはずの大型発動機船数隻の率領というのであつた。いまごろになつて輸送隊の舟艇が配属される。どう考えてもわからなかつた。

すると私たちは元のままの輸送隊であり、したがって海上機動第二旅団は生存していなければならぬはずだつた。西部ニューギニアで玉砕したという情報はあやまりであつたのか。私たちが本来の任務に就くことは、マニラ出航以来の目的であつてみれば、舟艇受領の命令は吉報といつてもよい。しかし、どう考えても納得いかないのは、死の大航海を聞いてセレベスまでやって来た部隊に、またマニラまで引き返して舟艇をうけとらなければならぬ無茶な命令のどころである。

不思議であろうと無茶であろうと、命令には絶対服従しなければならなかつた。反問はゆるされない。「おかしいじゃないか。いまごろ、そんなこと言うんなら、なぜマニラ出航のとき、舟艇をつけてくれなかつたんだ」と、言いたいところである。

下村少尉は下士官兵二十名を従え、勇躍フィリピンに向けて出発した。比島行の便船があることも、不思議であつた。

このような命令が狂気の沙汰であることは、誰しも感じたし、無事に還つてくると信じたものになつた。ただ僚友の武運長久を祈つて、私たちは桟橋まで送つたが、案の定、かれらは永久に戻つてこなかつたのである。

かれらの消息は、戦後風の便りを残しただけで、それっきり断絶した。全員戦死と行方不明である。（風の便りといつても、死人に口なしで、真偽のほどはいまもってわからない。運よくマニラに到着、大発舟艇数隻を率領して帰航中、白昼敵機に捕捉されて全船撃沈、ごく一部のものが無人島に漂着したらしい、というのが風説である）。

もし、下村少尉でなく、私に命令がくだつたとしたら、私が下村の運命をたどることになつたであろう。紙一重の運命の差というよりない。なぜなら、第一中隊の生き残り小隊長は、私と下村の二人しかいなかった。舟艇受領は下村でなければ私、私でなければ下村であつたからである。

小隊長五名のうち、浦川慶一、郷祥の二少尉はすでに戦死してゐた。そこへ下村少尉をとられ、寺内少尉は重傷治療中の身の上であれば、使いものになる健康な小隊長は、私一人となつてしまつた。私は中隊の最右翼、上級将校として、責任が倍加した。ガレラへの上陸の前に、デング熱で死生の間をさまよつていたとき、中隊でまさきに死ぬのは自分だと思つた。まだ二十六歳の青二才で、小隊長の任務に耐えられるとは思わなかつた。この臆病者のぼんぼん将校が、中隊でたった一

人生き残りの小隊長になったとは。もはや、運命というより仕方がないではないか。

私は運の強い生き残り小隊長となり、唯今の中隊では中島中隊長のもっとも有効な手足の一つとなった。連隊長の関根中佐も、私をみとめはじめたようであった。中隊長代理で連隊本部へ連絡に行くこともしばしばあった。私はもちろん、連隊長を絶対に信頼しており、信頼しなければ、命令によって動く戦場で、一日も生きていられるものではなかった。

しかし、命令の非情と不条理に突きあたることに、軍上層部への疑惑が払いきれなかった。将兵の陰口もみな同じだった。

ほんとうかどうか知らないが、次の風評が流れていた。

関根中佐は陸軍大学出の秀才で、将来、閣下に昇進できるエリートコースの現役軍人だったが、なぜか中佐で退役した。その理由は、極めて慎重な人格だったから、というのである。慎重かつ頭脳明晰で緻密な秀才が、なぜ玉にきずとなったのか、わかる由もない。しかし、命令や指揮のなかに、「なるほど慎重な」性格が、あらわれるのもたしかに事実だった。絶対の権力を行使する頑固さのなかにも、玉にきずの原因が読みとれないこともない。

関根中佐は現役ばりばりの若い中堅将校ではない。一たん退役した予備役として今次大戦に召集された初老の連隊長なのである。そのせいかたしかに無理をしない性格であった。それにしても敵機がビートン上空に二、三回あらわれたとき、命令受領に行った私たち各中隊将校に「ハルマヘラ島で爆弾の擦過傷をうけ、まだ鼻柱に大きい絆創膏をはりつけている関根中佐は奇妙なことを言った。」「今後、行軍に際しては、いかなる小単位でも一列縦隊を厳守されたい。兵と兵との距離を三メートル以上とし、道路のまんなかは避けて、側端を行進し、つねに木陰を活用すること」

解散したとき、将校たちは首をかしげていた。行軍は四列縦隊にきまっている。一列で兵と兵の距離を三メートル以上もあける、などとは空襲時の兵の損害を少なくしようという連隊長の親心としても、少々納得しかねた。

しかし、命令は拒否するわけにいかなかった。「死ぬ」といわれれば、死なねばならぬ軍隊なのである。「かっこ悪いことになったぜ」と、関根中佐の命令を一面で失笑しながら、実際上の指揮者にあたる将校は、早速実行に移さなければならなかった。

私は一列で三メートル間隔、道の端を歩かせる行進方法を採り、K村からビートン港まで、毎日小隊を指揮して、荷役作業に通った。だが、敵の大爆撃がはじまるまでは、私たちにとって、セレスは極楽の島であった。

火事場泥棒

私は関根連隊長の命令を忠実にまもった。部隊を引率するとき、一列で行進させることである。百名を引率するとき、長蛇の列は三百メートルにも及んだ。

私はその滑稽さを知っていた。いかなることに服従する命令だが、事の如何によっては、嗜虐的な心理におちいるものである。私はいつか他部隊の将校から難詰され、さんざんな目にあうことも覚悟していた。貨物廠の兵士たちは、この奇妙な一列縦隊がやってくるのをみると、「一列一個連隊」と言って笑った。予感ば、まもなく適中した。

行進中、佐官級の赤い標識をひるがえした乗用車とすれちがった。私はストップをかけられた。乗用車は先頭の私のところまで戻って来てとまった。出て来たのは、参謀肩章をつけた少佐で、「指揮官は、その少尉か。なんだ、このさまは」

と、目を怒りにとがらせて、私に詰め寄った。とうとう来たな、と私は思い、不動の姿勢をとった。悪い人にもつけられたものである。少佐は第二方面軍司令部付の富田参謀であった。

「これは、演習か」

と、少佐参謀は、威嚇のなかに呆れたような表情をたたえて、私をじろじろ眺めた。

「いいえ。敵機来襲にそなえ、待避の隊列行進を実施中でありませう」

「馬鹿野郎。どこに敵機が来ておる？　どこの部隊だ。連隊長は誰か」

「はッ。海上機動第二旅団輸送隊、連隊長は関根中佐殿であります。この隊形は、連隊長命令であります」

この場合、少佐が一階級上の中佐に文句をつけることはない、ということも私は心得ていた。私は命令に従わなければならなかった下級将校として、むしろ軍参謀にことの正否をきいてもらいたかったのかもしれない。だから、悪びれなかった。

「びくびくしているからだ。よくない。卑怯者だ」

と、富田参謀は吐きだすように言った。

「爾後は、ゆるさぬ。規定どおり四列縦隊で行進せよ」

「しかし、連隊長殿の命令であります」

「貴様！　少尉、よいか。こんどみつけたら、ただちに一つ星の兵隊に降等する」

「はいッ」

私は少佐に敬礼し、目の前で、四列縦隊に隊形を変えた。参謀の車は去った。私はなぜか叱責されたのがこころよかった。そして、多少おかしかった。三十五、六歳、陸大出の張り切った少佐の言うことのほうが、連隊長より正しいのにきまっていた。しかし、中佐を少佐は責めることができなかった。少尉の私なら叱り飛ばせるのだ。

私は連隊長の命令を実行することの滑稽さを知り、嗜虐的な心理状態になっていた。それを少佐参謀が証明してくれたのだと思った。階級制度や命令の厳肅さにもなう、軍隊のニューモラスな一面である。これを笑えなければ、戦場における軍隊生活は、一日も勤まるまい。

私は以後、連隊本部や中隊の宿営地付近では、一列行進を実行し、遠くへ離れると、四列にあらためた。上官の命令は絶対に服従するが、こんなことで一つ星の兵隊に降等されては、たまったものではないからである。

だが、敵機はまもなく来襲した。連日爆撃が始まると、一列縦隊の退避行進も、状況に適したものとなる。こうなると五十七歳とかいう連隊長は、たしかに苦勞人であった。関根連隊には一兵の損害もなかった。「一列一個連隊」と渾名(あだな)をつけて、馬鹿にしていた貨物廠の兵隊も、はじめて爆撃の洗礼をうけると、ジャングルへ逃げ、行進のときは、間隔をとった一列、もしくは散開の隊形をとらざるをえなくなった。

八月末日、米軍機大量ビートン上空に飛来。野外に堆積した貨物廠の貨物を粉碎した。重爆B.24六機編隊、新鋭戦闘機P.38をしたがえて、千メートルの低空から猛爆をつづけた。在来部隊は泡をくったが、ビートン、K村間で貨物の隠匿整理作業をやっていた私の中隊は、爆撃の退避では一日

の長があった。行進時の散開隊形だけでなく、作業中の退避準備も完璧なものであった。米軍機の偵察機入から、威嚇爆撃、本格的な激滅低空猛爆に至る行動は、事前に肌で感じとった。いざとなると、逃げ足は抜群であった。ジャングルに逃げこむと、危険を避ける本能的な嗅覚で、獣のように自分の穴をみつけた。自分のからだに合わせた穴を掘り、その穴のなかでじっと目を光らし、絨毯爆撃の轟音、低空銃撃音、地上砲火や空中戦の様相をこまかく聞きわけられる耳に、全精神を集中していれば、経験者の私たちは高見の見物ともいえるのであった。

低空の空襲で、P38一機を撃ち落とされただけの敵編隊は、凱歌をあげて、レンベ島東方の空へ飛翔し去った。私たちはこれでしばらく来ないということを知っている。午後五時ごろ、穴からもぞもとはいだして、中隊は帰途についた。爆撃の跡は惨憺たるものであったが、私たちはなれなかった。身をまもることには、鉄のよろいをまとうに似て、自信満々であった。一人の損害がないことも、自信をふかめているのであろうが、ケロリとして、阿修羅の戦場を、日常茶飯事と心得ている。ふてぶてしいほどだった。私は相かわらず一列縦隊の指揮をとりながら、感動していた。兵士たちは、鍛えられて、みちがえるようにたくましくなったではないか。

K村に近く、後方から近づいて来た乗用車が、先頭の私の横で急停車した。

「停止！」と叫び、飛び降りて来たのは、富田少佐であった。

「——なんだ貴様か」

私は参謀に敬礼した。敬礼を返した少佐の顔は、一列縦隊を難詰していなかった。むしろ、奇遇をよろこんでいるふうにみえた。

「御苦労だが、急遽ビートンへ反転してもらいたい。ビートンの貨物集積所が爆撃でやられた」と、富田は言った。「貨物廠の作業員は損害をうけた。貴公たちに整理作業をやってもらいたい。敵は今日、明日にもやってくるかもしれない。朝までに完了せよ。隊長には自分から言っておく。わかっただか」

「はッ。これよりビートンにいたり、貨物整理作業に任じます。トラックは、差し向けていただけますか」

「後刻、多量に出す。ようしー」と、少佐は満足そうに叫んだ。「夜を徹して、残品を積みこむんだ。ただし、今夜は特別給養をうんとこさ届けてやるぞ！」

私は隊を廻れ右させた。かけ足行進の必要上、四列縦隊にした。私たちは靴音高くビートンへ向かって走りだした。私は莞爾とした参謀の顔のなかに、無傷の一個中隊に遭遇したよろこびをかんじとっていた。きつと少佐は、たのもしく不思議にさえ思ったのではなからうか。あれほどの恐怖の爆撃にさらされたながらこの中隊がビクともせず、余力じゅうぶんの精気をたたえていたから——。ビートンに着いたときは、薄紫の暮色に包まれていた。集積所のシート掛け軍貨物は、見るかげもなく破壊され、吹きとばされていた。あちらこちらで炎が立ち、焼くすぶり、臭気は鼻をついた。戦死傷者は、かたづけられていたが、窪地の水たまりは赤く、肉片は散乱した貨物にへばりつき、目をおおう惨状である。

貨物廠の兵士たちが、爆撃直前まで他の部隊には一指もふれさせまいと貨物を護って、程々にピンハネしていたありさまが目にかぶ。爆撃の経験のない彼らは、もろに被害をうけたものと思われる。私たちは、軽い携帯口糧の夕食をしたためてから、仕事にとりかかった。もう、あたりは暗

使えるものと、破損したものをよりわけた。下積みの頑丈な木箱や、ブリキ製の梱包は無事であったが、吹きとばされた木箱や麻などの袋、藤編みや草の菰包みなどの物資はほとんど使いものにならなかつた。やがて、輸送トラックが、第一陣、第二陣と到着して来た。被害のすくない山上から運びだした貨物から、トラックに乗せて行き、かけ声も勇ましく深夜まで呐喊作業をつづけた。破損した貨物のなかから、食糧品をみつけた。糧秣類は一カ所に積みあげられていたらしく、散乱したもののなかに、乾パン、コンビーフ、甘味品、煙草などがまじっていた。兵士たちは蟻のようにたかっていた。汗だくだけの徹夜作業で、みんな腹がすいていた。働きながら、手あたり次第落ちていく食糧をむさぼった。

日本酒や葡萄酒までみつけた。このようなとき、兵隊たちは嗅覚の天才といってもいい。はじめは、珍品の散乱におどろき、こわごわ拾って食べたのが、しまいには、嗅覚で探した。酒をみつけた連中は、「匂うぞ、匂うぞ」といいながら、さがしあてたものだった。まるで火事場泥棒というべきであろう。貨物廠の兵士の犠牲のうえにおいて、銃後の人びとの熱誠こめて送られて来た貴重な糧食を、火事場泥棒式に奪いとるのは、皇軍のなすべきことではあるまい。軍紀厳正を訓えるべき立場の指揮官が、黙っていてよいものか。私は考えこんだが、結局、みてみないふりをした。戦場にも、どさくさまぎれというものがあるのだった。命令一下、兵士たちはやめるにちがいないが、こんな僥倖は二度とあるまい。どうせ、誰かにとられてしまう廃棄物や、乱梱であった。私たちはビートン上陸以来、たった小型羊羹一本、煙草一日四本しか、加給品として渡らなかつた。みんな飢えていた。しかも、カロリーをはるかに超える労働を強いている。猫に鯉節の状況をあてておいて、

「貨物に手をつけると厳罰に処す。あとで服装検査を実施する」

などと、野暮なことが言えるであろうか。

私は「特別の給養をあたえる」といった参謀にも、腹を立てていた。トラックが運んで来た参謀特別給養というのは、一人乾パン二袋と、南洋豆のまずいゼンザイ一杯であった。これで朝まで働けというのか。こちらはとろうと思えば何袋もの乾パン、百本もの煙草、菓子や羊羹の箱詰めをさくり、おまけに罐詰にワインまで、目のまえにころがっているのである。こんなチャンスは二度とない。闇夜の泥棒も、戦場の役得というものだ。みんな、食え、食え、と私は心の中で叫んだ。

實際上、広い集積場に分散し働いている全作業員を、取り締まるということは、何人にも不可能だ。私は、このようなとき、指揮官が黙っていることは、いざ戦闘となったときに、部隊掌握上、効果を発揮するにちがいないと思った。兵士たちも人間である。話のわかる隊長ということを強く印象づけられ、おのずから強固な団結力がやしなわれる。この泥棒猫は、暴行略奪を行なっているのではない。

私は、そう自分に言いかかせたが、部下といっしょになつて、食糧を拾い、むさぼり食うわけにはいかなかった。将校のつらいところである。仕事はかたづき、朝がおとすれた。掃堂の整列をかける時、さすがの私もおどろいた。戦利品を身につけて、みんな、からだがふくれあがっている。もの入れというもの入れには甘味品がいっぱい詰めこんであり、背中に結びつけた鉄帽の中も一杯で、二十センチほど背中から浮きあがっている。風呂敷包みにして腰にくくりつけているものもある。大胆なものは梱包ごと持ち運ぶつもりで、後尾のほうでゴソゴソやっているのだった。あまりにもひどいので、服装検査をして、みんな吐きださせてやりたい気持が、むらむらとおこった。

私の顔色を察してか、笠井上等兵が私の伝令に近づいて、こう言った。

「小隊長用の葡萄酒、二十四本入り木箱は、おれが持つてるからな。中隊長殿の申しつけなんだ」
私は苦笑した。ぬけ目のない、利巧な兵隊にはかなわない。私だって葡萄酒くらい飲みたかった。小隊長といっても、部下兵士の中では、年が若い方である。人間としては、食いざかりの青二才でしかなかった。

「小隊ごと、一列縦隊で帰營する。気をつけい、そのまま、右向け右ッ、前へ進め」と、号令をかけ、私は笑いを抑えながら、先頭を歩きだした。

メナド港

九月初旬、メナドに移った。メナド港の揚塔作業に従事するためである。

セレベス島の北東部、先端にあたるメナド港は、ミナハサ族が原住民族で、コブラ、コーヒーの産地として知られている。ミナハサ族は服装も都会風に洗練されており、目をみはるほど日本人に似ていた。オランダがセレベス島を植民地としたとき、原住民族をキリスト教に教化し、文明人として育て、東南アジア各種族とオランダとの橋渡しにしようとした。そのため、ミナハサ族の間から、オランダの官吏、軍の下級将校などが出ており、セレベス島原住民族中、最高の文明人に成長したのだという。

緒戦において、メナドのオランダ人は、日本海軍に追い払われてしまったが、なぜか、ミナハサ族は私たちに友好的であった。色が淡褐色で、少しけわしい目つきなどには、インドネシアの血が濃厚にかんじられる。しかし、黄色に近い肌色のきめこまかい白いツヤに、日本人そっくりのものが、かなり多く見うけられた。親しそうに近づいてくる現地人は、祖先は日本民族にちがいないのだ、と懸命におせじを使ったりした。英語の話せる知識人にきくと、タイにわたった山田長政時代、多くの日本人が東南アジアの島々に分散移住し、セレベスのメナドでは、ミナハサ族の女性と結婚し、住みついたものがかなりあったという。日本軍に跪拝するためのおせじで、眉唾ものに相違ないと思われたが、日本人そっくりの子どもや、墓塚、垣根などに日本の風習をかんじさせるものも残っていた。いずれにせよ、先駐海軍部隊が毅然と港の治安を確保しており、街も平和なたたずまいで、現地民が歓迎してくれるのだから、こんなありがたいことはなかった。

敵の空襲は偵察程度の段階で、防空壕などは海軍の手で、かなり完備されていたし、ほとんど被害はなかったという。私の勘では、三十キロ離れているだけのビートンに、B 24の重爆が跳梁しはじめたのだから、ここ数日の平和かもしれない、と踏んでいた。考えてみると、移駐する場所は必ず爆撃直前であった。大爆撃がはじまって、移駐命令が出る。私たちは、つねに爆撃に追われ追われて転進する奇妙な渡り鳥部隊といえよう。あるいは、敵のタマは永久にあたらぬという、運命に左右されているかのようであった。

作業開始の前日に、関根中佐は部隊の将兵に外出の許可をあたえた。かつてないことであった。外出できるほど治安が維持されており、敵襲の危険もないという証明にちがいがなかった。私は久しぶりの解放感に足も軽く、同僚の機動中隊長斎藤少尉（岡山出身、新居浜高工卒）、三好少尉（大阪市出身、大反外語卒）と、ついでに外出した。

おどろいたことに、街から十キロ奥地の山中に、日本人経営の料亭「隅田園」があった。人づてに聞いて、やっと料亭に辿りついたが、佐官以上でない「陸軍さん」は遊べないという。南方に於て以来一人も見なかったことなかつたなつかしい日本女性が七、八人働いていたが、強引に上りこんだ私たちも、偉い「海軍さん」の登場で、追いかえされた。

これは最初の占領軍が作った海軍施設ということである。南方作戦の緒戦の勝利で、各占領地は日本の植民地となり、内地からほとんど料亭経営者が娘子軍をひきつれて来た。これもその名残りの一つであろう。「隅田園」も、堂々市中に豪華な店をひらいていたが、敵反攻の不安におびえ、山中に待避したものと思われる。下級将校の悲しさで、なつかしい日本女性にめぐりあいながら、退散のやむなきにいたったが、考えてみると、あの女たちはどうなるのだ。敵の再上陸必至であれば、袋の鼠となり、第一番に敵のいけにえになるのは、あの日本女性たちではあるまいか。いや、比島、シンガポールなどへ、大挙進出していった大和撫子はどうなるのだ。

そう思うと、帰營する私の背は鳥肌立った。今日一日の外出をゆるした関根老中佐の「温情」を、私は理解しているのであった。明日はどうなるかわからない。だから、大いに遊んで来い、という危機を覚った指揮官の決断にちがいないのだから。ああ、負けたくない。戦争は勝たねばならぬ。私たちは陽気に話しながら、山を降っていったが、解放感はあるというまに過ぎた。どすくろい敗戦めいた庄迫感が、宿舍の近づくにつれて、胸をしめつけてくるのであった。

翌日から、作業開始であった。関根連隊長は大爆撃を予感して、例によりすかさず市中より西方八キロの山中へ宿舍を移動した。そこから、毎朝、昼食携行で埠頭作業場へ通った。作戦（作業）戦闘指揮所はメナド港先端にあった。総指揮官は富田少佐参謀である。

補佐の副官は歴戦の現役将校大竹大尉。私たちの作業中隊長は、関根部隊機動中隊の野村中尉であった。私は第一棧橋作業場長、斎藤少尉が第二棧橋作業場長である。五百トン級の小型鉄鋼船がまず入港してきて、貨物の揚陸作業がはじめられた。いつもとちがって、作業はきつかった。昼夜兼行の突貫作業が指揮所から命ぜられた。ひきつづいて数日中に、敵反攻上陸にそなえての歩兵部隊が、五千トン級の輸送船二隻に分乗し、メナド港にはいつてくるのである。それまでに揚陸の貨物を集積、運搬、整理を完了しておき、電光石火の短時間で、入港輸送船の兵器・弾薬・資材・兵員の上陸、揚塔作業を実施しなければならない。陣頭指揮の富田少佐は獅子吼し、目は血走り、いつになく殺気立っていた。

北部セレベスへ、約五千名の将兵と兵器、弾薬などが投入される。それは敵上陸を予知した大作戦の展開を告げるものであろう。現役の参謀が、まずから戦闘指揮所を港に設置し、作業の指揮をとるということは、異例といってもよい。第二方面軍司令部の作戦行動がメナドに集中するとすれば、いよいよ大事の出来と覚悟しなければならなかった。ついに逃げ切れず、ここが死に場所となるのか、と思ひ私たちは緊張した。

富田参謀は叫んだ。

「今後、絶対不可能と思われる内地から直行の大型輸送船二隻がはいってくるのだ。二、三日うちだ。いや、明日かもわからん。敵機の総攻撃を覚悟し、今回の揚塔作業を『決死揚塔作業』と命名する。死んでもやりとげろ！」

しかし、私たちの直属上官野村中尉は、富田の殺気とはうらはらに、どこか飄々としていた。指揮所と作業場とのあいだを往復し、命令を伝えたり、参謀と大尉の間に割ってはいり、いつも落ち

ついて、ゆうゆうと連絡をとっていた。

「おまえら、チャッ、チャッ、と部下をうまく掌握して、早うやれいのッ……」

四国弁まるだしの、これがとっかん作業の命令だった。張り切った現役将校と、老幹候出身の違いであるが、いざさか野村中尉は変わっていた。

現役のパリパリの将校が指揮すると、身もひきしまり能率はあがるかも知れないが、窮屈すぎる。切れ味のよい軍刀の下でおびえているような、ドレイ的な心情にもなる。ときに反抗的な気持にもなる。富田少佐や大竹大尉の叱咤には、そんな威圧がかんじられた。そこをほどよく調和させ、関根部隊らしいベースで、愉快に仕事できたのは、野村中尉のおかげであった。野村中尉は出身地の方言を使って、私たちを笑わせさせた。中尉は土佐の出身で、古参の幹部候補生あがりである。

関根連隊は、士官学校出の職業軍人から一度退役して召集された予備役中佐の関根連隊長のほかは、全部、幹候あがりの将校ばかりであった。下士官兵は、中国戦線に出動経験のある現役兵が大部分を占め、三分の二は東北地方、あとは全国からの召集兵である補充兵もまじっていた。が、連隊長は一応骨のおった生粋の軍人で、下士官兵の主力が現役兵であるため、幹候あがりの若い将校は、そのあいだにはさまれて苦勞も多かった。軍人として、現役の将校にはとてもかなわないというひけめがあり、若い少尉のほやはやには自信喪失から来る劣等感で、頭があがらなかった。それを知って、現役の将校はピンピン威嚇の鞭をふるい、「その少尉、なんだそれは、バカヤロウ」というふうに悪罵を浴びせ、鍛えようとする。私たちは、ますます自信をなくし、萎縮する。

たしかに、幹候制度は即席の幹部を養成するしくみで、いざ戦場へひっぱって行かれても、階級どおりの任務を遂行できるかどうかあやしいものだった。中学(旧制)以上の学歴あるものが、入営に際して幹部候補生を志願すれば、成績に応じて甲種、乙種にわけられ、特別教育の結果、甲種合格者は見習士官、乙種合格者は伍長の階級をあたえられるのである。

この間、一年余の速成教育で解放され、将校、下士官になれるのだから、たとえば、幹候出の少尉と、幼年学校から士官学校にすすんだはえぬきの少尉とでは、おなじ階級でも、実質的に雲泥の相違があった。

しかし、士官学校出の将校は、兵士を殺すことぐらひは、へのカッパの気性のはげしい人が多かったから、兵士はどこかしら抜けた甘い幹候出の上官をむしろ歓迎した。

野村中尉の考巧さは、長い戦場生活から学びとった幹候上りの知恵であるに違いない。こういうやりかたもあるのだ、と私たちは内心大いに敬服した。

誰でも真似のできることはないが、軍人らしからぬ方法、人間的な接触のしかたで、部隊を掌握する方法であろう。軍人らしくやったら、「将校ショウバイ」の士官学校出には、太刀うちできない。

ともかく、私たち若い少尉は、富田少佐の殺気をやわらげるように調和する野村中尉のおかげでむしろ愉快に部下を掌握し、作業能率をあげることができた。しかし、明朝で作業が完了するといふどたんばに来て、敵機の空襲をうけた。

月明の空は、襲来する敵機の爆音におおわれた。港の本船はじめ、停泊船舶はパッ、パッと消灯。「作業停止！」の号令が指揮所から発せられた。「退避！」と、野村中尉は叫んだ。なぜか、空襲警報のサイレンが鳴らなかった。

五、六台のトラックが棧橋へもどって来た。作業場の灯火はことごとく消され、まっくらやみの

沈黙が、次におとずれる爆撃の恐怖を示していた。「消せ、消せ、消せ」と、近づくトラックに向かって兵士たちは叫んだ。空トラックは、自分のエンジンの音で、敵機の爆音がきこえぬらしい。トラックの前哨灯が消えたとき、空襲警報のサイレンがわめきだした。そのときすでに、第一陣の敵爆撃機は頭上に来ていたのである。

敵はトラックのヘッドライト目標に、機首を埠頭作業場上空に向けたらしい。突如、照明弾の投下で、メナド港一円は敵の視界にさらされてしまった。照明弾が消えると、旋回急降下の無気味な音が伝わり、不思議に研ぎすまされた私の耳に、「スル、スル、スル……」——それは爆弾の落ちてくる音がきこえた。直撃をくらはば、一発で数十名が粉微塵の肉塊となるはずであった。みんな、近くへ散開し、あちらこちらに死んだように伏せている。私だけが立っていた。こうなれば、逃げても、かくれても、伏せても、やられるときにはやられるのである。もう、爆撃はいやであった。こんな体験のくりかえしは、やり切れない。憤怒と、意地と、運だめしの気持からか。自分でも不思議な心境であった。不敵にも私は、その場を動かうとしなかった。直立不動の姿勢で、立っていたのである。

「スル、スル、スル……」爆弾の落ちてくる音がわかり、落下するまでの、わずか何秒かのあいだに、高速度撮影のフィルムを逆回転させるような、緩慢で長い思考があった。不思議な心境である。私は、もう落ちてくるか、粉碎されたしゅんかん、人間はどうなるのか、それは一秒の何十分の1かのことであったろうが、ながいながい、耐えられないほどのながい時間にかんじられた。

爆弾は、百メートル前方の水際に落下した。轟音と閃光。私は、ちょっと前のめりになったにすぎない。からだを撫でてみるまでもなかった。生きている。不思議なことに、敵機は一発落としたにすぎない。風のよう吹きすぎていった。港の船舶も、埠頭の作場場も、人員資材に何らの損害も受けなかった。

作業員を整列させて、人員点呼し、各作業場毎に、損害の有無を野村中尉に報告した。私の作業員だけ、半数近く、まだ戻っていなかった。逃げ足早く、ジャングルまで退避し、自分の穴の中で、じっとうすくまっているのだろう。臨機応変、爆撃の洗礼を何度も受けた兵士たちは、いつものように、関根部隊流の退避をしたのちにがいない。しかし、今夜はちがっていた。総指揮官は方面軍司令部直属の富田参謀である。私は、少佐の前に呼びだされて、はげしく叱責された。ついに、将校全員が集合をかけられた。

「バカ、バカ、バカ」と、富田は怒号した。「貴様ら少尉、作業場長がオロオロしとるから、部下に逃げられるんだ。さがして来い。十分以内に全員集合、作業再開。明払曉、大型輸送船二隻、急に入港の予定である。それまでに今の作業を完了せよ。輸送船入港時の揚塔作業中は、敵の空襲もあるも、作業は続行する。わかっただか、わかっただか！」

私たちは、青くなって、承服するよりなかった。残りの兵士に、めぼしい場所をさがさせたが、よほど遠くへ行ったとみえて、とうとうみつからなかった。私は、仕方なく作業を再開したが、次第に腹が立って来た。

「逃げ足が早くなつたなあ。いいさ、何も死に急ぐことはない」

と、私も大刀かついで避難の先頭を切ったものだった。しかし、状況が違う。まかりまちがえば、方面軍の問題となり、敵前逃亡の処罰を食うかもしれないのであった。私は、責任上、まじめに陸軍刑法第七十五条を思い浮かべていた。

……故ナク役職ヲ離レ、又ハ役職ニ就カサル者ハ左ノ区分ニ從ツテ処断ス。

一、敵前ナルトキハ死刑、無期若ハ五年以上ノ懲役又ハ禁固ニ処ス。

ここは、敵前なのである。

「まあ、ま、そうむぎにならんで、つかされェ」と、野村中尉は、ここにこして私をなだめた。「チャッ、チャッとやっちょれば、帰って来るさ」

その通りであった。いつのまにか人員がふえている。私は点呼をとってみた。全員、ちゃっかりして、いつもの顔がそろっていた。一名も欠けていない。

「逃げた奴は、三步前へ出る！」と、私はどなりつけた。「おれは、知っているぞ。逃げた奴は自分の胸に手をあててみる。これが退避か。敵前逃亡になることを考えてみたことがあるか。逃げた奴は、いくら知らん顔にしても、戦友が知っておる。いや、自分自身が一番よく知っているはずだ。あくまで、自分をいつわるつもりなら、出なくともよい。逃げた奴は、朝めしを食うな。

——出る。いさぎよく、三步前へ出る！」

幹候出身の私は、支那事变以来歴戦の勇士たちに、劣等感をもっていた。遠慮をしていた。だから、甘くみられたのかもしれない。これからは困る。私の怒りは、爆撃中、不動の姿勢をとっていた自信が、反射していたのかもわからない。こんなに兵士たちを集めて怒ったのは、はじめてのことであった。兵士たちは、私の怒りにおどろいたのであろう。反省もしたらしかった。はじめは、ためらっていたが、二名、三名と前へ出ると、逃げた連中は、ことごとく列を離れ、ピンタを待つ表情で、私の前にならんだ。

「ようし、わかった。解散して朝食。みんなと一緒に食べ。大型輸送船がすぐはいってくるぞ！」

私の胸もスカッとはれた。そして感動していた。部下掌握のコツを、やっと会得したように思われたのであった。だが、輸送船入港時の作業は大へんだと思う。敵機は、大爆撃を敢行するにちがいない。富田少佐の前で、さきほどの汚名をそそぐためにも、一步も退かず、作業を続行してみた。阿鼻叫喚の中の壮烈な揚塔作業が、私の目にうかんだ。あるいは、ここが、部下たちとの死に別れかもしれない。

私は悲愴な気持で、兵士たちにとりかこまれながら、朝食を終えた。おそらく、こんどは誰一人逃げないだろう。そう思うだけで、私は部下たちがいとしくてたまらなくなった。

朝の太陽がまぶしく海面に照り映えるころ、駆逐艦二隻が、沖合に勇姿をあらわした。日本の軍艦旗である。そのあとに大型輸送船がつづいてくるにちがなかった。港内、投錨の位置はわかっていた。私たちは作業員を満載した大型発動機艇に、空のボート数隻を繋留し、日の丸をうちあつて埠頭を出た。大発は小気味よく、おだやかな金波銀波のうねりを切りさいて進んでゆく。

駆逐艦は舳をそろえて停止したが、なぜか、輸送船のつづいてくる気配はなかった。上甲板には、裸同然の兵士たちがひしめいていた。舷側で手を振っているものもあった。軍装も完全な凜々しい歩兵部隊の入港を期待していた私たちは、衝撃をうけた。駆逐艦から、最初に私たちの大発へ下船してきた海軍士官は、輸送船二隻が敵潜水艦の集中攻撃をうけ、近海で轟沈されたことを告げた。歩兵部隊の大部分は、兵器・弾薬・貨物とともに、セレベス島影を目にとめる位置で、海の藻屑と化していたのである。

海中に投げだされて、浮きつ沈みつしていたわずかな兵員が、駆逐艦の救命ボートに拾いあげられ、万死に一生を得て、メナド港にはいった。輸送船轟沈前後のくわしい状況は、埠頭棧橋へ引き

揚げたのちも、説明されなかつた。田中少佐は、悲痛なにかりきつた表情で、「作業停止！ 解散」をあっさり告げた。敵機影はなく、海面も、埠頭周辺も嘘のように安穩で、かがやくばかりに鮮烈で美しかった。「決死揚塔作業」は、一陣の突風のように解散した。

轟沈した二隻の大型輸送船は、めきしこ丸と、はあふる丸ということである。

「赤道標」越ゆ

夜行軍

セレベス島北端への敵爆撃は、日ごとに熾烈を加えた。

敵はハルマヘラ北東部の海中にある小島、モロタイ島へ上陸占領し、航空基地の要衝として整備を完了したばかりだった。ここに基地を置くことは、北の比島、西のセレベス、ボルネオ、南のハルマヘラ、セラム、チモールを制圧するに格好の地点であり、まず、片道飛行距離一時間の北東セレベスを狙い撃ちにしたのだろうと思う。メナドの死守に派遣された歩兵部隊が、入港前に轟沈されたことでもあり、第二方面軍は作戦を変更したらしい。昭和十九年の九月下旬、隷下部隊に北東部の撤退を命じ、司令部も南部セレベスへ移動することになった。メナド方面を見捨てざるをえなくなつたのだ。

私たちは急遽爆撃をのがれ、軍司令部とともに移動することになったが、直前に、思わぬ悲報をうけた。司令部の特命を帯びて、メナド沖合北方二百キロのサンギー諸島へ、機帆船で連絡に行つ

ていた機動隊第一小隊が、全員戦死したという悲報である。小隊長八田少尉（京都出身、京大卒）は、連絡を断たれて孤立したサンギー諸島の友軍へ、食糧運搬の命をうけ、小隊中二十数名の優秀な部下を選抜、勇んで出港したばかりであった。任務果たしえず、敵魚雷に捕捉され、南海の露と消え去った。あまりにあっけない最期に、私たちは声をのんだ。

どんなにくやしかったろうと思う。八田少尉は関根部隊の幹候出身では先任者で、温厚な部下思いの将校だった。私たち若い新品少尉にも思いやりが深く、兄のような存在だった。虫が知らせたのか、出発前、夫人と女の子二人の写真をとらせて、独身者の私たちにみせ、しみじみと語った。命令によっては、八田少尉でなく、私が行ったかもしれない。ちょっとした差で、死と生が別れてしまう戦争の不条理を、八田少尉が得がたい人物であっただけに、このときほど痛烈に知らされたことはない。運命にはちがいないが、私は司令部の無謀な命令に、憤りさえおぼえた。近海の航行は、ほとんど不可能な状況にもかかわらず、この命令は「死んで来い」というようなものであるからだ。そして八田は哀れ死ぬべくして死んだ。いや、二十数名の優秀な兵が、任務を遂行することなく、魚雷の餌食にされたのであった。

悲憤の涙のかわくいとまもなく、追われるような命令で、私たちは爆撃中のメナドを撤収した。もちろん、船で南下することはできないのであった。危険海域を避けるため、陸路二百キロ西方のイヌポンドまで行軍し、そこで乗船、目的地点に向かう。イヌポンドまでの陸路といえども、敵機の追い撃ちにさらされる。私たちは小隊毎に分散し、夜陰に乗じて隠密行進をとることになった。

逃亡兵の悲しみに似た苦難の行程が、いつまでもつづいた。トラックはなかった。完全軍装で小銃を肩に、あえぎあえぎ山から山、ジャングルからジャングル、谷を越え、部落から部落へ歩いて

行くのであった。小隊は、輜重車として、ロダ四台を備って配属した。重い米袋など糧食を積んだ。ロダとは現地人の農耕用または貨物運搬用に使う牛車のことである。

ロダは鉄の両輪の上に荷台を据え、木製の四角な荷箱をはめこんであった。馭者はロダの持主の男で、荷台の前の馭者席にすわり、牛の尻を鞭でたたき、叱咤しながら進むのである。牛は背にコブつきの頑丈そうな奴で、わん曲した大きな二本の角を生やしているが、鈍感なのか、スピードは出ない。凹凸あり、泥濘あり、石ころ道などの悪路を、鉄輪でガタゴトひっばって行くのだが、人間の歩行より遙かにおそい。私たちは、むしろロダの速度に合わせて、のろのろ歩き、坂道などは荷車を押しあげてやらねばならなかった。

それでも、一日二十キロや三十キロは歩いた。夜は歩きずめで、朝になると人の住む部落をさがして宿営した。民家は防曇、防湿上、二メートルほど高く床を揚げており、三方は手すりのついた風とおしのよいベランダになっている。そのベランダが私たちの昼間の揺籃であった。一つのベランダは十人ほどの一個分隊が昼寝の夢をむさぼる広さだった。夜となれば、またぞろ起きだし、ロダを叱咤しつつ、行軍をはじめるのであった。

三日目の宿営中に双胴P38の大編隊が頭上を通過して行くのをみた。出発時、爆撃の轟音をきき、行く手に火焰の燃えあがるのをみとめた。近くの村はほとんど人影をみなかった。風雲急を知って、いちはやく避難したものと思われる。ロダはおびえ、前へ進もうとしなかった。そのうちに、スキをみて、逃げられてしまった。やっと人影のある部落をみつけ、手まね足まねで部落の長老らしい男を説得し、ロダ四台を馭者ともども徴発することができた。言葉の通じないいらだちもあったが、

セレベス島 ミナハサへの道

片山 清 著

戦局も大分不利になってききた終戦の一年前、このセレベス海で輸送船「めき志こ丸」が敵潜水艦から一発の魚雷を受け沈没—無事救出されるまでを綴った片山氏の手記です。

めき志こ丸	5, 785トン
総員	4, 151名
犠牲者	847名

現場は明日はメナードに着くという、ここから極近いセレベス海です。

青木次郎氏が編集された375大隊戦友会発行の「追憶」—漂流36時間の記録—より収録させて頂きました。

こうして、次々と補給路を断たされ物資のなくなっていく中で飢えと戦って行った当時の兵隊さんたちの行動を批判するのは容易いことでしょう。

現地の多くの方や戦記から推測されますことは、やはりこの地でも食糧と物資がなくなってから評価は悪くなってきたように思います。

このめき志こ丸に詰まれていた物資が無事であったら、とも思ったりです。

【川口 博康】

セレベス島ミナハサへの道

片山 清

僚船ふあぶる丸航行不能

昭和一九年八月八日輸送船めき志こ丸に乗船以来マニラ湾内に一週間待機した我が船団は、愈々八月十五日午前五時五〇分マニラ港を出発したのである。

船団は我がめき志こ丸（五、七八五屯）はあぶる丸（五、六八二屯）国山丸（二、八七一屯）八仁丸（一、九一八屯）おりんびあ丸（五、六一八屯）美崎丸（四、〇〇〇屯）鎮西丸（一、九九九屯）図洋丸（五四四屯）岩城丸（八三九屯）計九隻に護衛艦は、第二八号掃海艇と、第四六号駆潜艇の僅か二隻である。

我々は僅かな二隻の護衛艦に守られて愈々セレベス島ミナハサ半島の北東端に位置するビート

ン（Bitung）港に向かつて再び長駆危険な征旅に出ることになった。

我々は再びコレヒドール島とバタン半島間の北水道（North Channel）を通過し、愈々敵潜の待ち構えているマニラ湾口の南支那海に出たのである。

船団はジグザグコースを取り乍ら時速九ノット位での進行であろう、九隻の輸送船に二隻の護衛艦であるから広い海原でその姿を見ることは希である。

船団は静かに黙々と前進しルソン島サンチャゴ岬（Cape Santiago）とその西方二十軒に横たわるルバング島（Lubang Is）の海峡を通り、フィリッピンの多島海の中央水路を南下する。

右舷にミンドロ島（Mindoro Is）を見てシブヤン海（Sibuyan Sea）に入る、この海路はフィリッピンの瀬戸内海と云つても良い程、大々小の島々が前後左右に横たわり、熱帯の太陽に輝される島々の緑と、熱帯特有のマリンコバルトの海を眺め乍ら航行する。船上よりの眺めは実に良く、のんびりと眺めていると、戦場に來ていることを忘れ、南方へヨット旅行にでも來ている気分である。

これらの島々には、めつたに人家や聚落の姿を見ることは少い。この風景を見て私の考へたのは、ここには熱帯の植物の生長の旺盛な土地が、未開のまま、ゴロゴロと転がっているようであった。日本の瀬戸内海の島々は、生さんが為に山の頂上迄耕している。又、土地は広いかも知れぬが寒い満州へ次々と開拓団を送り込んでいるが、一年中作物は成長し、防寒服も、ストーブの燃料もいらぬ、こんな暮し良い開拓出来る土地があるのに、何故寒い満州に移民するのかと、疑問をもつたのである。これは現地を知らなかった私が、南方熱帯の地を体験しての最初の実感であった。

斯してシブヤン海に入り十五日、十六日、十七日と、この多島海を航海し八月十七日一四時四〇分にセブ島の主都セブに入港した。

この間何度か敵潜警報が発せられたが何事もなく全船無事に入港した。セブ港には巡洋艦一隻が横付けされており又、九一式水上偵察機が一機整備されていた。マニラよりセブ迄にめき志こ丸では兵一名が病没した。又、セブでは不幸船内で発病した兵七名を入院さす為下船させたのであった。

このセブは、十六世紀初めのマゼラン探検の時代より、古い聚落があった町で、相当の人家が遠望出来るが勿論上陸などは思ひもよらないことである。

この日我が星井隊の佐々木軍曹は、給与係として船の事務長と共に、上陸したことを、後日戦友会の時に知った。

八月十七日の夜は、このセブ港外に仮泊したのである。

船団は此処セブ港で編成が変り、めき志こ丸、ふあぶる丸、国山丸、八仁丸の四隻となつたが、

護衛艦はセブより第一〇五号哨戒艇一隻が更に加わつて、八月十八日夕刻一八時三〇分セブを出港した。

船団はボホル海 (Bohol Sea) に出ると次は、スル海 (Sulu sea) をミンダナオ島サンボアンガ半島に沿つて十八日夜、十九日一日と南下し、

八月二十日十三時五〇分半島尖端のサンボアンガ (Zamboanga) 港外に到着した。

サンボアンガはバシラン島 (Basilan Is) に相対しバシラン海峡となり、このバシラン海峡の海の水は真ッ黒い色をしており気味が悪かつた。

この海峡を出るとセレベス海であり、南東方に進めばミンダナオ島ダバオ方面に出て、更に島伝いにカウ (Kawo Is) サンギエ (Sangihe Is) 諸島伝ひにミナハサに達する。南西スルー列島 (Sulu) に沿つて進めばホロ島 (Joro Is) を過ぎボルネオ島 (Borneo Is) に達する要港である。

港外の輸送船より見るサンボアンガは、港の奥の方に赤や青の色とりどりの屋根が見え相当な町の様な印象を受けたが、この一塊の聚落の四圍一望はこれ又、黒味を帯びた緑のうつつそうたるジャングルである。

船団は此処で更に減つて、我がめき志こ丸とふあぶる丸の二隻となつてしまつたが、護衛艦が此処で更に又、第三一号駆潜艇一隻が追加されたことは、我々には大変な心強さを与へて呉れた。

然し乍ら船団の船数が減るのに護衛艦が増えると云うことは、それだけ危険度が増大して来ると云うことに間違いないと私は直感した。

我が船団は八月二十一日朝八時五〇分サンボアンガを出港しスルー列島沿いに南下し、同日二〇時一〇分スルー列島中央に位置するホロ島 (Joro Is) ホロ (Joro) に仮泊した。

此処は後に (十月五日) 鈴木鉄三少將の卒いる独立混成第五十五旅団 (官兵団) の駐屯した所である。(ホロ島は二〇〇四年四月九日敵上陸、官兵団六〇〇〇名は生存者約八〇〇名で正に玉砕と云える)

翌朝島を眺めると小さな飛行場もある様に見えた。

その夜はホロ港外に仮泊し、明る八月二十二日早朝五時二五分、ホロを出港する。

我が船団は四日後の八月二十五日一時頃セレベス島 (Celebes Is) 北東部ミナハサ (Minahasa) のモルツカ海 (Molucca Sea) に面したレンベ海峡 (Selembah) に位置する良港ビートン港 (Bitung) に到着の予定で出港したのである。

ビートン港は当時糧集団ミナハサ地区の兵担基地であつた。

我がめき志こ丸とふあぶる丸は四隻の護衛艦に守られて一路ビートンへと向かつた、大海と云うに、セレベス海は油を流した様に穏やかで天気は晴朗であり、我々には何んの不安も感ぜしめない様な平穏な航海であつた。

両船はこのセレベス海を南東に向け一路ビートンへと一日航行した真夜中、正確には八月二十三日午前〇時五分と云う。

北緯四度四十二分、東経一二一度四二分の海上に於て何と云うことか、僚船ふあぶる丸の中圧クランクシャフトの折損事故が発生し、ふあぶる丸は航行不能となつたのである。

兵員弾薬資材を満載した輸送船が敵潜の遊戈する大海の真つ只中に停止しているのである。

次で夜が明ければ今度は敵機の好目標となり得る存在である。正に危険極まりない。

安穩な航行もこの一事に因って破られたのである。だが私達は真夜中の就寝中のことであり全く知らなかつた。

我々が寝ている最中、めき志こ丸船員は血のにじむ様な努力を、不眠で続けてきたのであった。ふあぶる丸航行不能に陥るや、先任護衛艦より、めき志こ丸に対し、ふあぶる丸曳航を命じた。めき志こ丸は曳航準備作業を開始した、ふあぶる丸曳航のためには5・5吋の綱索五〇〇米を必要としたが、両船共その準備がないので、取敢ずふあぶる丸所有の5・5吋の綱索二二〇米を、めき志こ丸に結着し、更に補強のため、めき志こ丸所有の8吋のマニラホーサーを、ふあぶる丸に流し附けて、結着す可く暗夜の洋上何等の援助も受けず作業は困難を極めたが漸やく綱索取付けに成功したということである。

真夜中からの連続作業であり乍ら既に夜は明け二十三日の九時になつていた。

めき志こ丸はふあぶる丸を曳航す可く超微速で機関の運転を始めるや、悔しいかな綱索が古品であつた、めか一瞬にして忽ち切断されてしまつたのである。

かくして洋上九時間の苦闘も水泡に帰したのであつた。万事休して此処に永く停滞せんか、敵潜の餌食となる公算は極めて大であり、何らかの方策を考え、この場を脱出しなければならなかつた、そこでめき志こ丸はふあぶる丸を左舷に防舷材を夾み、抱合させて、両船アベックで航行する可く、先任護衛艇に報告した処、たまたま第一〇五哨戒艇艇長より、今一度哨戒艇により曳航を試みるから、めき志こ丸は抱合航行の準備をなし待機せよとの連絡を受けた。

こうして哨戒艇はめき志こ丸に比べて自重が遙かに小さいため、マニラホーサー一本で曳航することに成功したのである。

更に用心のため、マニラホーサー一本を追加増着し、二十三日正午、他の護衛艦三隻に守られ時速五ノット程度の鈍速で両船共にホロに向ひ、翌日八月二十四日午前一〇時四五分にホロに無事帰投することが出来たのは、全く不幸中の幸であつた。

マニラ出発以来我が船団の護衛艦として我らを守つて来て呉れた第二八号掃海艇、第四六号駆潜艇も燃料に限界が来たため、二十四日未明には船団を離れてサンボアング基地に燃料補給のため急行した。

我々は海空の危険水域を無事ホロ島に帰投してホットしたのである。我が軍の占領下の港に停泊することは心強い限りであつた。

僚船ふあぶる丸の故障により余儀なくホロに帰投しためき志こ丸は、二十四、五、六日とホロに停泊したのである。船の周囲には、モロ族のビンタ（小船）が近寄り、舷下の海上より上を仰いで何か大声で叫んでいるが、何を云つているのかさっぱり判らない。多くの兵隊が舷側より下をのぞいている。

言葉は判らないが土民は、ビンタにバナナや、パイヤを積んでおり、これらを差し上げているから、これを買わないかと叫んでいるらしい。

我々は果物は欲しいが、言葉が判らないから値段も判らない、仮に適当にお金を下しても、代わりの果物を幾ら位呉れるのかも判らない。

船上の買い手と海上の売り手との相互の信頼関係がないから、全く手の出し様がない。

我々は嘗てマニラのサンザザロー競馬場でタバコ買に、鉄格子の間からタバコを渡し、代金を貰わず持逃げされた苦い話もあるから皆んな慎重である。

その中、救命綱に雑糞をつけて下したが、下まで届かないので、海上のモロ族が盛んにわめいていたことが、ホロの港の風物詩として、心のなごむ陣中のひとときであつた。

こうしている中に、サンボアングに燃料補給に行つた二艇は、八月二十六日夕刻ホロ島に帰投した。

船団は直に船団会報を行い、ふあぶる丸の同行は不能につき、めき志こ丸一隻のみにて出港することに決つた。

又、揚陸地もサンボアンガ基地に於ける補給、意の如くならないので護衛艦の燃料の関係上、ビートン行を変更し、ミナハサ半島の西端のトリトリ (Tolito) に向かうことになったのである。

時は翌八月二十七日六時出港、二十九日十八時到着の予定であった。

ふあふる丸はホロ到着と同時に緊急修理をなし、出来るだけ速かに出港する予定で努力するも、ホロ島の如き南海の孤島に大きな鉄工所もある筈もなく、修理をすることも出来ず、万策つきて代船を待つ外はなかった。

待つと云つても大部隊を乗せた輸送船が、この海空の危険水域に於て永く滞船していることは更に危険である。

代船を待つこと六日、然し代船は来ず遂にふあふる丸乗船部隊は八月三十日一時ホロ島に上陸待機することに決定し、九月二日に上陸を完了したのである。

その後彼等はホルネオ島の石油産出基地、タララン島の守備要員として十二月九日転進し、昭和二十年五月一日、我に十倍する連合軍の攻撃を受け、壮絶な戦闘の結果二百名の部隊は一

千六百名を失う激戦であつた。

我々がミナハサ地区ソンデル (Kampoeng Sondel) に駐屯中の二十年四月下旬夜中に敵上陸かの非常呼集があり、完全軍装、戦闘体制をとつて待機した事があつた。

これはミナハサ北端のリクパン (Likupang) の遙か洋上を数十隻の輸送船団が灯火をつけて西方に進行しているとの情報により、スワミナハサへ連合軍上陸かとの非常呼集であつた。その数日後、敵戦闘部隊のタララン島攻撃のニュースが遠聞され、時を同じくしている。

悲運めき志こ丸の最後

ひとときのやすらぎ

昭和十九年八月二十七日早朝六時、我が輸送船めき志こ丸は唯一隻、第二八号掃海艇、第四六号駆潜艇、第一〇五号哨戒艇、第三一〇号哨戒艇、第三一〇号駆潜艇の四隻に護衛されホロを出港しトリトリに向う。

ホロを出港して間もなく第二八号掃海艇より「第一〇五哨海艇、第三一〇号駆潜艇は他の任務に就く、船団は人員をメナド (Mendo) に揚陸することに変更となり」との信号をうけたと後に聞いた。

この信号を受けると第一〇五号哨戒艇、第三一〇号駆潜艇は我々船団より離れ、進路を南に取り次第に我々視界より消えていった。

残ったのはマニラより此処迄共に来た第二八号掃海艇、第四六号駆潜艇二隻である。

突然一艇に二隻の護衛艦がいなくなると云うことは甚だ心細い次第であつた。

その後、めき志こ丸は七時一八時の間、極く近距離より敵の暗号電報を傍受し、七時三〇分頃第二八号掃海艇に手旗信号にて連絡し注意を喚起した。

十時二五分ホロ島南側水道を通過、第三警戒航行に移り、愈々セレベス海に臨んだ、一一時一五分より敵魚雷をさけるべくジグザグコースに移り時速九ノットで慎重に進行を始めた。

夜間は稲海進路を取り、敵潜の目を誤魔化して進行するという事である。

この頃のセレベス海は、晴天で海上は気味の悪い程穏かで、波一つなく鏡の様な海面であり、周囲に島影一つなく、天に鳥も見ず、三六〇度全く水天髣髴青一髪であり、海上見る限り我がめき志こ丸と護衛艦二隻のみが、地球の頂点にうごめいている感である。

空には爆音も聞こえず、我が船の機関の音のみの静かさであり、これが戦争のさ中であるかを

疑う程であった。

然し乍らこれは私たちの目に見える範囲のことであり、海底には我を狙って息を凝らして微行していた敵潜がいたのである。この敵潜こそグラグフ大尉を艦長とする米潜水艦ジャック号であった。めき志こ丸は、ホロを出発した二十七日夕一八時十分、次いで二十八日二時五分の二回、第二八号掃海艇より敵潜探知の連絡を受けていたのである。

八月二十八日には兵二名の病死があり、水葬にふす。形ばかりの弔ひにより、ハッチボードより日の丸に囲まれてセレベス海々底に沈んでゆく戦友、ポー、ポーと悲し気な汽笛を鳴らして危険水域であり乍らも海上を一周して死者を葬送したのである。我々も黙禱してその霊を慰めた。此処南溟の彼方まで来て武運拙なく病没した戦友を悼むと共に、これを知った時の彼等の両親の心中の悲しみは如何ばかりかと思うのであった。悲し気な汽笛が止むと又、海上は静穏で平和な時間と空間となる。ともあれ我々はこうした平和な時間が何時までも続いて欲しかった。

私達は第五番船倉内の居住区の暑さを避けるためブリジーデッキ上に第四番船倉のハッチがあり、この第四船倉には銃砲弾が満載されている船倉のためハッチは締められハッチシートで覆われていた。

我々分隊長はこのハッチの左舷側に直射日光を避けるため携帯天幕で日除けを作り、その下のハッチシートの上に昼夜屯して夜もそこに寝ていた。

その仲間は山内軍曹（京大卒）西尾軍曹（横浜専卒）橋本伍長（名古屋高商卒）見形伍長（小樽高商卒）木野伍長（明大卒）萩原伍長（青山学院卒）松下伍長（東京農大卒）等であり、我々より半年前の学卒乙幹の先輩で我々候補生分隊長の公私共に良き兄貴分であった。佐々木軍曹（大阪歯科専卒）は本部給与係として、本部に外向しており多忙のため、滅多に顔を見せなかった。我が星井隊の橋高少尉（京大卒）も対潜監視の当直の合間に、時々ま顔をみせることもあった。

此処は我々の船上のサロンであり、性格の異なる先輩諸士の学生時代の話、時局の展望、日本経済の問題、ETCで未熟な私達には、この様な諸先輩や同僚の意見を聞き、又、談じ論じたことは、大いに啓発啓蒙される場所があった。

こうした楽しい日々が過ぎ、翌八月二十九日、一日の航海で、夕刻にはメナドに到着上陸するのである。私は今日までの無事の航海に感謝しつつ二十八日の夜の快い眠りに入ったのであった。何時間眠ったのであろうか、突然「ドゥーン」と云う鈍い音と衝撃で目が覚めたのである。その後日知ったのであるが、この時、二時四五分であった。

目を開けてはいるが囲りは真暗で何んにも見えない。気が付くと、日除けにしていた天幕が我々の寝ている上にバサリと落ちて、全体を覆っているからであった。直ぐに天幕をはね除けて、外に出ようとすると、船の左舷の手摺りに手が触れた。

我々はハッチの中央部、即ち船の中心部を枕として、寝ていた筈であったが「ドゥーン」と云うショックで、船の中央より船の左舷手摺りの場所まで、放り出されていたのであった。

直ちに応急準備の非常警報ベルが、けたたましく鳴り初め、船中は騒然となった。私は直感的に魚雷をくらったな！とおもった。直ちに応急準備をしなければならぬ。

私は常に非常の際の事を考えて、救命胴衣の紐の端を、何時も軍袴の紐に結んで寝ていたので、暗闇の中でもこの紐を引っ張って、たぐり寄せ、直ぐに救命胴衣を着装し、退船準備のため左舷手摺に縛着してあった繩梯子を、一、二本船側外に投げ下し退船準備に備え、私は乗船時より分隊長に指示しておいたごとく、分隊長の集合を松井（糧）候補生と共に此処で待った。

注1無線電信では、敵に傍受され、当方の位置を捕捉される虞があるからである。

注2この資料は筆者と同期生吉村軍曹（慶大卒）が産経新聞記者当時一九六一年渡米した時アメリカ海軍省にて調査判明したものである。

応急準備の非常ベルがけたたましく鳴り、付近で船員の大きなわめき声で「船は直ぐは沈まないから落ち着いて！退船命令が、出る迄、落ち着いて！」と声を枯らして怒鳴っていた。

船は機関が停止したためか非常ベルも止まらなかったが、暗闇の海上で一、二番船倉の方がパッと明るく火災が起きていることが判った。船の構造より直ちには沈まないが、火災が発生していることは大変危険である。弾薬、爆薬に引火すればひとたまりもない。

退船命令は未だ出でないが早く退去しないと危険であると、私は判断し、例え退船命令が出なくても分隊員を退去させようと考えていた。分隊員にはかねがね非常の際には、私の居る四番船倉左舷に集合する様命じていたのである。松井（輝）候補生の分隊員も同様であった。

私の分隊員は平松二等兵を除いて全員集合した。平松二等兵については特に心配しなかったのは彼は漁師であり、泳ぎは堪能であることを知っていたので、何処からか海に飛込んだのだろうかと思っていた。（これについては「漂流者奇談」の項に記す）松井分隊も全員揃った。二時五六分総員退去の汽笛がヒューヒューと鳴り出した。既に後部甲板からは海に入っている様子である

が暗くて判からない。

さて下りるため舷下の様子を見て驚いた。船首方面から船の中央にかけて海上は火の海である。その火の海は雷撃を受けた一番船倉左舷の破裂口より倉内に積載してあったガソリン入りドラム缶、重油入りドラム缶が破裂流失し、それに火が付き海上に燃え広がると共に、船倉内にも引火し火災を起こし、その火力で更にドラム缶がハせて、ガソリン、重油が流失している様子である。

又、一、二、三番船倉の住居区の魚雷でフツ飛んだ残りの兵隊達であろうか、海に飛び込んだがその火炎に追われて船尾へと泳いで逃げて来ているのが見える。そこへポートデッキ左舷の二番ポートに満員の将校、兵、船員が乗って下り着水したが、火災に追われた海上の兵隊達は我れ先にとこのポートにしがみ付き又、オールにしがみ付いたため進発出来ない、それに加わるに、ポートを釣っている前方のハンガーフックは外れたが、後方のハンガーフックが外されぬためポートは後方一ヶ所が釣るされたまま左舷船側に対して直角になった。そうしたところへ火炎は海上に広がり船尾に流れて来たので、丁度このポートにより船尾に流れる油が閉止められた格好になってしまった。そのため一、二、三番船倉付近より飛び込んだ兵員は、この海上の火炎に責められポートによじ登ろうとする。ポートに乗っている者は、早くポートを出さないとポートが燃えるのを恐れて乗せまいとする。その中、燃え盛る業火は遂にポートまで到着した。

ポートの付近に蟻集していた兵員は、火炎に包まれ熱いから海に潜るが息が続かない、浮かび上がれば顔中火に焼かれ、何十人の兵員が、海上の火炎の中でもだえ苦しんで断末魔の声をあげて、哀れにも沈んで行くのである。正に焦熱地獄の阿鼻叫喚とはこのことであろう、生きてこの世に地獄を見ようとは……。

ポートも燃え始めたため、乗組の将校、兵隊、船員は反対側の船尾の方向の海中に飛込んで逃げはじめた。

この様子をブリジーデッキ上より見ていたのは大変永い時と感じたが恐らく五分か六分位の間のことであろう。

コルクの丸ブイ

我々も早く退船しなければ、このポートが燃え、重油が後方に流れて来れば、今度は我々が焦熱地獄の中に飛び込むことになる。ポートは総員退船命令が出ると同時に、降ろされたものであろう、四番ポートの姿は既に闇の中に消えていた。

私は松井候補生の分隊より順次下し、船より約五十米位離れて声をかけ合せて集合する様、指示し、全員を下していった。

救命胴衣を着けていると思つていた中隊最年少の十七才の志願兵吉井二等兵が、救命胴衣も付けずにオロオロして残っている。

「分隊長殿自分は泳げないであります」

「救命胴衣はどうした」

「捜したんですが有りませんでした」

と云う。

「泳げん奴が何もなかったら死んでしまふではないか！何か浮くものはないんか！」

と云い乍ら附近を見ると乾パンの空缶（約〇・六―七立方米）があつたので

「これを放り込んでやるから取敢ずこれにつかまっておれ！」

と云い乍らビヨイとボートデッキの手摺を見上げると、本船常備の丸いコルクの救命パイが懸けてあるではないか。

▲私はこれは天の助けだ、これがあれば大丈夫だ！▼と

「吉井！あの丸いパイを直ぐ取ってこい」

と命じた。ところが私の後ろにいた他部隊の一等兵が、これを聞いて直ぐさま吉井より一瞬早くこの丸パイを取り、これを胴に通して両手でパイを下げて私の前の繩梯子より下りようとするのである。吉井二等兵は唯々呆然としているのみである。全く世話の焼ける子供の様な兵隊である。

私は情けないやら、腹が立つやらで、この一等兵が急に憎くなった、とたんにこの一等兵の襟首を掴んで後ろへ引戻し

「貴様これは何んだ、救命胴衣迄つけているではないか、この兵は救命胴衣もなく、よう泳げんのでパイを取りにやったのに、貴様救命胴衣までではないか、一人でも多く助からにやあらん時だ、このパイをこいつにやれえ！」

と殴らん許りの権幕で怒鳴りつけた。私は吉井二等兵を生かすも殺すもこのパイ以外にはないと、その声は恐らく殺気がみなぎっていたであろう。

この古兵はパイを横取りした自戒の念もあつたのであろう、洪々この船用丸パイを外して救命胴衣のまま繩梯子を下りて行った。

私はこの丸パイに吉井の頭を入れ、肩よりタスキがけにさせ、私が先に繩梯子を下り、海に入り、下で吉井が下りて来るのを待った。下りて来た吉井二等兵を海に入れ、丸パイを両腕で抱かせたが、何しろ一切泳げないので丸パイからスッポ抜ければ海中に沈んでしまうので、私の救命綱で吉井の体をパイに縛りつけた。ところが今度は丸パイが船側に吸い付いて離れないので、足をバタバタさせて船から離れる、と云うも泳げない者は何も出来ないのである。

こんな所でぐずぐずしておれば二人とも危なくなると考えたので、吉井を結んだ救命綱をほどき、一方を丸パイに結び付け、片方を私の腰に結び、私は救命胴衣を付けては邪魔で泳げないの

で、救命胴衣を解いて、救命胴衣の紐で吉井の体を丸パイに縛り付け、私は何もつけずにエッサエッサと平泳ぎで丸パイを漕ぎ出したが、重くて仲々進まないの、吉井に俺が泳いで漕ぐから、前進を助けるために、足をバタバタして協力せよ！と云ったが彼はパイにしがみ付いて体を硬直させているので、体が浮かないのだからどうにもならない。

私がいくら瀬戸内海の島育ちで、名たる海賊の末裔とは云え、これには参った。

漸くめき志こ丸より、暗い海上を五〇米位離れたであろう、振り返って見ると、火災は船橋甲板を焼き、我々が居たを四番船倉までも燃え移っており、船倉内の小銃弾に引火して弾がハせているのか我々の泳いでいる海面にプッシュ、プッシュと音を立てて海面を叩く不気味な音が聞こえる。

暗闇で明確ではないが、それとしか考えられない。これは危ない！未だ遠くへ逃げないと危ないぞ！と云ひ乍ら又、吉井二等兵の丸ブイを漕いで百米位船より離れたら、さっきのブッシュ、ブッシュと云う音は聞こえなくなった。私も吉井二等兵と云う重い荷物を、一人で引つ張って泳いだので、多少くたびれた。

此処迄来れば大丈夫、めきし丸が例え沈没しても、その大渦には巻き込まれることはないだろうと、私も一服する為、吉井二等兵をブイに縛り付けていた私の救命胴衣の紐を解いてそれを付け、再び救命綱の一端で吉井をブイに縛り付けて、別の一端を腰に結び付けた。

これは私が海上を漂流し餓死しても、このブイはコルク製であるから絶対に沈まないから私の遺骸だけは残ると考えたからである。

お互いに暗闇の海上のことであり、お互いの顔も位置も判らない、先に、退船避難した分隊員各人の名前を呼び合っている中に幸運にも小尻、小川兩二等兵と松井（輝）候補生、その分隊員の藤原上等兵、片岡一等兵にめぐり会った。

この船用のコルクの丸ブイは我々グループのため大いに役立った。

このブイはコルク製で浮力が強く、吉井の他に一人位ブイにしがみ付いても、沈むことはないから、疲れると皆んな交代で、丸ブイに体を預けて休息をした。

又、皆んな救命綱をこの丸ブイに結び付け、その一端を各自の腰に結び付け、丸ブイを中心に菊花型に浮かんで蟻除けの集団を造って漂流していた。

この頃皆も漸く落ち着きを取り戻して来たので、私は皆に海没時の注意事項を暗闇の中で教えた。今更あがいても体力を消耗するだけで仕方がないことだ、魚雷でやられたときは、掃海艇や駆潜艇は敵潜を追って爆雷を投下するから、必ず片手で肛門を押さえておれ、又片手で握り拳玉をしておくことを教えた。

水の中では体温を取られるから握り拳玉をしておれば拳玉は冷えにくい。男は拳玉をさえ冷やさねば体力は余り弱らぬものである、これは雪に埋もれることもある雪国の獵師が狐腋で作った下穿で拳玉を包むという故智であることを皆に教えてやったのである。

註 狐腋は狐の腋毛の部分で、最もあたたかくてやわらかい毛である。

海中の鎮魂歌

その後、大きな爆発音で、振り返ると、めき志丸の火災は船尾楼に及び、船尾楼に常備してあった対潜用爆雷四発に引火爆発し、暫く炎上していたが、遂に八月二十九日四時四五分炎上しつづつセレス海海底へと吸い込まれていった。

八月二十九日二時四五分一番船倉左舷に魚雷を受けて、ちょうど二時間の余命であった。

めき志丸の最後により、業火の光を失った海上は真の暗闇となり、遭難漂流の將兵達のざわめきも一瞬シーンと静寂に帰り、突如！海上の何処かで悲痛な万歳の声が聞こえて来た、同時に暗闇の各所より、これに唱和し、めき志丸の健闘を称えたのである。

それが終わるか終わらぬ中に、我々グループよりそれ程遠くない暗夜の海上に、青光りする大きな閃光がバツと上り「ドン」と云う爆発音が聞こえたと同時に、我々の腹の底に浸み渉る様な海水の震動の重圧が、ズズズ、ズシンと波動してきたのである。

私も初めての経験ではあるが、海没時の教訓通り肛門を押さえていなければ、若しこれが近距

離の衝撃水圧であれば肛門が抜けて内蔵破裂をするであろう。

哀れなる哉、我々をマニラ出港以来護衛して呉れた第二八号掃海艇も亦、敵潜の魚雷三本を受け閃光一瞬にして爆沈し、セレス海の漢層と消え去ったのであった。

時正に、めき志こ丸の沈没六分後の四時五十分のことであった。時に静かな暗闇の海上の彼方より低くかすかに「海行かば水ずく屍……」と「国の鎮」の歌声が流れて来た。

我々はこの歌声を耳にして、そうだ唱ってやらなければと、大声で続けた「山行ば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ、かえりみはせじ」と唱和合唱した。

漂流者の気持ちは皆な同じであったのであろう。暗闇で判らぬが、各所のグループより流れる唱和する歌声で闇の海上は大合唱となたのである。その後、次から次と軍歌がはじまった、これは士気を鼓舞すると共に眠気醒しにも役立った。

我々は熟睡時の三時前に目を覚され、以後海中での徹夜の漂流である。海中で寝てしまえば、あの世まで眠ってしまうであらう。

鬼心仏心

我々は互いに励まし合って漂流している中に八月二十九日東の空が白んで来た。遙か遙か水平線上に大きな黒い鳥影が見え初めたのである。

私は松井（輝）候補生に、「向ひに鳥影が見える、例え何十キロメートルあろうと、此処で漂流死するのだつたら、夜が明けて鳥を確認したら、一緒に泳いで行こう」と相談していた。

やがて真赤な太陽が昇って明るくなるに従って、遙か彼方に見えていた鳥影は次第に消えて行く、良く見るとなんとそれは水平線上に浮かんでいた雲であつた。

こんどは、私は四方三百六十度をジッと見廻したが、鳥影一つなく全く水平線のみであり、私はやっぱり地球の頂点に浮かんでいるのだつた。

やがて日が昇り、灼熱の熱帯の太陽が、哀れな我々漂流者の頭上を、ガンガン照らしはじめたのである。

私は皆んなに、このまま続けば皆んな日射病になってしまう、帽子のある者は帽子を濡らしかぶり、帽子のない者はタオルを濡らして頭にのせる、タオルのないものは、時々潮水を頭にか

けて頭を冷やせ、頭を冷やさないと脳味噌が溶けてしまうぞーと威かして頭に潮水をかけさせた。その中、天日製塩と同様で、皆のイガグリ頭に白い塩が吹き出していた。

我々は丸ブイを中心に救命綱を結び付け、救命胴衣丈けで浮いていた。今何時かも判らない、時計を見ても時計は、海水に漬かって三時十七分で止まっている。次第に腹がへって来るが海上食べられそうなものはない。

私は松井候補生に何気なく

「松井、腹へったな！」

と云うと、松井候補生が

「わし、雑糞ぞうふんに牛缶一つ持っているんやけど一つではしやないな」

松井は大阪育ちで言葉の端々に大坂弁が交るのである。

そこで私は松井候補生に

「皆んな昨日の夕食以来食わず食わずなんじゃけん、一つ位の牛缶をお前一人食べた処で、お前一人生き残れる様な状態ではないわ、最早生死は一緒じゃけん、例え一切れが何処か知れんが、皆んなで分けて食べようや」と提案した。

松井は黙って小さな牛缶を開け、先ず一切を自分の口に入れると、松井は黙って缶詰を私に差出した、私も一切口に入れて、次は藤原上等兵に差出した、斯して小さな牛缶は次々と七人の我がグループを廻って空になった。

例へ一切の肉片ではあるが、我々には戦友の温さで満腹を味わったのである。すると藤原上等兵が遠慮勝ちに、

「自分の水筒には少し水が残っておりますが、飲みますか」

と云う、皆んな喉はカラカラであり、幸い牛缶を食べたので尚更である。

私は藤原上等兵より水筒を受け取って、どの位入っているか振って見ると三分の一位残っているので、一人一、二勺（酒盃ぶち一、二杯位）は飲めそうであった。

私は藤原上等兵に

「これは、あんたが持って来たじゃけん、あんたが先に飲んだらええがの、その後で皆んな一口ずつ飲ませてもらうけん、先に飲みなさい」

としようとした、藤原上等兵は中隊最古の古年次兵（明治三十九年生）であり、至極おとなしい性格である。自分の水筒の水を遠慮勝ちに飲み、次で分隊長である松井候補生に渡した、松井より私に、私の分隊長にと順次一口ずつ回し飲みをしたが、飲みおわって最後に藤原上等兵の手元に帰って来た時は未だ多少残っていた。私にはみんなの気使いが大変嬉しかった。この様な戦友の温い善意は、斯る現況下に於いては正に地獄に仏の様なものである。

私は周囲の海上を見渡すと、大集団あり、小集団あり、所々に思い思いにグループをつくって浮漂している、単独漂流者も明るくなったので、蟻除けのためにも近くの集団へと泳いでいる。海上所々に、赤い漂流物が穏やかな海上に無数浮遊している。何んだらうと、良く見ると、前述した海上を燃やした業火で焼死した死体が、更に焼けただれて頭文けではなく、背中全部が焼かれて、体を水中に伏せて浮遊しており、その真赤に焼けただれた後頭部、背中が、海上に浮いているのであった。その無惨さは言語に絶するものである。

又、「助けてくれー、助けてくれー」と消え入る様な声が聞こえるので、その声のする方を目をこらしてみると、二百米位先に運よく一人救命筏に乗りその上に座っている人物が見える。顔は重油で黒く汚れているが、その顔は火傷し目は見えならしい、上半身も火傷している様子であり、両手を前に差し出しているが、その手先から何かぶら下がっているのが見える、丁度女の絹の靴下の様なものがぶら下がっているのである。なんだろうと良く見ると、焼けた両腕の皮膚がズリむけて、逆さに垂れ下がって指の爪の処でぶら下がっているのであった。

上半身やけただれている上、熱帯の熱い太陽に照らされ、その上穏やかとは言え海上の潮風に当たるのであるから、たまったものではない、正に地獄の責苦である。

又、この様な生死の中に立つと人間の本性が良く出るものであろう。

名も知らぬ兵が幸運にも救命筏に乗っているのを近くに漂流していた某将校が見付け、その筏に泳いで行って、

「お前は下りろ、下りないか……」

と怒鳴りながら無理矢理に筏を占拠しようとして、筏が傾いて二人共海中に落ちる見苦しい光景を見せられた。

二人も乗れそうもない小さな救命筏であり救命胴衣を着けた将校さんは我々の丸ブイの様に筏に手を懸けている丈で充分である筈である。

又、一隻のボートが漂流将兵の外周を浮遊していた、これを見付けた近くの漂流兵が生命の希望を求めて四方よりこのボートを目掛けて泳いで行き四方より、ボートにしがみついて各所よりボートの防舷材をつけたロープに救命網を結び付け、又、ロープに手をかけていた。

ボート上のある将校はボート上より軍刀を抜いて救命網を切放し、ボートに近づいて、ボートに手をかけようとする兵達を怒鳴りながら軍刀を振り上げ、手をかけたらブツ切ると言わん許りの権幕の姿が見えられた。

これが生死を共にする人間の姿であろうか、悲しいことである。

太陽が高く昇った八時頃であったか、九時頃であったか時間はわからないが、東方より爆音がきこえてきた。果して敵機であろうか、友軍機であろうか、敵機であれば漸く助かって漂流している我々に機銃掃射の雨を降らすであろう、南無友軍機であります様にと心で祈っていた。

小さな黒点は次第に我々に近づいて来て、我々漂流者の上空に達した時、灰色の機体に日の丸をつけた我が海軍の水上偵察機であった。暫らく漂流部隊の上空を旋廻し状況を偵察していた。勿論我々は嬉しさに声を上げて手を振ったが、偵察機は忽ち飛来して来た方に飛びさっていった。

然しこれにより、我々は絶対に助かることが出来ると確信した、何か力が湧き出て来た。

第四六号駆潜艇は第二八号掃海艇が撃沈されると同時に、敵潜を追跡していったが、払暁に及んでは、漂流群の周辺を警戒していた。十三時頃より漸時漂流者の救助を初めた。

第四六号駆潜艇は徐行しながら集団の外周より一人、二人と散在している漂流者を長い竹竿の様なものを通して引き上げて引き上げ乍ら徐行して、私達の丸ブイのグループ前方五十米位へと徐行して来た。

勿論これは私達を助けに来た訳でわなく、別な集団の救助に徐行し移動しつつあったのである。私達は丸ブイに救命綱を結び付けているので一應は安心ではあるが、救助の艦艇が直ぐ至近距離に徐行しているのである、海上には多くの漂流者があり、このチャンス逃したら次は、何時近づくか判らないと皆が判断した。

私は皆に

「早く助かりたかったら、あの駆潜艇に今泳いで追い付いて、艦のタラップより上れば助かるが、一緒に泳いでいく者はないか？」

と云ったが泳ぎに自信がないのか誰も答えない。私は、

「俺は試しに泳いで追い駆けて見る、失敗したら又、帰って来る、救命胴衣は泳ぐのに邪魔だから置いて行くから、若し成功したら誰か使ってくれ」

と云って駆潜艇の進行方向を見定めて、駆潜艇の徐行速度と私の距離を考へて、艦首の約百米位前方に向かつて、クロウルストローク(Crawl Stroke)でまっしぐらに泳いで行ったが、いくら徐行しているとは云え、人間の泳ぐ速度よりは速かった。

私の目算とは一致しなかったが、辛うじて僅かな差で、駆潜艇の艦尾にタッチしたのである。

私はタッチした瞬間舷側にあるステプロオドを、片手で握り締めて、一息入れた。駆潜艇は勿論私にはかまわず徐行して行く、私はステップをよじ登って後尾甲板に上った。これで私は助かっ

た。然し残して来た丸ブイのグループは、何時救助されるであろうかと、心が引かれた。

艦尾には既に三人の兵が救助され物陰にうずくまっていた。その兵の一人を、水兵の一人が怒鳴ながらビンタを取ったり、蹴とばしたりしているので、良く見ると、これは我が星井隊の内田隆夫二等兵ではないか、そこで、私はこの水兵に

「おいおい無茶するなよ」

と云って嗜めた処、この水兵は

「班長殿、この兵隊はこの儘放っておいたら死んでしまいますよ、眠むって失ったらお終いですよ」

と云ってホンの僅か数十秒、水兵が叩く手を休めた瞬間、内田二等兵は、目を閉じたままニコニコと恍惚たる笑顔を見せて後ろに倒れて行くのである。

水兵は又、内田の胸ぐらを掴んで引起こして又、怒鳴ってビンタを始めた。

私は

「何んとか助けてやって呉れ」

と頼んで、他の水兵の指示に従って艦首の砲塔の方へ移動した。
私は瀬戸内海の島育ちであり、昔より船に乗ったら、船人に従え、陸の者は口を出さな、と云う不文律があったからである。

私はメナド上陸後、この内田二等兵の死を知った。

私が砲塔の側に行くに既に十数人が詰めて座っていた。その中には星井隊の私達の先輩山内軍曹や橋本伍長、見形伍長等も交じっていたので私は大変心強く感じたのである。

その中にもこの一隻の駆潜艇は、次々と漂流者を船側より下している繩梯子や水竿等で、救助に懸命であり、海没後未だ一五、六時間であるのに既に体力を失ったか、自らの力で僅か二米足らずの繩梯子をよう上がれない兵も多くいた。水兵は繩を投げ下し、海上の兵の体に繩を結びつけさせ、二、三人で引き上げているのである。

その中、水兵が握り飯を沢山作って一人一個と梅干を一個配給して呉れた。何分にも二十八日の夕食より、二十九日の一七時頃迄の絶食である、この握り飯の旨かったこと、旨かったこと、梅干しをのせた掌を何度もなめて味わったことは忘れられないおいしさであった。

私は握り飯を食べ乍らも目の中がゴロゴロして、痛くて充分に目が見開けない。良く考えて見ると、駆潜艇に泳ぎ着く迄、クロールで泳いだため顔を海につけたので海上に流れていた重油が目に入ったのであろう。もち論顔は重油で黒く汚れていたらしい。

余り目が痛むので、握り飯の後に配給のあった僅かな水を、襟袵の裾の端に浸して、目を洗ったがそれが悪かったのか、増々目が痛み、明るい太陽光線に目が開けられない状態となってしまう。

周囲を全く見ることも出来ず、耳だけが頼りであり、日没が近づくにつれて、近く、遠くより「助けて呉れー」と云う叫び声が聞こえて来ていた。

海上に漂流している兵員は僅か一隻の小さな駆潜艇であり、皆んなを收容する丈の能力のないことも判っているから、取り残され、日没になって来れば増々心細くなることは当然である。

その中我々とホロより別れてトリトリに向った、第三一号駆潜艇がもうすぐ現場に到着する予定だと云う噂が伝えられた。

これは一七時頃この第四六号駆潜艇に海上漂流中より乗艇した、めきし丸船長より、第三一号駆潜艇と第一〇五号哨戒艇は、一九時頃迄現場到着の予定との連絡が入ったということが、我々の耳に伝わったのであろう。

然し乍ら第三一号駆潜艇は、約一時間余遅れ二〇時二〇分頃現場に到着し、暗夜の海上を懸命に救助に当たったが、收容人員の限度に達し、二三時三〇分救助活動を打ち切って、ひとまず三〇日の天明を待つことになった。

八月三〇日の朝を迎えるも第一〇五号哨戒艇は、未だ現場に到着しない。

海上には不安な一夜を海中に浮遊していた漂流将兵は、未だ千数百名もあった様である。

漸く九時過ぎ第一〇五号哨戒艇が現場に到着、直ちに救助活動を初め、一五時過ぎ迄に、千六百余名を救助收容したのである。

私も二十九日一夜明け、目の痛みも直り、漸く海上を眺めることが出来る様になった。

海上には未だ漂流兵は多くあり、海上何軒四方にも分散している。

単独漂流の兵が悲痛な声を上げて叫んでいるのが聞こえて来る。

「助けて呉れー、救命胴衣が沈むー、助けて呉れー。」

考えて見ると我々が海に飛込んで、最早現在三十時間以上過ぎているのである。我々は救命胴衣の浮力の限界は二十四時間と聞いていたが、時間経過と共に浮力を失ひ、最後救助收容者の話では、三十六時間頃には胴衣の浮力は大幅に落ち、鼻下を海水が来る位の状態であり、顔は天を仰いでいなければ、ならない状態の場合もあった様であるが、何とか浮力は最小限保持されていたのであった。

これにより漂流者の「救命胴衣が沈む」と云う不安な悲痛な叫び声が身に浸みて判る気がした。三艦艇の救助活動により漂流生存者の皆無を最終的に確認し、八月三十日一五時二十分、三艦艇警戒航行隊形を以って北緯四度四二分、東経一二一度四二分のめき志丸海没現場よりセレベス島メナドへと向かった。

めき志丸搭乗人員、軍隊、船員含め合計四、一五一名であったが、救助された人員は

第四六号駆潜艇 九三三名

第三一号駆潜艇 七六〇名

第一〇五哨戒艇

一、六〇九名

合計三、三〇四名

であり、軍人八二五名、船員二二名の尊い犠牲者を出したのであった。

三艦艇は恙なく航行し、八月三十一日朝、七時頃メナド沖に到着した。我々は三十一日の朝まだし、東方遙かに富士に似た黒い山形を認めた、海兵はこれをメナド富士だと云う、メナドに近づくにつれて黒々としたジャングルに覆われたカラバト山(Karabato 2022M)の雄姿が目の当りに見えて来た、我々はセレベス島ミナハサに來たのだ、我々は本当に助かったのだと云う実感が腹の底より湧いて來たのである。

メナド港より船舶隊の大発舟艇が数隻我々の艦艇に横付けになり、重油にまみれた我々敗残兵を積み込み人目を避けてメナド港西方の海岸に陸上げされたのである。

我々の姿は威風堂々と隊伍を整えた上陸部隊ではなく、武器も持たない、殆どが丸腰主水の重油にまみれた黒ん坊の如き敗残兵の群であった。

ス島ミナハサへの道

生存者奇談

その一

これは私の分隊員平松二等兵の話である。

前述した、めき志丸遭難時、退船準備のベルが鳴り、私の分隊員は、私の居た四番船倉左舷に集合したが、平松二等兵一人集まっていなかった。

緊急の混乱時、彼一人を探しに行く事は不可能であり、又、彼は漁師であるから、万一海中に飛込んでも大丈夫と信じていたから一面安心ではあったが矢張り気にはなっていたのである。

そこで、メナドに上陸すると同時に退船未確認の平松二等兵を一番先に呼び叫んで捜した。

その中、わが分隊員もあちら、こちらから集って来てそれぞれ手分けして分隊員の名前を呼んで集結を始めた。

そこへヒョッコリ平松二等兵が出て來たのである。

私は大変嬉しかった、私の分隊員はこれで一人も欠ける者がなかったのである。

「助かつとったんか、やっぱり俺が思っていた通りだ」

「然しお前は何処で如何しとったんじゃ」

と質問した処、彼の言うには、

「魚雷が当る前、寝ていたんだが急に便意を催して來たので上甲板に出て、便所に入り、用便を済ませて、身じまいをしようと、立上って、軍袴(スボン)を引上げたトタン、「ダウン」と音がするかしらない中に気が付いた時はもう海の中であった」と言うことであった。

直

便所と言えば格好は良いが、簡単に言えば上の開いた七、八十程四角の木箱の底に便を海上に落す穴があいているのを舷側の手摺に縛り付けて海上に遺出^{おとだし}ている丈けのものであるから海上に放り出されるのは訳ない話である。

若し屋根でもあつたら脳天^{なんてん}を打って気絶^{きじつ}していたであろう。

「然し乍ら、よりもよつて、魚雷が当たる時にウンチに行つて放り込まれて助かるとは、余程お前はウンが附いているな。」

と皆んなで心から大笑したのである。

平松二等兵はニコニコし乍ら

「恐らくめき志こ丸の乗船者の中で自分が一番先の退船者でしょう。」

と言つてお互いに助かった喜びを分かち合った。

平松は勿論救命胴衣は付けていなかったで、丸腰で暗闇の海上を泳いでいる中に、爆発により吹っ飛んだ浮遊物に取りついて漂流したと言ふことであつた。

その二

我々をマニラ出港以来護衛して呉れた第二八号掃海艇は、めき志こ丸の沈没六分後の四時五分、閃光一発、三本の魚雷を受けて瞬時に爆沈したのである。

我々は海上を浮遊し乍らこの現実を目撃しておりこの小艇の爆沈の様子では、恐らく一人の生存者もないであろうと考へていた。

メナド海岸に上陸した漂流者の群の中に、一目で漂流した水兵と判る人物が私の近くをウロウロしていたので、私はこの若い水兵に

「あなた、撃沈された護衛艦の水兵さんか？」

と尋ねた処彼は

「そうですねありますが？」

と答えたので、私は

「良く助かったな、一体どないして助かったのかい」

と尋ねたのである。私は八月二十九日四時五十分閃光一発、木端微塵になつて轟沈した、第二八号掃海艇に生存者がいるとは誰も全く思わなかつたからであつた。

その海兵が言うには

「私は船橋のメインマストの上に取付けてある籠の中で対潜監視をしていたので、魚雷の爆発の瞬間、フッ飛ばされて、気がついた時は既に海の中に放り込まれていました、私以外に、もう一人、砲塔にいた奴で同様フッ飛ばされて助かった奴がいる筈です」

と話して呉れたが、汚れた兵隊達の群の中に混つて見当らなかつたが、後日めきしこ丸安藤船長の報告書では海兵は三名生存していたことが報告されている。

小さな掃海艇で、しかも三発の魚雷を同時に喰つて、一瞬にして爆沈した小艇に無傷^{むきよう}で三名の海兵が生き残つていたと言ふことは、よくよく生き運の強い男であつたのであろう。

その三

八月二十九日の朝、太陽が高くあがり、海上は穏やかであり、単独漂流者は所々の大きな集団に寄ろうと泳いで来るのである。

その中、我々の浮遊しているすぐ近くに、少年の様に年の若い男が板切れにつかまつてゆつくり足で水を蹴り乍ら近づいて来た。

白い半袖シャツを着ているから兵隊でもない、水兵でもない、勿論救命胴衣も付けていないのである。陸兵でも海兵でもなければ、船員以外にはない、それにしても余りにも若過ぎるし、船員であれば救命胴衣はある筈であるが、これも着装していないので不思議に思ったので、浮遊しているつれづれに彼に尋ねた。

「あんた船の人か！」

「そうじゃ」

子供の様なくせに、その返事の言葉使いがあまり良くないので

「お前歳何んぼや？」

「年は十六じゃ」

「そんな若い年で良く船に雇って呉れたな」

「船員が足らるので学校（戦前の高等小学校）卒業して直ぐ乗ったんじゃ」

「船員じゃのに救命胴衣もつけとらんが、お前、飛込む前に何処へおったんじゃ」

「俺な、魚雷が当る前、非番で船首の船員室（船首楼の下）で寝ていたんじゃが、爆発で目が覚めて、外へ飛出そうとしたんじゃが、爆発で鉄扉が狂ったのか動きも、開きもしない。丸窓より外を見ると火の海であり、出ることも出来ず、このままでは蒸し焼きになると色々考えたが、出られる處と言えば、船首舷側に僅か二、三個ある丸窓しかない、そこで丸窓を開けて、窓に脚から出して、尻をくねり廻して漸く丸窓をくぐり抜け、そのまま海の中へドボンと落ち込んだが、救命胴衣がないので、あてなく泳いでいたら、丁度幸にこの板切れが流れていたの助かったあ」

私は例えこの少年が小さいとは言え、船窓の丸窓として三〇種に足り足らずの寸法であろう。そこで私は彼に

「あの小さい丸窓から、よく抜け出されたな」と言うと、彼は

「私でも苦労したが、俺が小さかったから出られて助かったんだ、俺が大きかったら、助かっていないじゃろう、窓から出られん船員が二三人いたんじゃがどなんしたろうかな」と心配していた。

彼が言う様に丸窓の直径で体が抜け出なければ助からないことは当然乍ら、彼が子供に近い十六歳の小柄の少年であったからこの危機に生き残ったのであるが、船の丸窓から、くぐり出て助かった者は恐らく彼一人であったであろう。

混乱時であったので、話を聞いた丈けで、彼の名前は聞き忘れた。

めき志こ丸遭難に於て皆んな色々な体験をされたと思うが、九死に一生を得た奇跡的な話をここに記録しておくものである。

メナド上陸

我々は本来ならば、メナド港埠頭棧橋に横付けされた「めき志こ丸」より威風堂々と完全軍装の将兵が隊伍整然として埠頭を圧する筈であり、我々の遠聞では上陸後五年間は大丈夫と言われ六軍需物資、弾薬も揚塔されたであろう。

然し乍ら天は我等に武運を与えず、我々に生死がに関わる大きな試練を与え賜うたのである。第二方面軍のメナド埠頭の揚塔作業戦闘指揮所は、皇軍の威信をおもんばかってか、我々重油にま

みれた敗残將兵を人目を避けて、メナド港西方、椰子林に覆われた海岸線の砂浜に陸上げされたのである。お世辞にも皇軍の上陸と記される筈ではないが私の陸軍戦時名簿には八月三十一日セレベス島メナド上陸と記録されている。

我々はいずれの地にあがるうとも、私たちは陸地に足をつけたのだ。私は何度も両足を高く上げて、砂浜の中に足を踏込んで、その感触を味あつたのである。

続々と陸上げされて来る将兵の群は、将校、下士官、兵を問わず、我が戦友の名を呼び、我が部下の名を呼び、分隊長は分隊員を、小隊長は小隊編成分隊の掌握に右往左往の状況であった。私も直ちに分隊員を呼び集め又、手分けして捜し出して誘導し点呼を取った。

一人の欠員もなく分隊員は揃った。一番嬉しかったのは、退船時の集合の時欠員であった平松二等兵が油に汚れた顔をニコニコさせながら群の中からヒョッコリ出て来た事であった。

私は分隊員に、我が小隊、中隊と連絡が取れる迄、この場所を動かず固っておれと、指示し、丁度私達が集まっている場所に椰子林の中より小川が流れ出て砂浜より海に流れ込んでおり、綺麗な水が流れているのである。

私は、水は綺麗だが絶対に生水は飲んだらいけん、もう一度死ぬる積りだったらかまわんが、絶対に飲むな！、それより、今の中に裸になって衣、袴を水洗して塩を抜いて直ちに干せ、直ぐ

乾くから、禪も、体も水で洗って天日で乾かせ、救命綱がある者は綱を張って干せ、と言って私も兵も皆んな振りチンで水を浴びた。

私は顔を洗おうと思つて水面を見ると、水面に黒い顔の男が写っているので、誰かと思つて一度後を振り向いたが誰もいない、この顔は想像もしなかつた私の顔であった。

黒い重油が顔にベツトリと付いたのが二日間熱帯の天日で焼かれたのであるから、正月餅に醬油を付けて火で焼いた様なものである。

これが自分の顔かと、我れ乍ら驚く程の汚れた黒い顔に、目丈けがギョロギョロ光っている異様な面構に変つている自分の顔を、この水鏡で初めて知つたのである。

その中、我々の戦友も随時、我々の附近に寄り集まつて来た。

そうして順次星井隊の集団は合流して大きくなって来た頃、星井隊長殿も松井(幹)候補生と共に我々集団に合流し、我々小隊長も星井隊長殿に合流したのである。

私達は小川で洗つて干した衣袴が最早乾いていたので服装を整えて次の指示を待つていた時、何処から来たのか大柄な恰幅の良い、白面のロイド眼鏡をかけ、参謀肩章を付けた少佐殿が星井隊長殿の傍へ来られ、何か二言、三言話されていたがその中何処かに立去られた。

重油に汚れた敗残兵の群の中に、この金ピカでピカピカの立派な服装した参謀少佐殿を見た我々には、少佐殿を少将様かと錯覚したくらいであった。

この参謀少佐殿が第二方面軍参謀富田少佐殿であつたことを後に「セレベス戦記」で知つた。我々は点呼を取り、戦死者、行方不明者を除き、乗船時の中隊編成を以て、メナド海岸より椰子林を抜けて、メナド市郊外と思われる所にある大きな倉庫が何棟かある場所に移動した。

これは興南綿花のカボック綿倉庫とのことであつたが、終戦後は日本軍の武装解除した時の武器弾薬の集積所となり、昭和二十年九月七日の連合軍の使役として日本軍の全ミナハサ地区の弾薬集積作業中、弾薬が暴発し使役中の我々戦友は戦争が終つたこの時点で哀れにも一片の肉片となつて数人が散華した場所となつたのである。

我々は武運拙なくセレベス海で海没し、敗残の姿でセレベス島ミナハサの地を踏んだのであるが、第二方面軍は、我々を迎うるに、北セレベスに於ける絶後の大なる戦力として如何に期待し万全の受入れ体制を準備していたかを、我々の知り得る唯一の資料として、当時この揚塔作業に従事していた関根部隊の奥村少尉の手記「セレベス戦記」の一部で十分窺い知ることが出来るので、これを奥村少尉に語つて貰うことにする。

▲翌日(八月三十日)から、作業開始であつた。関根連隊長は大爆撃を予感して、例によりすかさず市中(メナド)より西方八キロの山中へ宿舎を移動した。そこから、毎朝、昼食携行で埠頭作業場へ通つた。作戦(作業)戦闘指揮所はメナド港先端にあつた。総指揮官は富田少佐参謀である。

補佐の副官は歴戦の現役将校大竹大尉。私たちの作業中隊長は、関根部隊機動中隊の野村中尉であった。私は第一棧橋作業場長、斎藤少尉が第二棧橋作業場長である。五百トン級の小型鉄鋼船がまず入港してきて、貨物の揚陸作業がはじめられた。いつもとちがって、作業はきつかった。昼夜兼行の突貫作業が指揮所から命ぜられた。ひきつづいて数日中に、敵反攻上陸にそなえての歩兵部隊が、五千トン級の輸送船二隻に分乗し、メナド港にはいつてくるというのである。それまでに揚陸の貨物を集積、運搬、整理を完了しておき、電光石火の短時間で、入港輸送船の兵器、弾薬、資材、兵員の上陸、揚塔作業を実施しなければならぬ。陣頭指揮の富田少佐は獅子吼し、目は血走り、いつとなく殺気立っていた。

北セレベスへ、約五千名の将兵と兵器、弾薬などが投入される。それは敵上陸を予知した大作戦の展開を告げるものであろう。現役の参謀が、みずから戦闘指揮所を港に設置し、作業の指揮をとるということは、異例といってもよい。第二方面軍司令部の作戦行動がメナドに集中するとすれば、いよいよ大事の出来と覚悟しなければならなかった。ついに逃れ切れず、ここが死に場所となるのか、と思い私たちは緊張した。

富田参謀は叫んだ。

「今後、絶対不可能と思われる内地から直行の大型輸送船二隻がはいつてくるのだ。二、三日うちにだ。いや、明日かもわからん。敵機の総攻撃を覚悟し、今回の揚塔作業を「決死揚塔作業」

と命名する。死んでもやりとげろ！」

後略▽

その夜敵機が来襲し、メナド港埠頭に照明弾を落し、埠頭を爆撃したが、幸い水際に落下し大きな被害はなかったと記されている。

更に奥村少尉の手記に語って貰えば

△朝(八月三十一日)の太陽がまぶしく海面に照り映えるころ、駆逐艦二隻が沖合に勇姿をあらわした。日本の軍艦旗である。そのあとに大型輸送船がつづいてるにちがいがなかった。港内、投錨の位置はわかっていた。私たちは作業員を満載した大型発動機艇に、空のボート数隻を繋留し、日の丸をうちふって埠頭を出た。大発は小気味よく、おだやかな金波銀波のうねりを切りさいて進んでゆく。

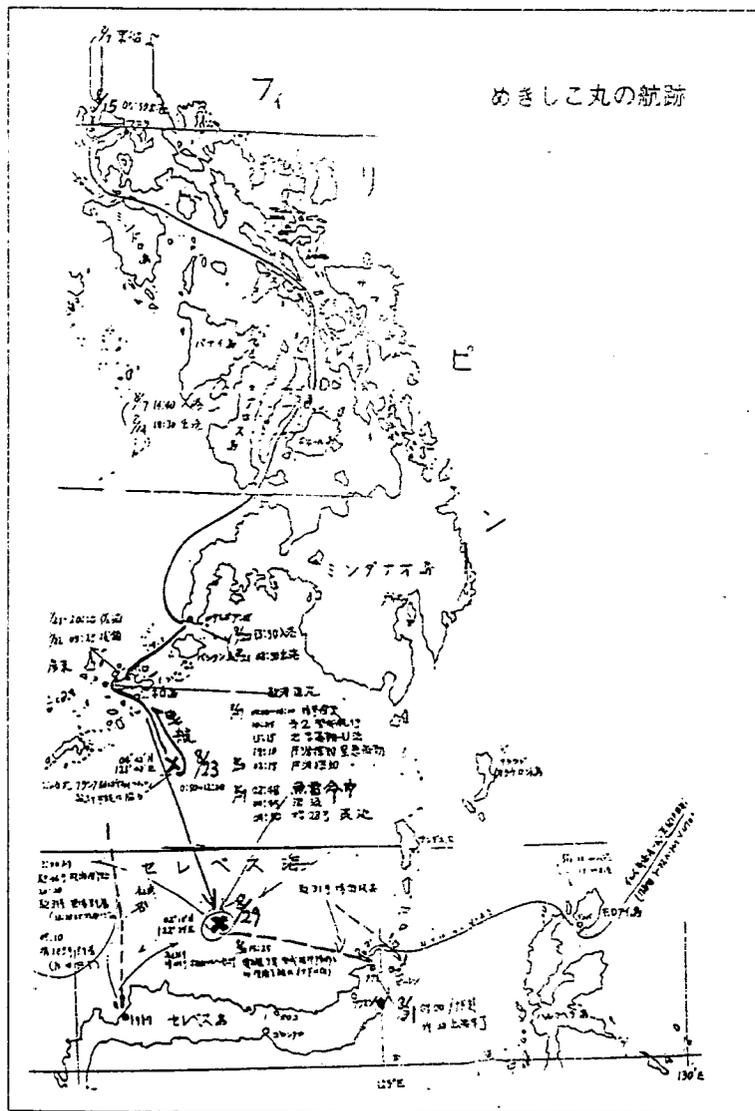
駆逐艦は舳をそろえて停止したが、なぜか、輸送船のつづいて来る気配はなかった。上甲板には、裸同然の兵士たちがひしめいていた。舷側で手を振っているものもあつた。軍装も完全な凛々しい歩兵部隊の入港を期待していた私たちは、衝撃をうけた。駆逐艦から、最初に私たちの大発へ下船してきた海軍士官は、輸送船二隻が敵潜水艦の集中攻撃をうけ、近海で轟沈されたことを告げた。

歩兵部隊の大部分は、兵器、弾薬、貨物とともに、セレベス島影を目にとめる位置で、海の藻屑と化していたのである。

海中に投げだされて、浮きつ沈みつしていたわずかな兵員が、駆逐艦の救命ボートに拾いあげられ、万死に一生を得て、メナド港にはいった。輸送船轟沈前後のくわしい状況は、埠頭棧橋へ引き揚げたのちも、説明されなかった。富田少佐は、悲痛なにがりきつた表情で「作業停止！解散」をあつさり告げた。敵機影はなく、海面も埠頭周辺も嘘のように安穩で、かがやくばかりに鮮烈で美しかった。「決死揚塔作業」は、一陣の突風のように解散した。

轟沈した二隻の大型輸送船は、めきしこ丸と、ふあぶる丸ということである。▽

八月三十一日の奥村少尉の手記の中、駆逐艦二隻とあるも、これは駆逐艇二隻と哨戒艇一隻の三隻であり、又、海軍士官が輸送船二隻が敵潜水艦の集中攻撃をうけ、撃沈、云々も亦輸送船一隻と掃海艇一隻撃沈されたことの記憶違いと思われる。



相良部隊長記録作製図

又、文末に撃沈されたのは、「めきしこ丸と、ふあぶる丸」とあるも、私が前述したように撃沈されたのは、「めきしこ丸」一隻であり、「ふあぶる丸」はホロ島に引き返し、ホロ島に滞船していたのであった。

以上の如く奥村さんの手記にも多少の御記憶違いもあるも、我々にとっては、我々が北セレベスへ上陸する直前のミナハサ地区の状況を知る唯一の公刊記録として、私たち同地域に駐留した者にとっては貴重な資料である。文中をかりて奥村さんの御労作に対して深甚の謝意を表するものであります。

我々は前述した興南棉花の綿倉庫で第二方面軍の処置をしつと待つのみであった。
メナドの空は青く澄んでおり、椰子林や、木々の緑は艶やかに南の太陽に光っていた。

夜光虫

医師が見た大東亜戦争

福岡 良男 著

これは、福岡良男氏が綴った随想をまとめ、小冊子にしたものです。
ここでは、巻頭の随筆、『はじめに—私の歴史観』を収録しました。

福岡氏の紹介及び連絡先は、会報タルシウス第2号をご覧ください。
また、同号に掲載された福岡氏の『ファリダ先生が青春時代を過ごされた
マナドで知った人々の心』は、この随筆集《夜光虫》の中の下記の2編を
基に書かれたものです。

『一人のインドネシア人の命を救った餞別の薬』

『巡回診察で知った堀内豊秋中佐の善政と民族意識』

尚、巻末に掲載した、「ミナハサ地図」及び「終戦後北部セレベス島
付近全日本人終結地地図」は、福岡氏の提供によるものです。

【川井 雄二】

一。はじめに——私の歴史観

大東亜戦争中、私は陸軍の軍医として召集され、オランダの植民地であった蘭領東インド（現在のインドネシア）・スラベシ島北部・マナド地区に二年間滞在をした。

私は、日本の歴史の中で、ラジオのない時代に生まれ、第一次世界大戦、関東大震災、満州事変、日中戦争、大東亜戦争、敗戦、連合軍による日本占領、戦後の混乱など激動の時代に生きた。一九五一年にサンフランシスコ講話会議で対日平和条約と日米安全保障条約が調印され、一九七二年には沖縄の施政権が返還されたが、アメリカの恒久的基地化とアメリカ軍の駐留は続いており、日本の戦後は終わっていない。

生は死のはじまりであり、やがて、この世から消えてなくなる。生は一過性の遺伝子の仮住家に過ぎない。遺伝子は、次の生命（子孫）に受け継げられるが、私たち個人の体験は、生命とともに消え去る運命にある。

体験は、人それぞれによって異なり、全く同じ体験をもった人はありえない。従って、後世の人が、日本の歴史を正しく理解・解釈できるように、その人が体験した事実、とく

に戦争体験を歴史として書きのこす義務があると考えている。

そのような観点から、私の陸軍への召集、戦争、敗戦、復員までの期間と、終戦後の混乱期に医師として体験したことを後世に残すべきと考え、その体験を、随想、『夜光虫』——医師が見た大東亜戦争——という題名で書きはじめた。

昭和十九年八月六日、護衛艦に守られて、門司を出港した大阪商船の『うるる丸』を輸送指揮船（輸送指揮官坂牛中佐）とする二十一艘の輸送船団は、敵の攻撃を恐れ、灯火官制のもと静かに南下を続けていた。南の夜空に輝く星は、素晴らしく美しかった。ただ聞こえるのは波の音ばかりであった。

船尾を眺めると航跡が夜光虫で美しく輝いていた。あたかも日本内地に続く回廊のようである。誰もが、無言で、美しく輝く回廊を眺めていた。皆、私と同様に、故郷を思いだしていたのであろう。

私は、悲しげな顔をして、私を見送ってくれた病気で衰弱した父、淋しそうに無言で送ってくれた母と妹弟を思い出し、望郷の念にかられ、次の一句を詠んだ

『夜光虫故郷に通う船路かな』

題名の『夜光虫』はこの一句からとったものである。

その後、われわれの輸送船団は、台湾とフィリッピン・ルソン島の間のバシー海峡において、アメリカ潜水艦の集中攻撃をうけ、輸送船二十一艘中、十一艘が轟沈され、一瞬にして約五万人の生命が失われた。

目の前で、火炎に包まれ、数分で沈没してゆく輸送船を見て、はじめて戦争の悲惨さを体験するとともに、戦勝、戦勝という大本営の発表がいかにか欺瞞にみちたものであるかをはじめて知った。既に日本の制海権も制空権も失われていた。

私が乗船していた輸送船の「うらる丸（大阪商船）」には魚雷がそれて命中しなかった。このとき、人の力ではどうにもならない、幸・不幸の巡り合わせ——『運命』——というものを知った。

それとともに、われわれ全員は、刑の執行日が決まっていない死刑囚のような立場にたたされていることがわかった。

大東亜戦争の敗戦後、五十数年が経過した。オランダ植民地時代のインドネシアを知っているインドネシア人も日本人も、大東亜戦争時代を体験した日本人もインドネシアの人も次第に世を去る年令になり、戦争の記録も彼らの死とともに消え去る時代となった。

インドネシアの民衆はオランダと四年半にわたって独立戦争を戦った結果、インドネシアの独立を勝ち取った。このことは五百年間にわたる白人の世界侵略にピリヨウドをうち、植民地開放、人種差別撤廃の動機となり、世界各地の植民地の独立を促し、世界地図を塗り替えるという人類史上画期的革命をもたらした。

東京を出発するとき千六百三十五人いた私の仲間で、無事帰国復員できたものは二十一人であったが、現在の生存者は、私を含め僅か五名となってしまった。

戦争体験は、同じ地区、同じ部隊にいた人でも個人個人によって異なっている。

既に多くの大東亜戦争の記録が書かれているが、この時代の歴史は未だに論争にとむものが多い。これは戦争の地域が非常に広かったこと、多くの当事者が真実をあまり語りた

がらぬことに起因している。とくに、精神医学的立場からみた記録は殆どない。

大東亜戦争時のインドネシア全域における戦争記録を残すためには、各地区における記録を集約しないと、戦争の全体像をつかむことはできない。一人でも多くの戦争体験者が主観をまじえず、ありのままの事実を記録として残す義務があると思う。

しかし、いざ、ありのままのことを書くなるといふいろいろの制約があり、難しさの壁にぶつかってしまう。

私が、戦史を、再び書く決心をしたのは、著作家保坂 正康先生とお会いしたとき、『戦争体験をした人の数だけ歴史がある』、『戦争体験者が、戦争中に、自分が体験したことのみを書き残すことが、正しい歴史である。それを総合したものが大東亜戦争の全体像であるので、是非後世のために書き残してください』という話をうかがったときである。

最近、古い書類の整理をしていたところ、インドネシアに駐留中に書いたメモがでてきた。また、私が駐留したインドネシアの北部セレベス島のソンデル町付近の村をスケッチした地図、風景、人物画もでてきた。英語を通じて現地の小学校の校長と日本語とマレー語の交換教授をしたマレー語（インドネシア語）のノートと、内地からもっていったマレー語（インドネシア語）の小冊子と携帯用の医学書もでてきた。

戦争終了後、帰還船（アメリカ貨物船）に乗船する時に行なわれた連合軍（オーストラリア軍）の持ち物検査は、軍医に対しては寛大であったために没収を免れた。

この、メモの発見が、私の体験を書く決心を促してくれた。

昨年、ある女子大学に講演に行ったとき、講演の後の懇親会の席上、一女子学生から、『先生は大東亜戦争に行ったのですか』という質問がでた。私は『軍医として召集されて、インドネシアへ連れて行かれました』と言ったとき、『なぜ召集を断らなかったのですか。インドネシアでは悪いことばかりしたそうですね』という答えがかえってきた。戦争のない平和な時代に生まれ、戦後教育を受けた彼女にとっては他意のない質問であったかもしれない。しかし、私は、この学生が正しい歴史的時代認識をもっていないことにショックを受けた。

彼女の発言は、私の戦争体験とその時代的背景を、どんなことがあっても書き残さねばならないという気持ちに私をさせた。

私の戦争記録は、平和な生活を送っている戦後派の人々にとって、現在の常識と価値観から理解できぬことが多いと思う。歴史は常に流れており、『常識』と『正常』の定義も価値観も時代とともに変化している。歴史的に時代背景も変遷している。

人は時代を選んで生まれれることはできない。

私は、軍医として召集され、大東亜戦争に参戦しなければならなかった。私も時代を選んで生まれてくることができなかつたので、大東亜戦争に参戦しなければならなかつた。

ある時代に正常であつたことでも、別の時代では異常のこととされることがある。

平和の時代に人を殺せば、長期間の懲役、時には死刑となる。戦争時には、敵に損害を与え、多くの敵を殺し、殲滅すれば、称賛され英雄となり、その功績に対して勲章が授けられる。天と地、天国と地獄、白と黒のような違いがある。時代をはかる尺度（物差し）が時とともに違うのである。

殺さねば殺されるというのが戦争である。戦争は集団殺人である。召集された一般庶民が最大の犠牲者となるが、現地の罪のない一般市民もまきぞえとなるのが戦争である。

現地の住民のことばは勿論のこと、現地の習慣、宗教、文化、社会経済状況を全く知らない異国民が突然におしかけ、これらを無視して、異文化を押しつけるのが戦争である。何の関係もないのに、疎開を強制され、日本と連合軍の爆撃によって死傷し、家を破壊され、また、食料難によって栄養失調となり、あるいは死亡した現地住民のことに思いをはせると胸が苦しく、申し訳ない気持ちで一杯である。

私が滞在をしたインドネシア、スラベシ島北部のマナド地区は、昭和十七年一月一日に海軍の落下傘部隊五〇七名が降下し、三百五十余年間にわたり植民地支配を続け続けたオランダを、激戦（大隊副官染谷秀雄大尉以下戦死三十一名、戦傷二十三名）のすえ、僅か三日間で駆逐し開放した地区である。

北部スラベシ島のラングアン飛行場（カラビラン地区）に降下した落下傘部隊長の堀内豊秋海軍中佐は、徹底した善政をしき、オランダの傭兵であったインドネシア人に塩を与えて直ちに釈放し、オランダが禁じていた団体行動と集会を許し、庶民に教育を与え、差別を撤廃し、自由を与えた。部下に対しては、現地人に絶対に迷惑を掛けるような行動をしてはいけなさと厳命をした。

現地には、「将来北の空から救世主が降り、住民を開放する」という伝説があった。そのような信仰から、堀内落下傘部隊は「空の神兵」として現地住民から熱狂的歓迎を受けた。オランダ人から徹底した人種差別を受けて、土民としての扱いを受けていた現地住民にとつては、肌の色と容貌がほとんど同じ人（日本人）が降下したことは青天の霹靂であった。

一部の特権階級の人を除き、現地の一般庶民は、ひどい人種差別と搾取をおこなった旧宗主国オランダを憎み、同じアジアの有色人種である日本に親近感をもち、親日的でありわれわれを心から歓迎してくれた。夜中に一人歩きをしても安全であった。

どこの部落に行っても、『ニッポン ショウトウ（上等）』、『ニッポン サマサマ（平等）』、『ホリウチ タイチヨウ ショウトウ（上等）』と、右手の親指を上に向けてて歓迎してくれた。

日本の敗戦後も、彼らは、敗戦前と同じように我々に親切にしてくれ、また、あれこれと差し入れをしてくれた。彼らの好意と恩義を未だに忘れることはできない。

インドネシア人に対する親近感と格別の思い入れは、今日まで私の心から消え去らないのみならず、益々高まるばかりである。

日本の陸軍と海軍とは、国策に対する考え方の相違から、ひどく不仲で、現地でも、上層部はことごとく対立していたが、われわれ一般下級将兵の間には対立はなかった。

陸軍に所属していた私の立場から見ても、海軍の堀内豊秋中佐の善政が、現地のインドネシア人の対日感情をよくし、日本とインドネシア現地住民との友好関係を緊密化したことは事実である。

堀内豊秋海軍中佐は、現地の住民から尊敬されていたが、その善政の恩恵に浴した私たち陸軍の者も幸せであった。私も堀内豊秋海軍中佐の偉大を痛感した。

私が巡回診療中、何ら危険を感じることも無く、単独で行動でできたこと、巡回診療で訪れた町の小学校で、私のために、夜になると、町民主催の歓迎ダンス パーティーを開いてくれたこと、今夜は我が家に泊まってくれと引つ張りだつたことも堀内豊秋海軍中佐の善政のおかげと、私は感謝している。

メナド地区は、オランダが最もオランダ化に力を入れ、キリスト教に改宗した者を優遇して、下級官吏、教師、牧師、下級兵士（傭兵）などに登用し、新社会層をつくった地区である。オランダはマナド人やアンボン人を傭兵として使い、同じインドネシア人を弾圧した。ジャワ人からマナド人は『オランダの犬』、アンボン人は『黒いオランダ』といわれ軽蔑されていた。

このように、オランダ植民地政庁は、これらの新社会層と華僑を使い間接植民地統治を行なっていた。しかし新社会層は、オランダに協力する反面、少数のオランダ人による政治的権力と社会的権威、ならびに、現地庶民に対する人種差別に強い不満を持っていた

敗血症をともなつた背部膿瘍に罹患したの現地住民の手術を私が行い、患者の命を救つたことが契機となり、私は現地住民の要請によって無料巡回診療を行なうことになった。

巡回診療中に私が接触した現地の庶民と新社会層の人々の中に民族自決と強い独立願望があることを知った。わが国の明治維新の人々が抱いていたような気概と、民族を愛する強い秘められた情熱をもっていることをひしひしと感じた。

巡回診療中に、彼らの民族意識に共感するようになった。現地の人々と共に「インドネシア独立の歌」を肩を組み歌つた感激を未だに忘れることができない。彼らとの交流は五十四年たった現在も続いている。

「アジアの解放」という日本政府のスローガンに大きな期待を寄せていた現地住民も、日本政府がインドネシアになかなか独立を与えない態度と、次第に強化される物資徴発と労務徴発に不満をもつようになり、日本はインドネシアを日本の植民地とするのではないかという強い不信感をもつようになった。

軍隊とは、兵舎内に拘禁・隔離され自由を奪われた集団である。このような環境が長く続けば続くほど、「拘禁性精神異常状態」となり、また、思考、感情、および行為の障害、妄想、幻覚、自我意識障害など種々の精神異常症状がでてくる。

とくに、ヒステリックとなり、上官に抵抗できない階級の下の部下に言い掛りをつけ、私的制裁（ビンタ）を加えたり、嫌がらせをするものが多かった。拘禁性精神異常は、とくに古参のものに多くみられた。拘禁状態が長くなれば当然の結果である。

私が所属していた部隊でも、部隊本部のY中尉とF曾長は、ことあるごとに、部下に言い掛りをつけ、私的制裁（ビンタ）を加えていた。Y中尉とF曾長のヒステリックな態度重なる私的制裁（ビンタ）に耐えられずインテリ兵のO T兵長は自殺をした。

軍医は、軍隊内で将校待遇を与えられたが、軍隊の主流は兵科の将校であって、軍医は傍流であった。軍医には内科医、外科医、小児科医、産婦人科などの臨床医師もいれば、基礎医学の医師もいた。臨床経験の豊富なものから、臨床経験の全くない軍医もいた。軍医は衛生兵とともに、あらゆる病気や外傷に対応しなければならぬ。病気、外傷についての教育と予防と治療をするだけでなく、心の病のよき相談相手とならねばならぬ。また、不治の病の兵士が、家族と離れた異郷で安らかに死を迎えることができないよう、心の支えとならねばならぬ。

部隊の裏山で、枯れ木を積み上げ〇兵長の亡骸を火葬にしたが、『上官の命令に反抗できない』という軍隊組織のなかで中で、自殺という道を選んだ〇兵長の心の病を救えなかった無念さに、遣る瀬ない気持ちになった。

外傷後におこる「外傷神経症」、驚愕や軍隊から逃れたいという強い欲望が満たされなためにおこる「戦争神経症」も多かった。詐病を訴えるものも多く、軍医として、その鑑別診断に苦勞した。

奴隷船のように、定員以上に輸送船の船倉に詰め込まれた監禁された兵が、船倉の異常な温度と湿度の上昇のため、うつ熱病（熱射病）となり、体温の著しい上昇、急性循環不全、全身痙攣などの中枢神経障害をおこし、瀕死の状態で運ばれてきた。その殆どの兵が死亡した。その都度、私は水葬に立合い、波間に沈んで行く兵を、切ない悲しい思いをして見送った。

自決とは自ら、自らの意志で死を選ぶことである。戦争中には、民族の誇りから自決をしたものもいたが、強制されて自決させられたものもあった。拘禁性神経症となった兵が、部隊外を徘徊した結果、脱走兵として扱われ、その兵に対して、IM部隊長が自決を強要している現場を目撃した。

部下将校が、自分の殺害を企図しているという被害妄想から、軍刀を抜き部下将校を脅迫して毒を飲ませ、軍医と将校全員を殺害しようとしたT部隊長もいた（註：三輪清三氏千葉大学医学部・名誉教授手記『忘れ得ぬ思い出』に記載されている）。

司令部の某高級将校E少将は、敵兵が夜間寝室に侵入してくるといふ幻視に怯え、U軍医中佐を同室に寝かせていた。

私の記録は、戦争という異常な時代のありのままの記録である。

このような異常な時代があったこと、人間は環境によって精神状態が異常となりやすいことを知ってほしい。

戦争には、明の部分と、暗い部分とがある。どちらを強調しすぎても歴史は歪曲されたものになる。

著者自信が体験したこと、著者自身が自分の目で見たことのみを、戦地で書き残したメモに忠実に、ありのままに書いた。

伝聞や、噂を鵜呑みにして書き残すことは、後世に謝った歴史を残す恐れがあり、歴史学を冒瀆することになるので省略した。

人間の殺し合いの戦争が、どうして世界で絶えないのか。終戦時の私の心は、戦争の悲惨な体験に対する悲しみ、戦地で世を去った友達への弔い、物質的に、経済的に、精神的に、肉体的に言いようのない苦痛と犠牲を強いてしまったインドネシア現地住民にたいする申し訳なさで一杯であった。

日本帰還後は、アメリカ空軍が日本本土に加えた原子爆弾投下、無差別爆撃とおびただしい数の非戦闘員の犠牲を知り、東京の焼け野原に立ち茫然自失してしまった。

日本社会の混乱、闇市場、街に溢れた連合軍兵士と車両、連合軍兵士に群がる日本人の街娼婦をみて、日本は永久には立ち上がれないのではないか、アメリカの植民地となるのではないかと思つた。

また、日本政府の内務省警保局が命令し、警察署長の権限を使い、占領連合軍のために性的慰安施設（慰安所）を日本全国に設置したことを聞いてショックを受けた（註：本文慰安婦の項）。

大東亜戦争の敗戦後、自分一人が生きて行くだけでも大変であった。私はは生きるために、食物の買い出しに出かけながら働き勉強をした。この個々のエネルギーが結集し大きな力となり、国際状況の変化もあり、日本社会を復興へと導き、世界の大国といわれるようになった。

日本は戦争裁判という戦勝国の報復裁判によって裁かれたが、日本人自身による戦後処理は行なわれていなかった。これは、戦後の日本が連合軍総司令部の管轄支配下にあり、日本人の意志によつて政治を行なうことができなかったことと、国際状況の変化にともない連合軍の政策上、日本の旧体制を利用せざるをえなくなったためであろう。

沖縄に行つてみると、沖縄県民が体験した戦争の悲惨さがわかるとともに、大東亜戦争が未だ終わっていないことがわかる。

沖縄県民には、戦争に巻き込まれて死亡した人のほか、日本軍によつて殺された人も、自決を強要された人も多数いた。狂気となったアメリカ兵の報復の犠牲となった人も多い。アメリカ兵による強姦も日常茶飯事であった。

鎌倉に居住していた私の知人の夫人も、昼間、突然無断浸入してきたアメリカ兵によつて強姦され、性病を感染させられた。

沖縄のように、戦場や占領地となった地域の住民は惨めである。

海外にでかける余裕のある日本人は、先ずはじめに沖縄を訪れ、沖縄県人が体験した悲惨な戦争体験を知るべきというのが私の持論である。

動物は生きるために闘争を繰り返し、弱者を犠牲にして生きている。人間も弱者を犠牲として生きている動物である。現実にはアフリカの原野における野獣の生活とやら変わりはない。従って、動物である人間が存在するかぎり、人間社会から戦争を無くすことは極めて困難である。現在も、世界各地で、民族戦争や宗教戦争がおこっている。しかし、われわれは人の殺しあいである戦争が、絶対におこらないように努力をしなければならぬ。

悲惨な戦争が再び起こらないこと、平和な世界が長く続くことが、私の願いである。現在の日本は、いつ戦争に巻き込まれるかわからない環境にある。自分の国の平和は自分で守るという意識が稀薄になっている。

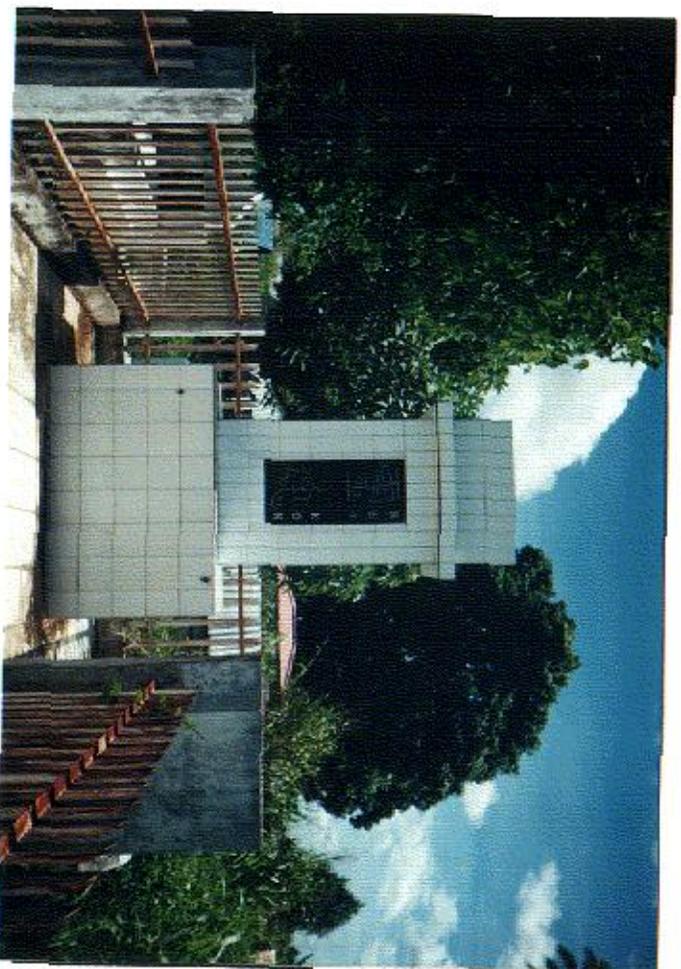
私は思想的反戦論者でなく体験的反戦論者である。私の世代の者が味わったあの悲惨な戦争体験を、現在と後世の人々に体験させたくないという私の強い気持ちだが、この『夜光虫——医師が見た大東亜戦争』を書きはじめた動機である。

(日本インドネシア友好交流協会・名誉会長)

(「財」日本インドネシア協会・参与)

(東北大学医学部・名誉教授・医師)

(東京文化学園・理事)



堀内大佐の墓 (マナド市テインリオン墓地区内)

墓碑には『靈魂 REI KON』という文字しか刻まれていない。

堀内大佐を慕った現地有志が建てたというが、詳細は不明である。

この墓の建立の由来についてご存じの方は、編集部までご連絡下さい。

孤島の土となるとも

B C 級戦犯裁判

岩川 隆 著

講 談 社

ノンフィクション作家である岩川氏のライフワークとして高く評価できる仕事と思います。

裁判とは所詮、人が人を裁くもの。まして「勝者の裁判」です。裁かれる人は悔しかったと思います。

ここでは当地に関する部分のみ抜粋させて頂きました。当時この地に駐屯されていた豊橋の村上氏からご紹介頂いた本です。

今、私は平和ボケともいわれる状況の中で生活しています。戦争とは、戦争犯罪とは何であるのか。多くのヒントを頂きました。ここ赤道直下のビトンにて当時の関係者や現場を訪ねるのも楽しいものです。

人生の出会いのおもしろさを味わいました。

【川口 博康】

バタビア・メダン裁判

インドネシアの独立

同じ戦勝国といってもそれぞれの国にはそれぞれ異なる勝者の感情があり、そのことが色濃くB級裁判にも投影している。オランダ裁判の全般についてはこれまでほとんど書かれていないが、被告の一人であった元第一六軍司令官・今村均大將はその私記『一軍人六十年の哀歎』の中で、こう述べている。

「日蘭間の戦闘行動は僅か九日間で終り、彼我の犠牲は少なく双方の興奮も低かったため、停戦後の俘虜、一般市民の受けた人的被害は他の連合国に比し最も軽少だった。が、戦犯を問うた数とその量刑程度は他とは比較にならない重酷なものである。何のためであろう。他の連合各国は、ともかく日本を打倒したという勝利の誇り、満足感をもっている。だから終戦直後の半年はまだ醒めきれない興奮でめちやくちャの暴虐行為を武器を捨てた日本将兵に加えたものの、日を経るに従い自然に平静さを取り戻して来た。しかるにオランダの場合は、終戦後英豪軍より取り戻された蘭印諸島を引き渡されたに過ぎないから、直接日本軍の上へのしかかり、これを圧倒した優越感に味わい得ないで終った。自然、鬱血は散らず、溜飲は下がらない。この民族的物足らなさが、戦争犯罪軍事裁判の形の上に報復感情のはけ口を見出したのである。かようにして被害の最も少なかった国が、最も残酷な処刑を行ったのである。が、更に強く、大きくオランダ民族を刺激しているのは、なんといっても終戦のその日から今に至るまで引き続いており、なお解決の曙光も見ず一日と悪化の一途を辿っている

インドネシア独立共和国との闘争の影響であろう」

たしかに、オランダが戦争裁判で日本人にとりわけ苛酷に立ち向かった大きい原因は、インドネシアの独立運動と独立にたいする苛立ち、怒り、あるいは鬱憤とみることもできる。

蘭領印度——スマトラ(島)、ジャワ(島)、ボルネオ(島)、セレベス(スラウェシ)(島)などを主体とする諸島の一带は、およそ三百年にわたるオランダ統治の「宝庫」であり、これらの植民地をなすところなく短期間に失ったオランダは深刻な衝撃を受けるとともに、当然のことに、日本軍あるいは日本人に激しい憎悪の感情を抱いた。

これにたいして日本の最高戦争指導会議は、昭和二十年七月十七日、終戦に先立つこと一カ月前にインドネシアの独立を決定している。終戦直後の八月十七日には首都ジャカルタにおいてスカルノとハッタがインドネシア共和国の独立宣言をおこなった。九月七日を期して全インドネシア独立のため各地域ごとに独立準備委員会が結成され、独立軍が準備に活発に動き、ジャワでは日本軍の武器弾薬を獲得しようとする騒ぎもおきる。日本軍は戦時中からインドネシア人たちに軍事教練をおこなっており、終戦となると、その独立軍に招かれたりみずから参加する日本軍将兵もあって、ともに連合国軍の上陸を阻止しようとしたりした。

英印軍がジャワに上陸を開始したのは九月十五日である。英印軍と独立軍の衝突は絶えず、英印軍としてはすぐに日本軍の武装解除をおこなわず、しばらくはそのまま治安維持にあたらせた。その後、収容所を設置して日本軍将兵を収容してからも、脱走して独立軍に走る者もあり、スマトラのメダンなどでは、

「英軍やオランダ軍は戦々競々としていたが、日本軍将兵は町に出ると大手を振って歩くことができた」という状態が続いた。

オランダ軍にとってはいわば戒厳令下にあり、このような背景のもとにおこなわれるBC級裁判は特殊なものならざるを得なかった。戦争犯罪の捜査も当初は英豪軍がおこなっており、オランダ軍が捜査を開始したのは終戦の翌年の、昭和二十一年五月ごろからである。

いわゆる蘭領印度地区は戦時中の日本軍にとって南方圏の兵站基地といっている存在であった。

大規模な作戦や戦闘もなく進出、占領し、陸海軍による軍政をしき、俘虜収容所などを置いた。今村司令官が言うように、戦闘といえれば終戦の直前に豪州軍が蘭領ボルネオのバリクパパンに反攻し上陸してきたときの一カ月余があるくらいのものである。軍政については人口が密で行政処理もいろいろと複雑なジャワとスマトラは陸軍が担当し、人口密度も希薄で将来は日本の「永久所有地(植民地)」としたい地域つまりボルネオとセレベスより以東の一角は海軍が担当した。海軍の占領地軍政処理要綱(官房機密第三二六七号)によると、

「海軍ノ主担任地域ハ我方ノ永久確保ヲ目途トシ且全地域ニ亘リ帝国ヲ中心トスル有機的結合ニ遺憾ナカラシムル如ク統治、其ノ他万般ノ施策ヲ実行スルモノトス」

とある。これをみても分かるように陸軍軍政地域と海軍軍政地域とは軍政の性格・方針も異なり、陸軍はインドネシアの独立を助けるかたちをとったが、海軍のほうはその地域のいっさいの民族運動を占領下の独立運動として弾圧し、ジャワの独立運動にならおうとする民衆の動きを極力、抑圧しようとした。このことがのちのBC級裁判でも「戦争犯罪」の異相となつてあらわれてきている。オランダも日本も、結果は勝者と敗者になつて終わったが、それぞれこれらの南方圏の「植民地化」をめぐる思惑や攻防の報いを受けたということにもなる。

英豪軍やオランダ軍による捜査は、ここでもまず俘虜収容所から釈放された俘虜たちの事情聴取や告発を受け入れることから始まっている。たとえばシンガポールに本所を置く日本軍のマレー俘虜収容所(所長・福栄真平中将)は第一分所をスマトラのメダンとし、およそ三千人の俘虜たちを山岳地帯

の道路建設に従事させていた。第二分所は同じくスマトラのバレンバンに置き、第一分遣所(バレンバン)では俘虜およそ三千四百人を使役して飛行場を建設させ、第二分遣所(バカンバル)ではこれまた千五百人という俘虜を中部スマトラ横断鉄道の建設に使っていた。またジャワのバタビア(現在のジャカルタ)に本所を置くジャワ軍抑留所(所長・中田正之太佐)は、バンドンに第一分所、スマランに第二分所を設け、およそ十一カ所の分遣所になんと十一万人におよぶ民間人(うち女子八万人)を抑留して、有刺鉄線の囲いの中で「自治生活」を送らせていた。

オランダの植民地であったジャワには、オランダの民間人や、オランダ人との混血や華僑も多い。これらの「敵性国人」をいかに処遇するかは当初からの命題だったが、昭和十七年四月におよそ二千人のオランダ人官吏を拘禁したのが最初で、戦況が逼迫してスパイや敵性国人の「後方擾乱」が危惧されてくるようになると、登録されていたオランダ系の民間人たち(女子・子どもを含む)を全員、抑留したのである。

「反日陰謀作戦」

これらの膨大な数の俘虜や抑留者たちを管理するには、いかにも日本軍の兵力は少なかった。たとえば女性ばかり五千人を集めた「ジャワ軍抑留所第二分所第四分遣所」(中部ジャワ・スマラン)を管理するのは、わずかに日本人将校一人、下士官一人で、あとは朝鮮人軍属二人(のち三人)、インドネシア人兵補十五人であったという。管理者、警衛兵の数をふやすため日本軍側は朝鮮人軍属、インドネシア人兵補を大量に補給した。マレー俘虜収容所関係では八百人の朝鮮人軍属を、ジャワ軍抑留所では三千人のインドネシア人兵補を用いたという。インドネシア人兵補たちはのちに独立運動の主軸となつていったが、朝鮮人軍属たちはオランダ側の「日本人とみなす」という法によって多数がBC級裁判の犠牲者になつたことを忘れてはならない。

日本側は兵力も乏しかったが、それら俘虜や抑留者の生活を維持するのにも困った。食糧や物資は各地の戦場に送るために、現地や収容所の生活はしだいに苦しくなる。戦争も末期になると、飛行場建設や道路建設に使役されている俘虜たちはろくに食べるものも与えられず、水も少なく、身につけているものはパンツだけというような状態が現出して、多くが倒れ、死んでいった。海を渡って輸送する途中にも病死者が続出した。抑留されていたオランダ系の民間人たちも、毎日が飢えとの闘いとあったような状態に陥った。

日本側としては、「与えようにも食糧や物資がなかった」と言いたいところだが、「植民地のインドネシア人と日本人を馬鹿にしていた」というオランダ系の俘虜や抑留者たちの怒りと怨恨は、終戦となって火をふいた。告発があいつぎ、朝鮮人軍属を含めて日本軍の将兵たちはつぎつぎに戦犯者として逮捕された。

兵力が乏しいということは、防衛と治安維持の任務において、憲兵や海軍特別警察隊、警察の権力が増大し、ときには横暴なばかりに発揮されるということでもある。海軍の軍政地域では、反日工作やスパイの投入、後方攪乱工作、俘虜および抑留者にたいする扇動などの防止に苦勞し、事件やトラブルが多く生じた。

最大のものとしては、昭和十八年十月以降「反日陰謀工作」ありとしてボルネオのポンティアナクにおいて現地民およそ一千名を検挙し、軍律会議に付した四十三名はむろんのこと、そのほかの者も「現地処分」した「第一事件」と呼ばれる事件がある。「第二事件」というのは昭和十九年九月以降、主として華僑を検挙し、十七名にたいしては裁判をおこなったが、そのほか百五十名から二百名の検挙者については裁判もせず斬殺したというもの。これも場所はポンティアナクである。「第三事件」とは同じくボルネオのバンジェルマシにおいて、昭和十八年十二月二十日、元ボルネオ総督のオランダ人ハガ以下二十六名を「抗日反逆陰謀」のかどありとして軍律会議にかけ、全員を死刑に処した

という事件であった。以上の三大事件がいずれもボルネオで発生し、告発されたというのは、ジャワ・スマトラの陸軍軍政地域とまったく異なった事情を物語っているといつてよからう。

裁判の結果をさきに見ると、とりあげられた総件数は四百四十八件、被告となった者千三十八名、死刑は二百三十六名で、この数字は七ヶ国の裁判のうち被告数において米國裁判につぐ第二位であり、死刑の判決にいたっては第一の多数という厳酷なものになっている。

余談になるが、各地のオランダ裁判の被告体験者たちに話を聞くと、「インドネシア人による戦犯告発は一件もなかった」

という証言が多い。国連の介入によってオランダが主権をインドネシアに委譲せざるを得なくなったのは昭和二十四年十二月二十八日であった。このときオランダ側は戦争犯罪裁判の続行と既決者の引き渡しを強く要望したが、インドネシアに拒絶され、裁判を打ち切り、既決者を早急に日本(果鴨)に送らざるを得ない立場に追い込まれた。その送還船チサダネ号に乗船した今村大將ほかの「戦犯」にたいし当時のインドネシア大統領スカルノはメッセージを送ってきて、自分自身の日本および日本人にたいする考えは以前も現在も変わらぬこと、一同が健康で日本の再建に努力されんことを祈念すると激励してきたという、エピソードも残っている。

さきにも述べたとおり、オランダの戦犯捜査は最初、英豪軍の捜査に従うというかたちであった。東南アジア連合地上軍最高司令部には全地域の情報が集中していたが、「捜査班」には蘭領印度の将校も参加していた。情報を入手して事実を調査したのち、どちらが裁判国となるか相談し合うという手順で、オランダつまり蘭領印度側の担当機関は軍の情報機関であった。

終戦となって蘭領印度の復権がきまり、検事総長の指揮のもとになる戦争犯罪捜査局が置かれたのは、英印軍がジャワに再上陸してくる寸前の昭和二十年九月十一日である。本部は最初ブリスベーンとしたが、やがてバタビアに置かれた。オランダつまり蘭領印度側としてはインドネシアの独立軍と

も戦わねばならず、いわば戒嚴令のもと具体的には「蘭領印度の各臨時軍法会議の軍檢察官」に戦争犯罪事件の捜査と起訴が一任された。

求刑すなわち判決

裁判の法については昭和二十一年六月以降、「蘭領印度に属する領土における戦争犯罪人の裁判」として数々の総督令が公布されている。それらの内容を見ると、

「〔臨時軍法会議においては〕指揮官がその指揮下にある三人の将校を裁判官に任命し」

「外国将校あるいは海空軍將校指定の可能性を規定するとともに、そこで軍檢察官の職務をおこなう者を任命する」

「指揮官はこれらの任命決定についてできるだけ速やかに総督および高等軍法会議に通報する」

「訴訟法において通常の軍法会議に関して規定されているものは、特別の規程がなく、かつ訴訟法第四編の規程に適合するかぎり、臨時軍法会議においても通用する」

というような規程の文字がみえる。「指揮官」とはだれであり、何であろうか。そのほか、「犯罪事実の証拠」とか「被告人の権利」などについての規程は他の裁判国のそれと大差はないが、「判決およびその執行」の項目には他国と違って強硬、苛酷な態度があらわれている。たとえば、総督令の「一九四六年第七十四号戦争犯罪訴訟法」には、

「軍法会議が求刑を受けた者を死刑に処さねばならないと判断するときは、軍法会議は軍檢察官にたいし被告人を拘引すべきことを命ずるものとし、判決はその間秘密とされるものとする」(第八十一条)

「被告人が死刑になるであろうような犯罪を犯したという嫌疑を受けているときは、判決前に被告人の希望により牧師との面会を許可するものとする。ただし、牧師との面会には軍檢察官の同意を必要

とする」(第八十四条)

などであり、これらは、これまでみてきた他国の規程にはないものである。

檢察官によって死刑の求刑を受けたときは(判決をまたず)既決者と同様に拘禁されるであろうとい、死刑になるであろうという。「嫌疑」を受けているときにも牧師に会わせてよろしい、という。檢察官による求刑はすなわち判決とほぼ同じであり、判決は(判決確認の手続きを待つ用もなく)執行決定とみていい、という考え方が色濃くあらわれていた。これを俗にいえば、起訴されれば檢察官が追及するとおりの罪状によって求刑どおりに決定されるということである。

先述の「指揮官」のことについても、刑の執行については、「執行の認可を受けるために(刑の判決結果を)指揮官に提出しなければならない」として、

「指揮官が、臨時軍法会議によって評決された判決にたいし、執行の認可を与えることができぬ理由を認めるときは、指揮官は判決にたいする異議を臨時軍法会議に通告するものとし、臨時軍法会議がさらに考慮し、異議に同意できるときはそれに従って判決を変更するが、臨時軍法会議の判決を固持しなければならぬと考えるときは、前記の指揮官は自己の責任において判決の執行を延期することができる。ただし、できるかぎり速やかにその旨を総督に通報しなければならない」(第百十三条)

とある。これも他の裁判国の法の規程にはないもので、これでは「指揮官」の胸三寸で判決と執行はどうにでも変えられるということになる。じっさい、オランダ裁判ではそのような例も発生している。

メナド裁判において、昭和二十二年二月二十一日、コタモバグ憲兵派遣隊陸軍通訳の服部直被告は死刑を求刑されたが、判決では幸いにも(懲役二十年)と宣告された。ところがこの判決にメナド州長官は不服をとえ、執行に関する署名を拒否する行動に出て、その旨を臨時軍法会議に通告した。これにたいして軍法会議側は判決変更の意思がないことを州長官に回答。結局、この事件はパタ

ビア高等軍法会議でふたたび審理され、昭和二十二年十一月二十八日、死刑の判決。服部被告は昭和二十三年四月二十八日、バタビアにおいて刑を執行されている。「指揮官」というのはときに州長官でもあった。

訴訟に関しては、「戦争犯罪の概念規定に関する総督令」というのがあり、それらの規程はほぼ他の裁判国と同じだが、連合国戦争犯罪審査委員会が追加した「不法な集団逮捕」（無差別の集団逮捕）についての罪の項目を加えたのも一つの特徴だろう。さらに他国と違って、つぎの犯罪項目も採択している。

「抑留市民または被拘禁者の虐待」

「残虐な方法で処刑をおこなない、またはおこなわせること」

「難破船の乗船者を救助せず、またはその救助を妨害すること」

「市民にたいし、故意に医薬を支給しないこと」

「停戦条件に反して敵対行為をおこなない、または第三者にこれを教唆し、もしくはその目的のために情報、機会もしくは手段を供与すること」

これらは、蘭領印度が置かれた状況と体験した事実にもとづいて、裁判しやすいようにあらためてつけ加えたものであった。五項目とも、ほかの国の「戦争犯罪規程」には見られないものだ。逆に、興味深いことに、裁判国がそろって採択していた「犯罪項目」のうち、オランダ裁判にのみとりあげられていない項目がある。それらは、

「敵の軍事行動に関連する市民の強制労働」

「占領中における主権の篡奪」

「敵軍への強制徴兵」

「占領地域住民の国籍剝奪」

「連座罰を科すること」

「俘虜を許容されない作業に従事させること」

「自旗の濫用」

といった項目で、これらを採択しないでも裁判はすすめられると判断したところにも「蘭領印度裁判」の特殊な性格があるといえるだろう。

法を見てオランダ側あるいは蘭領印度側の考え方を知らうとすると、「上官の命令」についての考え方の違いも一つの特徴である。戦争裁判、とりわけ日本軍と日本人を対象としたBC級裁判では「上官の命令」をどのように判断し規定するかは重要なキー・ポイントだが、国際的には「裁判官は上官の命令という点に酌量すべき情状を見出すことができる」という規定や常識があるにもかかわらず、蘭領印度の戦争犯罪法ではこれを採用しなかった。これは蘭印側に言わせると、日本の組織や命令体系を考慮した結果であって、「情状の酌量」にはとどまらない、上官が悪いのだ、上官の責任を追及せよ、という逆の考え方にもとづいていた。蘭領印度は、これまでくり返してきたように、戦乱の地域ではなく「軍政」の地域である。憲兵や警察などによる拷問や虐殺の「犯罪事実」がほとんどであった。戦場のように末端の兵が独断で「犯罪」を犯すなどということはまず考えられない。上官もかならずその行為を知っていたはずだという。

「部下が戦争犯罪を犯した場合、上官が、戦争犯罪の犯されていることもしくは犯されるであろうことを知り、または少なくともそれを当然推測したにちがいないのに、部下による戦争犯罪の遂行を容認したときは、同人もまた、その戦争犯罪の正犯として罰せられる」（第九条）

という。知っていたのならもちろんのこと、部下の行為を「推測」できる立場にいた者も責任を負うべきである、とした。こうなると、下級者の犯罪行為が問われたとき、その刑事責任は上へ上へと無限に上級者に向かわざるを得ない。とりわけ日本軍の組織ではそのような結果となるが、それをど

ここでとどめ、どのような範囲で起訴する者(被告)を決定するかということについては、まったく裁判する側の自由裁量にまかされた。

部下の戦争犯罪行為を知らなかったということは帰責要件ではなく免責要件だという考え方であり、その証明を上官であった被告人側でおこなわなければならない。その結果、裁判では「無過失責任」を問われるに似たケースが幾つも出て、多くの上官は、「事件(戦争犯罪行為)を未然に防ぐための努力をしなかった」といったような理由のもとに死刑を宣告された。

抑留者が裁判官

こうして臨時軍法会議(裁判所)は各地に置かれた。それらを列挙すると、ジャワ島ではバタビア(ジャカルタ)、スマトラ島ではメダン、シンガポールの東端に位置するタンジュンピナン、ボルネオ島では西にあるポンティアナク、南のバンジュールマシム、東のバリクパパンの三カ所、セレベス(スラウエシ)島ではマカッサル、メナド、ティモール島ではクーバン、さらにバンダ諸島ハルク島のアンボン、ハルマヘラ島の北のモロタイ、旧蘭領ニューギニア(現在イリアンジャヤ)のホーランディア……と計十二カ所。ジャワ島、スマトラ島を中心にして、北はフィリピンに近いモロタイ島、東はシンガポール、西はニューギニアときわめて広い範囲にわたり、オランダ側が南海に拡散させた報復の拠点という感があった。

件数や被告数からみると、ジャワのバタビア裁判が群を抜いて多く、百九件、三百五十九名で、つぎはスマトラのメダン裁判が五十九件、百三十六名となっている。以下、事件数からいえば、ホーランダ(五十三件、五十七名)、アンボン(四十九件、七十九名)、メナド(四十四件、五十九名)、マカッサル(三十六件、九十二名)、モロタイ(二十一件、六十五名)、クーバン(二十一件、二十四名)、ポンティアナク(二十件、三十八名)、バリクパパン(二十件、八十八名)、タンジュンピナン(六件、十一名)

の順であり、被告の数からみれば、バタビア、メダン、マカッサル、バリクパパン、アンボン、モロタイ、メナド……となる。

このうち最高の件数を審理し、被告数も最も多かったバタビア裁判は、ジャワのバタビア(ジャカルタ)にある旧蘭領印度時代の最高裁判所の法廷で開かれた。裁判が開始されたのは昭和二十一年八月五日で蘭領印度の戦犯裁判の中では最も早く、最後となった昭和二十四年十月二十四日の判決も蘭印裁判つまりオランダ裁判全体の終結となるものであった。

ここで裁かれた「重大事件」は、「今村均軍司令官・岡崎清三郎参謀長(軍政監)の責任追及」「バタビア憲兵分隊事件」「スマラン慰安所事件」の三大事件だといわれるが、内容別にみると、件数や被告数は軍抑留所関係、憲兵関係、軍拘禁所関係、俘虜収容所関係、刑務所関係、雑件、上級階級者関係という順位となる。軍の抑留所関係が最も多かったことは当然といえば当然だった。裁判中に裁判官が、日本人被告に向かって、

「おまえは私の顔に見おぼえがあるだろう」

と、自分の顔を指さすこともあった。

「忘れてはいないはずだ。私もおまえが勤務していた抑留所に抑留されていたんだ」

と言ったりした。抑留所や俘虜収容所において解放された者たちが競って日本人の告発を始めたのは以前に述べたとおりである。

ジャワ軍抑留所に抑留していた数だけでも終戦時は五万七千四百四十四名にのぼっていたといわれる。ジャワ俘虜収容所に収容していた俘虜の数も終戦時には四千三百三十四名(オランダ兵四千四百四十七名、英兵十五名、その他百七十二名)という記録が残っている。これにたいして、さきにも触れたが、管理する日本軍将兵の数は少なかった。抑留所に配属されていて戦後に被告となった一人は、「終戦を境にして私どもが管理していた抑留者はすべて敵となりました。抑留者たちの中には日本軍

「私の裁判の不正な事」

これまで述べてきたように、捕らえた戦犯容疑者たちにたいして虐待をくり返し、自決にまで追いやるといったような例はイギリス(英印軍)とオランダ(蘭印軍)に最も多い。たとえばオランダのメナド裁判において銃殺刑に処せられた山田秀雄海軍兵曹長(三十七歳)の日記をひろい読みすると、「昭和二十年」九月十六日モロタイ戦争犯罪収容所に入る。第三番目にして海軍の第一番。毎日砂袋をかっいで作業する事(砂袋四十キロ)。サンゴセウを掘る事」

「(昭和二十一年)三月三日大ぎやくたいを受く。頭を三十針縫ふ」とあり、五月にメナド収容所に入っては、

「六月二十二日サリオ蘭軍司令部にてガウ問を受く。左手を折らる。今日に至るもシビレル」

「七月二十六日メナド警察官より調べを受けガウ問を受け顔、尻に傷が着く」

「十月三十日裁判を受けて死刑を言渡さる(一方的裁判である)」

「(昭和二十二年)三月三日死刑となる。メナド第一回(裁判)死刑二名。戦争犯罪者は皆血の出るギャクタイを受ける」

と書きつけている。傷つき血にまみれて処刑されていた様子がよく分かる。

戦犯者たちの遺書は概して「従容として死につく。何も心配するな」という静かな心境を語るものが多いのだが、オランダ裁判では例外も出てくる。たとえば田中寛軍属(元刑務監督官、四十一歳、グロ

ドックに於いて刑死)の絶筆の一部はつぎのようである。

「検事が房前に来て四十八時間内に執行する旨言渡された。尚検事は何か言ひ残す事なきやとの故、左の意味で約三十分毒付いてやつた。1、私の裁判の不正な事。2、私は無罪なる事。3、検事が非良心的な事。4、現在のオランダのやり方は、既に内地に帰つた弁護士他からマツカーサー司令部にも必ず抗議してゐる事。5、前のプタ所長の非人道的なりし事。(中略)6、日本民族はオランダ民族の亡びるまで、此の怨みは忘れない事。7、自分の肉体は滅するとも精神は生きてゐるのだから必ず覚えて居れと云つてやつた。8、君等が永久に忘れる事の出来ない為必ず後悔する時の来る事を信じてゐるのだと云つてやつた。彼曰く、私は小さい人間で何も決定権はない。裁判長がやつたのだから仕方ありませんと。それで、自分は殺される事は問題でないと云つてやつた」

という。怨みをもってすれば怨みが返ってきて、その怨みがまた怨みを生むというくり返しである。

セレベス(スラウエシ)島における裁判のうちマカッサル裁判については前に述べたが、北部セレベスの戦争犯罪に関してはやはりオランダ(蘭印軍)によってメナド市に法廷が持たれた。軍法会議が対象とした領域は北部セレベス地区だけでなく、フィリピンのミンダナオ島とセレベス島のあいだによこたわるセレベス海のサンギー諸島(メナド州)も含まれていた。

考えれば日本軍も遠く南方の島々まで、乏しい人員をくまなく配置したものである。結果的には少ない派遣兵で広い地域と多くの異民族を支配管理しようとしたところに無理や摩擦を生じ、それが「戦争犯罪」となった例が多い。

メナド市の場合、昭和十七年一月十一日に佐世保海軍第二特別陸戦隊によって上陸作戦がおこなわれ、占領後はこの陸戦隊が解隊されて第八警備隊として駐留し、終戦を迎えている。ほかに北セレベス地区海軍特警隊、メナド地区海軍特警隊などがいた。

終戦とともに、この地域にあった陸海軍部隊はメナドに集結したが、戦犯人として最初に逮捕されたのはさきに「虐待の日記」を紹介した山田秀雄海軍兵曹長と終戦時のメナド市長・柳井稔であった。どちらも地域住民やオランダ人に密着した毎日を送っていた人物である。

山田兵曹長は、昭和十七年一月から三月までメナド刑務所警備長をつとめ、昭和十七年七月ごろにはテリン俘虜収容所警備長、さらに昭和十九年七月から昭和二十年八月まではアイルマデリー婦女子抑留所の警備長として勤務していた。俘虜収容所や抑留所の警備長は、どこの地域でも、終戦とともに収容者や抑留者によって真っ先に告発され指弾されたが、山田兵曹長もそのような一人である。

メナド市長となっていた柳井稔はもと南洋拓殖株式会社メナド支店長で、日本軍がメナドに上陸してきてからは第八警備隊司令や幹部たちに協力して、マレー語などを通訳するとともに地元住民たちとのあいだに立って努力し、市長に任ぜられていた。これも、状況が逆転するとまず憎しみの対象の第一人物となった。前にもふれたが、異民族とのあいだにあってコミュニケーションや相互理解をはかった人物や、その役割、才能が状況の逆転とともに憎悪の対象となり裁かれる立場に置かれるというのはBC級裁判にみられる共通した特徴であり、一つの教訓であると同時に大きいテーマを含んでいる。そのような人物の多くは学歴もあり、人間にたいする理解や視野の広さも持ち合わせており、異民族との交流になくはならぬ存在なのだが、動乱のときにはそこにシワ寄せがきてしまうというかたちがある。

この山田兵曹長と柳井稔市長は逮捕されていたんモロタイ（ハルマヘラ島の北）に送られた後、昭和二十一年五月にふたたびメナドに送り返された。昭和二十一年九月二十七日に起訴され、十月三十日に山田兵曹長、翌十月三十一日に柳井市長がそれぞれ死刑を求刑され、十一月十三日にどちらも死刑の判決を受け、執行された。

この裁判を最初として、以後、六名の被告を対象とした第六ケースまではことごとく判決は死刑で

あった。起訴内容は、俘虜・抑留者・地元住民にたいする虐待・致死であり、治安にからむ事件がほとんどである。それらの事実確認は、ほかの地区と同じように、きわめてずさんだった。

第七ケースの被告メナド海軍特警隊・多田外海上等兵曹にいたって初めて死刑をまぬがれ有期刑の判決に終わったが、この裁判で多田被告が「弁護」されることを拒否しているのが興味深い。

弁護には大崎行三大佐や高崎正光中佐があたっていた。どちらも上官・幹部であり、高崎中佐は終戦時、北セレベス地区海軍特警隊の隊長であった。弁護を拒否した理由について多田被告は、

「大崎大佐自身はそのことを意識していないようだったが、それまでの裁判をみるに、結果的には弁護人を通じてこちらの情報がオランダ側に流れ、われわれに不利となっていた。オランダ側は告発・起訴はしたものの事実の裏づけはなく、われわれと接触する弁護人や通訳を通じて情報を得ていることが明白だった。こちらが信頼して弁護人や通訳に事実や真実を話すと、その秘密のことまでオランダ側に流れて、そのうえでむこうは死刑にすべく作戦をたててくる。そこで私はあえて弁護人は要らずと拒否し、起訴事実である「殴打・虐待・致死」のうち、殴打については認めしたが、致死についてはあくまで事実無根であることを主張し続けて死刑をまぬがれた」と、のちに語っている。

弁護しようとするほど、その努力が被告を不利な状況に追いやっていたとすれば皮肉な話である。と同時に、この告白はオランダ側の用意が不十分であつたのだしいものであつたことを物語っている。

メナドの悲劇

ただし、このようなとき、弁護人が意識してオランダ側に協力の態度をとつたらどうなるか。特警隊長という上官責任者であつた高崎中佐にたいする批判は厳しい。メナド裁判の被告であつた一人

は、
「メナドの悲劇の犯人は高崎弁護人だ。彼はわれわれの上官でありながら、部下の取り調べの際にはオランダ側の通訳をつとめ、私たちを詰問し、不利におとしめられた」という。ここでも「弁護」や「通訳」というものの難しさ、あるいは諸刃の剣のような役割がうかびあがってくる。

メナド裁判の起訴件数は四十四件、被告は五十九名。このうち三十一名が死刑を宣告され、のちに特赦減刑された三名をのぞいて二十八名が死刑を執行された。起訴された数と死刑を執行された数の比率を考えると、オランダ裁判のうち最も高く、苛酷な裁判であったことを示している。

対象となった事件を部隊別、部署別に概観すると、メナド海軍特警隊関係が十七件二十三名(有罪十一名のうち死刑八名、無罪二名)、メナド海軍第八警備隊が五件九名(有罪九名のうち死刑三名)、メナド海軍民政部は三件三名(有罪三名のうち死刑一名)、第五野戦憲兵隊北セレス地区憲兵隊が十六件二十名(有罪二十名のうち死刑十五名)、サンギー諸島守備独立歩兵二二六大隊が二件三名(全員有罪)、在メナドの商社関係が一件一名(有罪)などとなっている。治安を取り締まりに直接関与していた特警隊関係が最も多いのは、考えられる当然の結果だったろうか。

メナド占領の際に大きい役割を果たし、「赫々たる武勲」をたたえられたメナド海軍空挺隊の指揮官・堀内豊秋大佐にたいしてもオランダ側は追及することを忘れていなかった。すでに帰国していた大佐を捕らえて菓嶋ブリズンに収容、昭和二十二年二月十九日にメナドに移送して、

「昭和十七年一月から四月までのあいだ、部下が組織的暴虐行為をなしていること、もしくはなすであろうことを知り、または少なくともそれを当然推測したに違いないのに、部下の戦争犯罪の遂行を容認した」として、昭和二十三年五月十二日に死刑を判決し、九月十五日に執行した。もちろん堀内大佐はあ

ずかり知らぬ事件であり、死刑に追いやるための起訴といってもよかった。

メナド裁判の最後の法廷はそれまで裁判してきた被告たちの責任者を裁くものであった。被告は第八警備隊司令兼メナド州知事の浜中匡甫海軍少将、さきにもあげた第八警備隊の副長にして北セレス地区海軍特警隊長であった高崎正光中佐、メナド地区海軍特警隊長だった湯村文男大尉、一時期の北セレス地区海軍特警隊長・片桐為精大尉の四名である。有罪や死刑を言い渡されて収容されている者たちがとりわけ関心を抱いたのは、オランダ側に「協力」した高崎中佐にたいする判決であった。

判決は昭和二十三年五月二十八日にくだった。浜中少将は死刑、湯村大尉も死刑、片桐大尉は無期懲役。これにたいして、高崎中佐はなんと無罪であった。部下を被告とした件数や死刑の判決が最も多かった特警隊の責任者が無罪とは異様な結果というしかなく、逆に言えば、高崎中佐はやはり協力者であったか、ということになる。このような例は、BC級裁判全般をみてもきわめてめずらしい。

死刑を執行(昭和二十三年十月十五日)された浜中少将(五十五歳)は、

「オランダ側も小生に対する裁判には非理非法の幾多ありし事は充分承知し、又小生知事当時の被統治者たりし原住民の有識階級も之を認め、殊にキリスト教団長たりしウエナス氏が同団を代表して助命運動までなし、更に自らバタバヤ迄行き検事総長に会見し運動せられしほどの事実あるにもかかはらず、オランダ側が指揮官たりし故を以て全責任を負はしむると言ふ以上は致し方なく、小生としては深く全責任を負つて逝くべく、五十の坂を半ば越したる今日、オランダ側が欲しければ呉れてやつても惜しくないこの首、もうこれ以上文句も言はず呉れてやるべく候」と書いて刑死した。

「天地の神ぞ知るらむ丈夫の国につくせる赤き心は」

「責めとりて逝く身は清きメナド原そよ吹く風に胸ぞ涼しき」という歌を遺している。

浜中少将も湯村大尉も海軍兵学校出身であった。同日に刑を執行された湯村大尉(三十歳)も覚悟しており、

「今更『オランダ』をうらみ又誰をうらむといふ気持はありません。すべては私一人の胸中に秘めておきます。それで宜しいのです。(中略)特警隊の件は私は知らなかつたのです。知つて居たらあんなことはなかつたでせう。併し知らない為に幾多の部下が重刑を受けた事は、知らなかつたとは云へ私は私の部下に対し大きな責任があると思ひます。又同時に原住民の犠牲者に対しても。併し私個人としては原住民に対し何時も良く行動し彼等の幸福を念じて働いて居りました。其れ故原住民は私に好意を持ち私に対しては何等告訴して居りません。原住民より同情があり判決後色々助命運動をして呉れた人もあります」

と両親に書き、静かに死んでいった。

無罪となつた高崎中佐が裁判終了とともに帰国したのはいうまでもない。

親オランダの風土

セレベス島の東方、ニューギニアとのあいだにはマルク海、バンドラ海がよこたわっており、ブル島、アンボン島、セラム島と連なっている。このうちアンボン島のアンボンでも二年間にわたって七十九名(うち死刑判決十五名、後に一名は無期懲役に減刑)がオランダによって裁かれた。

裁判の対象となつたのは主として陸軍であり、とりわけ憲兵が多かつた。

このアンボン地区の裁判はアンボンという土地の歴史や民心の事を知っていないとよく理解できない。いわゆるアンボイナ地区出身のアンボン人はインドネシア民族の中でも最も精悍勇猛であり、

勤勉にして、しかもキリスト教信者が多いことで知られている。この優れた資質にたいして自然環境は産物資源の少ない島々であり、交通の条件も恵まれてはいえず、彼らの能力が十分に発揮されているとはいえなかつた。これを重用したのがオランダであり、オランダがインドネシアを統治した三百余年間、最も起用され、政治・軍事にわたって幹部となる者も多く、旧蘭領印度の広い地域の各地に活躍し、統治に貢献した人種であつた。言い換えれば、インドネシアの中で最もオランダに尽くした親オランダ派の人たちが住んでいた地域ということになる。

終戦後、オランダが復帰するとの報に、独立を志していた全インドネシアが立ち上つてオランダ軍の上陸を阻止して戦闘を開始したのたいし、この地方は違つていた。アンボン人のみはオランダ軍をもろ手をあげて歓迎し、そればかりかオランダ軍が編制した新しい蘭印軍に参加し、訓練に従つた。

オランダ側としては戦争のため疲弊した本国を復興させるため、本国軍隊を蘭領印度に大量に投入することができないという事情があり、これらのアンボン人による蘭印軍を各地のインドネシア独立闘争の鎮圧に派遣した。と同時に、これら協力してくれるアンボン人の人心を掌握し、意に添おうという姿勢があり、このことがアンボン地区における日本人戦犯裁判に大きく影響した。

事件や被害はほとんど南モルッケン州に住むアンボン人によって告発、告訴されたものであつた。日本軍が上陸した当時、蘭印政府の恩給で暮らしていた者も多く、オランダ統治時代にはどちらかというに裕福な土地であつたのに、日本軍に占領されて以来、悲惨な生活になつたと恨みを抱く者が多かつた。

日本軍によって起用されたアンボン人は少なく、多くは周辺の島々に引き揚げて暮らしていたが、彼らもオランダ軍の上陸とともにアンボン島に帰り、オランダに協力を始めた。

もっとも、この地域にも最初に進駐してきたのは連合軍のうちオーストラリア軍であり、日本人

戦犯容疑者については当初、昭和二十年九月からオーストラリア軍によって検挙が始まっている。オランダ側も十九名の逮捕を要求してきて、最初はオーストラリア軍関係の容疑者とオランダ軍関係の容疑者とがともに収容される状況であった。

昭和二十一年二月、オーストラリア軍がモロタイ島に移動するとともに、これらの人たちはオランダ軍に引き渡され、アンボンの刑務所に収容された。オランダ軍はさらに新たに摘発し、日本軍が復員、引き揚げを始める直前の昭和二十一年五月中旬には、その数二百名にものぼっていた。

やがてこれらの戦犯容疑者たちは海岸沿いにある旧オランダの城郭の一部に運ばれてテント生活を始める。この収容所の所長は、戦時中に俘虜として日本本国に抑留され九州の工場で働かされたという経歴の持ち主だったが、テント生活の開始に際して、

「おまえたちは今日かぎり人間としての取り扱いはいはしない。人間としての待遇を要求することも期待することも許さん」

と宣言したという。監視役はアンボン人からなる現地人部隊の兵士たちであった。以後はほかの各地の戦犯収容所にもましてオランダ兵やアンボン人による激しい虐待・酷使が続き、食糧もろくに与えられず、昭和二十一年の末には収容された者たちのあいだで反乱計画が真剣に考えられた。

裁判が始まったのは昭和二十一年十二月五日である。法廷にはアンボンのオランダ軍司令部法務部の一室が用いられた。

被告は第二〇海軍警備隊に所属していた福沢博親上等兵曹で、起訴事実は、

「昭和二十年五月ごろ、南モルッケン州サバルア島（アンボン島の東にある小島）において現地民一人を取り調べ中に殴打・虐待し、死に至らしめた」という内容であった。

裁判長は現役軍人のダムメ大尉（のちストックカー少佐）現職判事にかわった。陪席がアンボン人のス

ベルツ大尉（予備役）。検察官はファン・デル・フェーンという。裁判長のダムメ大尉は戦時中、日本軍の俘虜となっていた人物だった。

日本側の弁護についてはジャワ軍政監部の平賀健太司政官と第二南遣艦隊司令部付の穂積重敏主計大尉がジャワから十一月十九日にアンボンに着いて担当した。この二人は当初の八事件の弁護人をつとめたのち、昭和二十二年三月には本国の第一復員局から派遣された岩瀬良尾、山岸祐一の両弁護人と交替している。

この第一回裁判は被告側が「致死」の事実を否認したまま進められたが、昭和二十一年十二月二十八日、死刑を宣告された。

その後は憲兵を被告とした裁判が続いた。憲兵は各地に小人数で派遣されていたため、その土地の治安維持と住民の信頼を得る役割を精一杯に果たそうとした。いっぽう接近してくる敵の潜水艦と住民通報者との謀略行為も摘発しなければならず、少ない人数で権力を行使しているうちに各地で摩擦を生じ、深い恨みを持った。スパイ容疑で捕らえた地元民にたいして厳しく取り調べることも多く、戦後はそれらの事件がみな戦争犯罪としてとりあげられた。

二年間におこなわれた四十九件の裁判の内訳をみると、憲兵隊関係が二十九件で被告は五十四名（有罪五十名のうち死刑七名、無罪四名）、陸軍の司令部および一般部隊の関係が八件十名（有罪八名のうち死刑一名、無罪二名）、陸軍情報機関の関係が三件三名（全員有罪）、飛行場設営隊関係が一件四名（全員有罪のうち死刑二名）となっており、海軍では、海軍特警隊関係一件一名（有罪）、海軍警備隊関係六件六名（全員有罪のうち死刑四名）、海軍民政部関係一件一名（有罪）である。

飛行場設営隊事件というのは、

「昭和十九年三月一日より昭和二十年五月十五日までの期間、南モルッケン州ラト島において、飛行場建設を目的として、インドネシア人労務者に過重の労働を課し、食糧・医薬を十分に支給せず、

病人をも労役に服せしめ、かつ約三十人の回復の見込みなき病人を海岸に運び、十分な食糧を補給せず、看病せず、結局は二百八十人の労務者のうち百八十名を死亡せしめた」

という起訴事実であった。被告となった岩本三枝陸軍大尉は全般的な責任を負わされ、石田聡夫陸軍伍長は「病人遺棄」の罪名で、いずれも死刑を宣せられた。

陸軍情報関係というのはアンボン島の北東にあるセラム島への部隊進駐を円滑にするため、セラム島の現地民の反乱謀略行為、スパイ行為などを探索し、治安維持をはかるために編制された「星機関」の関係者たちのことをさしている。必要にせまられて星機関がつくられたのは昭和十九年六月であった。機関長には八ヶ月前にアンボン第一九軍司令部情報班付となった鈴木元助陸軍中尉が任せられ、一同はセラム島に渡った。そこで「処刑」した事件がのちに戦争犯罪として裁かれることになった。

一つは、機関員・山本少尉が、武器をもって反乱したパーレンツというインドネシア現地民の軍警一人をリリンという場所で銃殺刑に処したというもの。いま一つは昭和十九年九月ごろ、「ニューギニア方面から後退してきた日本人たちにたいして襲撃・略奪をおこなった」

という情報にもとづいて逮捕した蘭印軍の元メナド兵スカルウイク、村長タルマヤラ、および教員兼宣教師マイロアの三名にたいする「処刑」である。当時、日本軍側が調べてみるとこの三名は、山岳地域で組織されていた反抗集団の一味で、セラム島が日本占領の地となった後も帰順せず、逃亡をくわだてた者たちであった。鈴木中尉たちは、彼ら三名を銃殺した。

これらの事件についての裁判は昭和二十二年一月三日に開かれている。オランダ側は告訴状の中で、山本少尉が殺害したパーレンツは志願して軍警となった人物で、ラサアタ地区において民兵十数名を率いて小隊長の任務についていた者だ、これを処刑するとはなにごとか、と追及していた。被告側はこれにたいして、

「当時は日本占領時であり、彼らもまた日本軍紀のもとにあつたのであり、処刑はいわば日本陸軍の

内部の事件である。戦争犯罪の範囲に入るべきものではない。オランダの軍法会議はこの訴因で被告人を裁判する権限はない」

と主張したが、オランダ側は、

「戦争犯罪ではないかもしれない。しかし職権の乱用による謀殺であり、普通刑法上の犯罪である」として、被告人たちの抗弁を却下した。三人のインドネシア人の処刑に關しても、

「日本の裁判所による適法の裁判がおこなわれていないし、まさしく戦争犯罪である」とし、被告たち全員を無期懲役とした。

アンボンの監視

裁判するのがオランダであり裁判地がアンボンというので、被告たちのあいだにも、何を言っても無駄というあきらめの空気がただよっていたが、その間にも監視兵による虐待は続いていた。陸軍の司令部関係および一般部隊の関係者で死刑となつたのは台湾歩兵第二連隊長の田中透大佐（のち少将）である。

田中少将（五十六歳）は妻子に宛た遺書の中で書いている。

「戦争中、チモールの東に在るスルマタ島にて、土民が叛乱を起し、我兵を殺害せり。依つて、父は討伐隊を送りて、全犯人一千名中より、主なる者約百名を捕へ、死刑とせり。当時我軍律會議は、アンボンに在りて、チモールより一千料キリ以上を隔て、其間敵飛行機、潜水艦の危険甚大にして、犯人を送る方法なく、父は司令官として、緊急自衛権の発動により、此処置を為せり。之は国際公法に違反せざる所なり。然るに和蘭軍は、見解の相違により、自衛権を認めず。昭和二十三年一月二十四日、父に死刑を宣告せり。事情右の如き故、父は心中何等やましき処なく、俯仰全く天地に愧ぢず。唯戦争に負けたる故、此運命に遭遇せり、従つて、全く名譽の戦死と同様なり。御身等二人は、絶対に父

の正義を信じ、他人に対して臆する所勿れ。父は御身等二人さへ信じ呉るれば、此世に何等思ひ残す所なし」

のちの世となつたいま調べてみても、事實はそのとおりである。

田中大佐が率いる台湾歩兵第二連隊は、昭和十七年十二月中旬にポルトガル領ティモール島の東部ラウランに進駐し、ティモール島の北から東に点在する小スンダ列島（ウェタル、キサル、ロマン、レチ、モア、ラコル、ルアン、スルマタールスルナタ、ダマルの各小島）の守備と治安維持を命じられた。昭和十九年四月以降、台湾歩兵第二連隊長はこれらの地区の防衛司令官となり第四八師団長に直屬することになる。当時、第四八師団長の土橋勇逸中將はティモール島の西端クーバンにあったので、ティモール島から東部の防衛地区では田中大佐が日本軍最高指揮官であり、緊急非常の際のいっさいの権限を有していた。

事件がおきたのは昭和十九年八月三十日ごろである。スルマタ（スルナタ）島に配置していた日本軍の対空監視哨と派遣憲兵たち総計十名が一部の島民たちの反乱により全員殺害された。遺書にもあるとおり、田中大佐は防衛司令官として九月二十五日、討伐隊をスルマタ島に送り、一千名にものぼる島民の中から首謀者以下関係者百名を十月上旬に逮捕する。処刑の命令は討伐隊長に電報をもって伝え、討伐隊は彼らを十月十五日と十月二十二日の二回にわたって処刑した。

遺書には書かれていないが、もう一つの処刑命令もあった。それはレチ島で発覚した反乱計画事件で、同じ島内のラジヤ村村長がモア島の守備隊長・小原中尉に密告してきたものであった。それによると、島内のトトケイ村村長が敵軍（連合国軍）と呼応して、敵軍が上陸してきた際には反乱をおこすべく準備計画しているという。現地民のあいだではしばしば日本軍を利用して私怨をはらすとする例があるのでこの情報についても慎重に調査したが、やはり事実であった。

トトケイ村村長を招いて取り調べたところ、すべてを自白した。家族や腹心の部下、村民の一部とも用意していたという。田中大佐は司令官として、トトケイ村村長のみ処刑するよう小原中尉に命じた。

これら二つの命令について、法廷では、なぜ裁判にかけなかったのかということが追及され、田中少将（当時）は遺書にあるごとく緊急の場合の自衛権を主張した。

「たしかに軍律会議に送致することが本則ではあるが」

と少将は言っている。

「軍法会議は第一九軍司令部所在地アンボンにあり、（百名もの）輸送の便がなかった」

「その後の治安確保のため厳罰に処し、将来、この種の犯罪の発生を未然に防止する必要がある」

「どちらの事件も、たとえ軍律会議に送ることができても死罪であることは確実だったろう」

「戦況はいよいよ逼迫してきており、彼ら反乱集団をおさえ、警備を厳にするためにさき得る兵力がなかった」

「以上、国際法に照らし合わせても緊急自衛権の行使として認められるはずである」と。

しかしオランダ側はいっさい認めなかった。田中少将は、

「日の本の民は逞し百難を乗越えて立つ時ぞ待たるる」

「阿佐ヶ谷の日の暖き我庵を暇に画き文字思ひぬ」

と詠って、昭和二十三年四月七日に刑を執行されている。

アンボン裁判は昭和二十三年十二月二十日をもって終わった。最後の被告は第二四海軍特別根拠地隊のトアル地区警備隊長・門松尚良中尉で、すでに復員していたところを逮捕され、昭和二十三年八月十日に内地から送られてきていた。起訴事實は、

「南モルッケン州南島分州ケイ郡トアルにおいて、昭和十七年八月四日ごろ、職権を乱用して反日行

動の嫌疑の名のもとに宣教師フライスおよび八名の現地民兵を正式の裁判に付せずして処刑殺害した」

というもので死刑を宣告された。

結局アンボン裁判でとりあげられた事件・被告の総計は四十九件七十九名であったが、死刑判決十五名（うち一名は無期懲役に減刑）、無期懲役七名、有期刑五十一名、無罪六名という結果になっている。

アンボン裁判は事件や起訴の内容に関して「百八十名の労務者死亡」とか「百名の島民を処刑」など、死者の人数が多いことも一つの特徴であった。

「アンボンではこのような事件が裁かれているようだ」

という噂はそれらの人数にからめて各地のオランダ裁判地にとび、そのことがまた監視兵たちをかぶらせ日本人収容者たちへの虐待につながった。さきの田中少将の場合、クীবアンで裁かれていれば結果は違ったのではないかという声もあったが、おそらく同じであったろう。

ティモール島の西端クীবアン市にも法廷が置かれ、こちらはティモール島の北から西のジャワ島に点々と連なる小スンダ列島（スンバワ、スンバ、フローレス、ロンブレン、ウエタル、アロール、サウの各小島）とティモール島全島の領域を対象とした戦犯裁判がすすんでいた。日本人容疑者はいつとき百五十人にもこのぼり、こちらも未決のときから虐待が続いていた。

ティモール憲兵隊のE准尉は殴打されながら取り調べを受け、部屋から出てきたときには死体となっていた。さすがに日本人軍医が死体解剖に立ち会うという事態となったが、身体には多数の皮下出血がみられ、明らかに虐待・致死であることをあらわしていたという。にもかかわらず、その取調官が裁かれたり左遷させられたりするというようなことはなかった。

「収容所ではアンボン人、メナド人などの監視兵が、われわれ日本人を虐待することで優越感をおぼ

えているようでした。アンボンで大きい事件があったのを知ってからというもの、とりわけ虐待ははげしくなりました。思い知らせてやるといったふうで、アンボン人の恨みが爆発した感じでした」と当時収容されていた日本人の一人は語っている。

アンボン裁判の影響おそるべしといおうか。アンボン人は各地の戦犯収容所の監視兵としても重用されていたのである。

その他の資料

- ◎ムルデカへの道
元海軍将校が綴ったインドネシア独立秘話
- ◎徹底検証 東京裁判50周年
920人はなぜ死刑になったのか
- ◎第2方面軍独立混成第57旅団
独立歩兵第372大隊歴史概要
- ◎終戦後北部セレベス島付近全日本人終結地地図
- ◎ミナハサ地図

『ムルデカへの道』

元海軍将校が綴ったインドネシア独立秘話

北出大太 著

評伝社（昭和61年3月5日）

【本文より一部抜粋】

フィリピンのダバオ市の対岸に位置するセレベス島の、ミナハサ半島の先端に、メナドという港町がある。

このメナドの背後に迫る千メートルにおよぶ山岳に登ると、視界は突然に広々と開け、遠くかすみがかたなびく大高原が出現する。

この高原はトンダノと呼ばれ、気候は常に涼しく、見渡すかぎりに赤や、黄色や、紫の野花が撩乱と咲き乱れ、目にしみるほどに美しい眺めを見せる。

トンダノ高原に登りついた地点から、チーク材造りの民家が延々と並び、この中ほどから緑と花の平野に向かって、滑走路が一本伸びている。

横列する民家の左手に、澄んだ水を満々とたたえる湖水が望まれ、その大きさは、エンジン四台を装備した大型飛行艇が楽々と着水できるほどである。日本とはケタの違うスケールの、まさに大無辺というべき大高原である。

昭和十七年一月十一日。まだ朝も早く、人々がようやく眠りから醒めた頃、日本海軍航空部隊の九十六式双発攻撃機四十八機が、銀翼をつらねトンダノ大高原の上空に姿を現した。

この瞬間、空いっぱいには鮮やかな純白の花が開き、さわやかな朝風の中へ舞い降りた。

民族に世紀の夜明けをもたらす、海軍落下傘部隊の降下である。

時を同じくして、メナドの小港には、海軍陸戦隊が上陸を敢行し、オランダ軍を空と海辺から挟撃した。この急襲に、その日のうちにオランダ軍守備隊は壊滅し、山谷にこだまする勝鬨の聲が上がった。

こうしてミナハサ半島を制圧した日本軍は、現地の人々の笑顔によって迎えられた。彼らは、とくにミナハサ族と呼ばれ、色白で、容姿は端麗であった。だが熱烈な愛国者である。

落下傘部隊の隊長堀内海軍中佐は、トンダノ高原の名家であるシガラキ家に宿を頼み、ここから部下将兵に対して命令を伝達した。

それは——住民には温情をもって接すること。軍規風紀を厳重にいましめて行動すること——というものであった。

翌日、栗毛の馬にまたがった現地の青年が、さっそうと大高原に姿を見せてきた。

彼の背後の家並みには、日輪を描く日の丸が翻っている。この青年はセレベス島のマカッサル市に住むラトランギへ連絡する使命を帯びていた。

トンダノ高原からマカッサル市までの行程は、日本で言えば、東京・神戸の距離に相当する。

高原は朝露に濡れた緑草が見渡すかぎりに鮮やかなグリーンを敷き伸べ、色とりどりに咲き誇る野花とともに、すばらしくも美しい景観を描いていた。

行手も遥かな高原のかなたには、日本人がメナド富士と呼ぶ山岳が雲上を突き、輝く暁の光りに映えていた。

「はい。これも目で見たまま、耳で聞いたままをお話します。落下傘部隊の隊長は堀内中佐と言う方ですが、占領後ただちに、軍規風紀を厳重に戒しめ、住民には危害が及ばぬよう命令し、温かい配慮が行なわれたと聞きます」

「うむ、なるほど……」

「堀内中佐は、トンダノのシガラキ家に宿をとり、その礼として日本の掛軸というものに自筆を大書して、戦時中のため、よき贈り物ではないが、と頭を低くして差し出したと伝えられております」

ラトランギは、サリオ青年の話に感激した様子で、ハタと膝をたたいた。

「ゆかしい。まさに義に厚い武人じゃ……サリオ殿、ラトランギは日本と共存共栄の道をおゆまんと思う。この決意をムナジ殿に」と輝く目を爺に向けた。



徹底検証 東京裁判50周年 920人はなぜ死刑になったのか

BC級戦犯を生んだのは、激戦地ばかりではない。戦闘がほとんどなかった捕虜や住民への虐待事件が数多く問われている。それはなぜか――。

田中 宏巳 防衛大学校教授

写真＝モンテンパ(比)の戦犯墓地

東京・市ヶ谷の極東国際軍事法廷において審理されたA級戦犯裁判(東京裁判)は、「国際条約・協定に違反し、戦争を計画・準備し開始した責任」を問うものだった。このため、一九二八(昭和三)年の張作霖爆殺事件以後の日本の政治・軍事指導者と、彼らが指導したとされる全事件、言わば二八年以来日本が歩んだ歴史そのものが被告席に立たされることになった。裁判は公開され、一度は国家の指導者と仰いだ人物たちが裁かれるのを同時代の国民ならば無関心ではいらなかったし、無視できなかった。

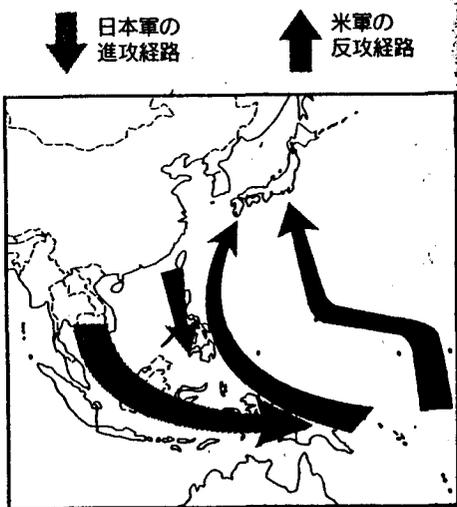
これに対し、BC級戦犯は戦争中の「戦争法規及び慣例に違反する行為」を問う罪で起訴された。日本と戦った連

合国七か国による裁判は、横浜のほか海外四十八か所の法廷で開かれ、被告の親族には刑の執行後に判決内容を知らされた例が多い。国民がほとんど知らない間に裁判・処刑が終わっていた。だが、BC級戦犯裁判の方が戦争の本質を映し出し、政治、経済、文化など諸要因を複合して行われた近代戦争の実態を浮き彫りにしているのである。

戦闘の推移とズレるBC級戦犯の分布
太平洋戦争の特徴は、日本が戦争目的とした「大東亜共栄圏」の建設と戦闘の趨勢とが、アメリカ軍の予想外の反攻作戦によって、時間の経過とともに結びつかなくなった

ことにある。図(日本軍の進攻・米軍の反攻経路)の日本軍が進攻した地域が、概ね日本が構想した「大東亜共栄圏」である。これに対して米軍は、海軍が中部太平洋を一気に北上して日本本土に迫るいわゆる飛び石作戦を、またマッカーサー元帥率いる米国及び連合国陸軍がニューギニア東岸からフィリピン、沖縄経由で日本本土を目指す作戦を取った。このうち、フィリピン作戦はマッカーサーの個人的願望によるものとして、今日もその是非について議論が絶えない。もしフィリピン作戦が実施されなかったら、米軍は「大東亜共栄圏」をかすめもしないで、日本の戦争目的と無縁の戦争をすることができたはずだからである。

日本軍の進攻経路と米軍の反攻経路



そうでないところに区分され、各地に展開した日本軍は全滅に近い大敗北を喫したところと、時々空爆を受けるぐらいでひたすら食べることに汲々とした地域に分かれた。戦後日本人の戦争観、安全保障観が二分した一因は、こうした戦争体験の違いにもあると考えられる。

このような太平洋戦争の特徴と各国が行ったBC級戦犯裁判を重ね合わせると、戦闘した地域より、むしろ戦闘をしなかった地域で戦犯者数が多く、死刑判決にも同様の傾向が明確になる。「旧日本軍戦犯の裁判結果」の表で国別の起訴人数や死刑判決数を比較しながら、こうしたBC級戦犯の分布を作り出した背景を分析してみよう。



たなか・ひろみ 一九四三年、長野県生まれ。早稲田大学文学部卒、同大学院修了。明治大学文学部講師、防衛大学校助手、講師、助教を経て教授。専攻はアジア近代史。日本海軍の研究者として著名。主な著書に、「占領接収旧陸海軍資料総目録」など。

920人はなぜ死刑になったのか

旧日本軍戦犯の裁判結果

	A級戦犯	B C級戦犯							合計
	連合国軍	米 国	英 国	オーストラリア	オランダ	フランス	中国国民政府	フィリピン	
起訴人数	28	1,453	978	949	1,038	230	883	169	5,700
死 刑	7 (28%)	140 (12%)	223 (29%)	153 (24%)	226 (24%)	26 (17%)	149 (30%)	17 (13%)	934 (21%)
終身・有期刑	18	1,033	556	493	733	129	355	114	3,413
無 罪	0	188	116	267	55	31	350	11	1,018
その他	3	89	83	36	14	1	29	27	279

- 数字(人数)は法務省が収集資料をもとに積算した暫定数
- 死刑判決実数は合計1,288人(米255人、英281人、豪225人、蘭236人、仏63人、中149人、比79人)。表中の「死刑」(934人)は判決後の減刑・欠席裁判分を引いた数で、このうち実際に絞首または銃殺された人数は計920人
- かっこ内%は「有罪数に占める死刑比率」
- 有罪判決を受けた戦犯のうち少なくとも87人が刑執行以外の原因で獄中死している
- 「その他」は判決前死亡、公訴棄却など

中国、フィリピン、マレーなどでは、捕虜収容所での虐待のほか、他の地域にない現地民の虐待問題があった。戦争の推移と占領地の状況、B C級戦犯に多い捕虜・住民虐待の三つが相互に関連しているようだ。

激戦地での捕虜処刑

米軍が中部太平洋を北上する飛び石作戦の中で起きた日本軍将兵の戦争犯罪行為に対し、米国はグアム、クェゼリン、横浜の三法廷で裁いた。日本軍が逮捕した米軍機搭乗兵を即決で処刑した案件が多かったのが三法廷の共通点である。戦局の後半から、主戦場あるいは戦闘正面になったギルバート諸島、マーシャル諸島、マリアナ諸島では、島々を防衛する日本軍守備隊、これを援護する海軍艦艇と、上陸作戦を敢行する米海兵隊、援護の米機動部隊との間で激戦が展開された。日本軍に銃爆撃を繰り返す米軍艦載機が日本軍の対空砲火によって撃墜され、搭乗員が捕虜になるケースも多かった。敵の上陸直前・直後の戦闘中の極度に緊張した精神状態にあった現場指揮官は、捕虜を後方に送る手段もなく、自分たちに銃弾や爆弾を浴びせ、多数の部下を死傷させた敵機に対する激しい憎悪も手伝って、その場で捕虜の刺殺や斬首を命令し実行させたのだ。

米国のB C級戦犯裁判は、このような戦犯容疑者に苛酷

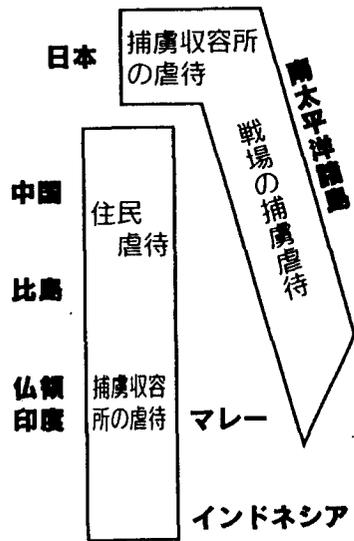
読者は、イギリス、フランス、オランダなどあまり戦った記憶がない国から厳しい追及を受けたと感じるかもしれない。日米両軍が激突した海上戦と、空中戦によって戦争の勝敗が決せられたと考え、国内ではB 29の無差別爆撃や原爆投下で打ちのめされて、米国一國にやられた印象が強いからだ。長い間戦った中国戦線でB C級戦犯が

多いのは別として、四二年二月の日本軍の蘭印進軍作戦でわずか一か月で降伏したオランダ。日本軍が南北仏印(ヴェトナム)を事実上開戦前に占領し、戦闘がなかったフランスの戦犯裁判で、なぜ多数の死刑判決が出たのか。インパールの激戦を思い出させる英国、ニューギニアで死闘を繰り返した豪州は多数の有罪判決を出しているが、なぜ米國より死刑数が多いのだろうか。戦闘回数や規模とB C級戦犯の数との間には、相関性がないのである。各国の起訴理由と戦犯の地域分布を分析すると、その関連がよくわかる。米軍管轄の法廷で多かつた起訴理由は、戦場での捕虜虐待と捕虜収容所での虐待であり、英蘭豪仏の法廷で多かつたのは、住民虐待と捕虜収容所での虐待である。つまり、B C級戦犯の起訴理由で多いのは、前線に位置して戦闘があったところは戦場の捕虜虐待、戦闘が少なく比較的平穏だったところは、住民虐待と捕虜収容所での虐待という関係だった。

捕虜虐待などの事件が発生した場所を地図に落としみると、67ページのような概念図ができて上がる。日本国内の捕虜収容所には、各地で捕虜になった三万五千〜四万人にのぼる連合軍将兵が送られ、重労働と栄養失調に代表される虐待問題が追及された。南太平洋諸島は日米両軍の激戦地で、戦場での捕虜の取り扱いが起訴につながっている。

だった。米パイロット三人を処刑した日本軍人四十六人のうち四十一人に死刑判決を下した石垣島事件、米パイロット五人を処刑した日本軍人に対し六人が死刑判決、終身刑二人、二十年禁固刑二人というミレ島事件、米パイロット三人処刑に対し日本軍人三人が死刑というヤルト島事件判決など、報復裁判の色合いが顕著だった。

事件と発生場所の概念図



一方、日本軍の占領とともに、大東亜共栄圏建設の名目で日本語学習などの日本化政策が実行された。抵抗なく受け入れられた地域、根強い抵抗があった地域など一様ではなく、百一二十年もの期間をかけて定着した西欧文化を一気に払拭するのは、武力という強制手段をもってしても容易

ではなかった。日本文化の強制以上に日本軍が反発を買った原因は、食糧などを現地調達したことである。食糧が余っているならともかく、東南アジアもやっと食べられるのが実情だった。日本軍が流通過程の途中で食糧を差し押さえた時、品薄による猛烈なインフレをもたらした。

太平洋戦争開戦まで欧米の植民地だったフィリピン、仏領インドシナ、英領マラヤ、蘭領東インド(インドネシア)では、「植民地農業」が定着していた。広大なプランテーションでは、安い現地人労働力を利用して、換金率が高く収益性が大きい一種類の作物——例えばサトウキビ、バナナ、ココナツなど——が栽培された。これをモノカルチャー農業(単一栽培農業)と呼ぶ。米国の植民地だったフィリピンでは、サトウキビのモノカルチャーが成立し、その他の食糧や日常必需品は米国から低関税で輸入し、需要を満たす構造になっていた。日本軍の占領とともに米国からの輸入が途絶し、生活必需品不足とインフレが発生したのだ。

反発を買った食糧調達と猛インフレ

こうした現象は、モノカルチャー農業が定着していたマレー半島、インドネシアなどでも同様であった。島嶼社会だった東南アジアでは、古くから島々の米や野菜等の特産品を互いに交換する域内交易が発達し、東南アジアを一つ

とする独立準備委員会を設置し、四三年十月フィリピン共和国の独立となった。独立すれば反日活動が和らぐのではないか、という期待を込めて実行されたもので、半ば諦めにも似た解決策だったと言われる。

英領マラヤ・シンガポールは第二十五軍によって占領され、マレー半島全域及びボルネオを含む地域が、同軍軍政部(のち軍政監部)の管轄下に置かれた。軍港シンガポールの確保と半島の錫、ゴム、ボーキサイトなどの重要軍事物資の獲得に力を入れた。戦局の逼迫化に伴い、海軍が燃費の悪い戦艦群をボルネオの石油が利用できる海域に配置したように、急速にボルネオ石油への依存度が高まった。だが、マレー人、華僑、インド人の対立、イスラム教とキリスト教の相克、マレー共産党のゲリラ活動といった難問があり、シンガポール華僑虐殺事件はじめ現地民やゲリラに対する日本軍の治安活動が活発化した。

インドネシアでは陸軍第十六軍、同二十五軍、海軍南西艦隊の三分割統治が行われ、広大な地域ながら比較的紛争が少なかった。地方行政組織もよく整備され、諮問機関である中央参議院が設置され、現地民の政治参加に道が開かれた。それでも治安対策を重視し、日本の警察司法制度が導入され、日本と同じ警防団の編成、隣組の設置と常会の開催が指導された。さらに日本軍守備隊を補う兵補制度の

の自給自足圏とする経済が発展してきた。欧米列強の植民地支配によって生活必需品を宗主国からの輸入に頼るようになり、域内交易は昔日の勢いを失ったが、それでもまだ生活必需品の不可欠な流通手段だった。

しかし、日本軍の進攻によって宗主国との貿易が途絶し、戦闘とこれに伴う社会秩序の混乱によって域内交易も大きな打撃を受けた。各地に米不足や日用品不足が生じ、これに現地自活をはかる日本軍の存在がマイナス要因となり、最後まで流通機能を回復できなかった。日本軍の進攻に伴う経済構造の激変とインフレに苦しむ現地民が、日本軍を歓迎することはなかったのである。

日本軍は占領地に軍政(ところによっては民政)をしいたが、武力占領下であっても地域の実情に即した制度を採用せざるを得ない。フィリピンでは、第十四軍軍政部(のち軍政監部)による軍政が施行され、中央から地方の行政組織を経て末端の各町村に至るまで、中央の指示が貫徹する体制の確立につとめた。特に治安維持には力を入れ、国家警察機構の整備と住民の自警組織である「保甲制度」の創設だけでなく、新フィリピン建設のための思想団体——新比島奉仕団(カリバピ)——を結成させた。

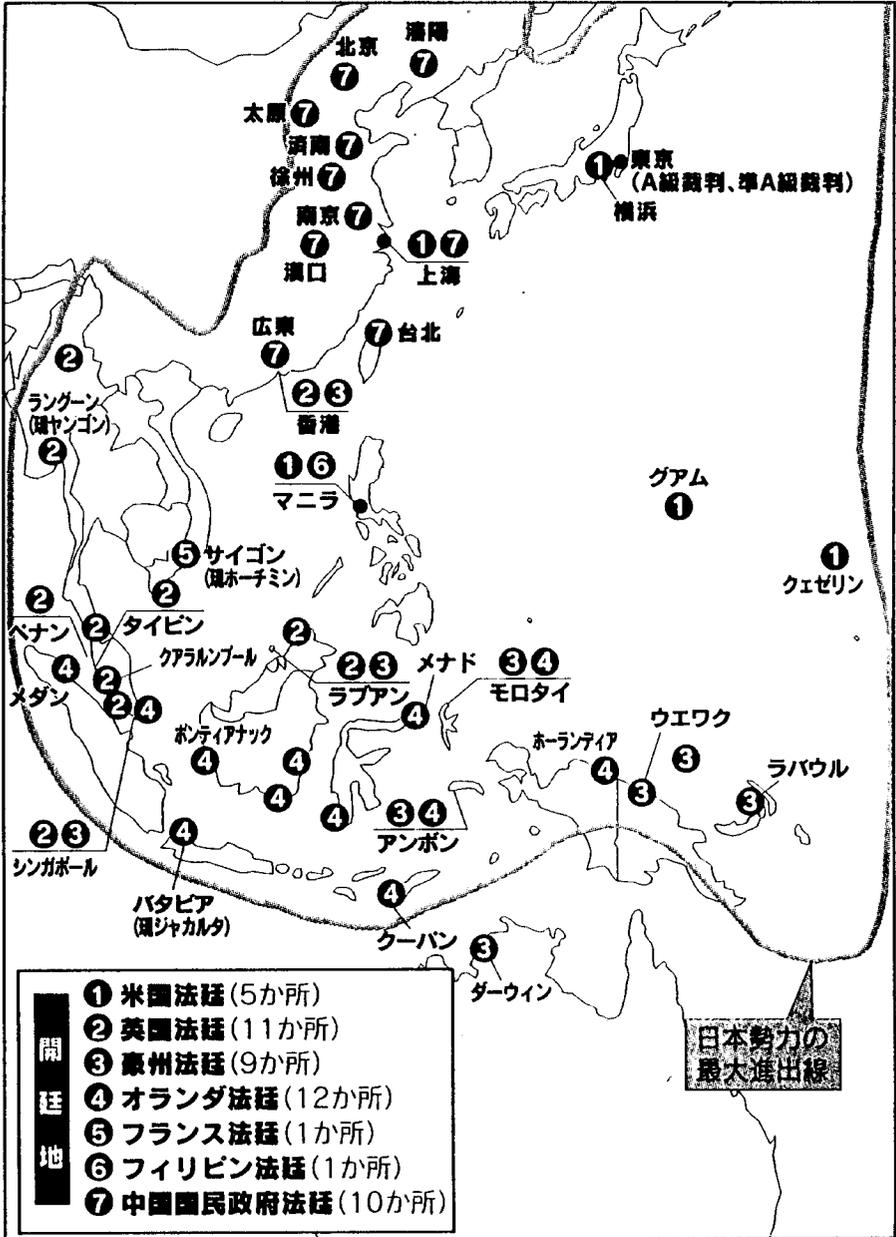
さらに現地民の協力を得るため、アギナルド將軍の独立運動以来高まっていた独立志向を利用し、カリバピを母体施行、次いで郷土防衛義勇軍の編成により、対オランダ独立運動勢力の吸収に成功している。しかし、多数の島々から成るインドネシアでは域内交易の重要性が高く、戦争による交通阻害が、一方に米不足と物価騰貴に苦しむ島々、他方に農産物を港で腐らす島々を生んだ。

戦争資源と自活用食糧の調達を要求されたフィリピン、マレー、ビルマ(現ミャンマー)、仏領インドシナ、インドネシアでは、日本軍の戦闘部隊の移動後、戦時であることを想起させるのは軍政または民政であり、陸軍の憲兵や守備隊、海軍の特別警備隊がその象徴だった。インドネシアでは、日本軍と現地民との関係が比較的良好だったが、他地域では強い緊張関係があり事件が頻発した。

フィリピンやマレー、ビルマでは、敗走した米英軍が情報収集や反日活動を行う諜報員を残置し、これが現地民を使喚して反日ゲリラ活動を拡大させ、フィリピンでは「敵側の策動と相俟ち軍政末期に至るも山岳地帯及離島に於ける少数匪の蠢動は之を絶滅すること能はざりき」と伝えられるように、ゲリラ活動のために軍政が僻地に浸透できなかったほど強力だった。このため日本軍は、反日ゲリラ討伐や親ゲリラ現地民の取り締まりに奔走し、疑わしい原住民の虐待致死を招く例が少なくなかった。欧米列強を排除し、アジア人のアジアを目指すという大東亜共栄圏の理想

旧日本軍戦犯の裁判開廷地

(東京以外はBC級裁判)



「ポツダム宣言」(45・7・26)

一〇 吾等は、日本人を民族として奴隷化せんとし、又は国民として滅亡せしめんとするの意図を有するものに非ざるも、吾等の俘虜を虐待せる者を含む一切の戦争犯罪人に対しては、嚴重なる処罰を加へらるべし。

「降伏文書」(45・9・2)

下名は、茲に、ポツダム宣言の条項を誠実に履行すること、並に右宣言を実施する為聯合國最高司令官又は其の他特定の聯合國代表者が要求することあるべき一切の命令を發し、且斯る一切の措置を執ることを天皇、日本国政府及び其の被治者の責任とする。

●戦勝国による戦犯裁判は初

「A級・B級・C級・準A級戦犯」

連合国は第二次大戦中から、日独伊枢軸國の戦争指導者と戦争犯罪を戦争終結後に処罰する方針だった。四五年八月八日、米英仏ソ四か国代表は「欧州枢軸諸國の重要戦争犯罪人の訴追及び処罰に関する協定」(ロンドン協定)を締結し、従来の「通例の戦争犯罪」(戦争の法規・慣例違反)に加えて、侵略戦争の計画・開始などを犯罪とする「平和に対する罪」と、一般市民の迫害などの非人道的行為を対象とする「人道に対する罪」を新たな戦争犯罪概念として規定した。

この協定に付属する「國際軍事裁判所条例」の第六条に、(a)平和に対する罪(b)通例の戦争犯罪(c)人道に対する罪、が具体的に明記され、これに基づいて四五年十一月にニュルンベルク裁判が開かれた。極東國際軍事裁判所条例は、同条例に準拠している。「A級戦犯」「B級戦犯」という呼称は、この条例に由来する。「C級戦犯」人道に対する罪はナチスのユダヤ人迫害、大量虐殺を対象にしており、日本では該当する行為が

下名は、茲に、日本帝国政府及日本帝国大本營に対し、現に日本國の支配下に在る一切の聯合國俘虜及被拘留者を直に解放すること、並に其の保護、手当、給養及指示せられたる場所への即時輸送の為の措置を執ることを命ず。

天皇及日本国政府の國家統治の権限は、本降伏条項を実施する為適當と認むる措置を執る聯合國最高司令官の制限の下に置かるるものとす。

「極東國際軍事裁判所条例」(46・1・19)

第五条 人並に犯罪に関する管轄

本裁判所は、平和に対する罪を包含せる犯罪に付個人として又は団体構成員として訴追せられたる極東戦争犯罪人を審理し、処罰するの権限を有す。左に掲ぐる一又は數個の行為は、個人責任あるものとし、本裁判所の管轄に属する犯罪とす。

(イ) 平和に対する罪 即ち、宣戦を布告せる又は布告せざる侵略戦争、若は國際法、条約、協定又は保証に違反せる戦争の計画、準備、開始、又は実行、若は右諸行為の何れ

戦犯」と稱する。A級は聯合國管轄の國際軍事法廷(東京裁判)、B/C級は連合國七か國單獨の法廷でそれぞれ裁判に付された。

これらの裁判とは別に、豊田副武海軍大將(元連合艦隊司令長官・軍令部総長)と田村浩陸軍中將(元俘虜情報局長官)は、GHQ(連合國軍總司令部)管轄の特設法廷で裁判を受けた。二人に関しては「準A級裁判」、「GHQ裁判」と呼ばれる。

「通例の戦争犯罪」を処罰できるのは、従来は戦闘中に限られ、戦闘終了後は裁判、処罰してはならなかったが、第一次大戦後のヴェルサイユ条約で前ドイツ皇帝の戦犯裁判を戦後に実施することなどが規定された。しかし、これは実現せず、戦勝国による戦犯裁判が実施されたのは第二次大戦後が初めて。

「ワエルサイユ条約二二七条」(19・6・28)

同盟及び連合國は、國際道義と条約の神聖を傷つけた最高の犯罪について、前ドイツ皇帝ホーエンツォレルン家のウィルヘルム二世に対して公訴を提起する。右の被告人を審理するために特別裁判所を設置し、被告人に

の参加。
(ロ) 通例の戦争犯罪 即ち、戦争法規又は戦争慣例の違反。

(ハ) 人道に対する罪 即ち、戦前又は戦時中為されたる殺戮、殲滅、奴隸的虐使、追放其の他の非人道的行為、若は政治的又は人種的理由に基く迫害行為であつて犯行地の國內法違反たるか否かを問はず本裁判所の管轄に属する犯罪の遂行として又は之に關聯して為されたるもの。

上記犯罪の何れかを犯さんとする共通の計画又は共同謀議の立案又は実行に参加せる指導者、組織者、教唆者及び共犯者は、斯かる計画の遂行上為されたる一切の行為に付、其の何人に依りて為されたるかを問はず責任を有す。

第六条 被告人の責任

何時たるかを問はず被告人が保有せる公務上の地位、若は被告人が自己の政府又は上司の命令に従ひ行動せる事實は、何れも夫れ自体当該被告人をして其の間擬せられたる犯罪に対する責任を免れしむるに足らざるものとす。但、斯かる事情は、本裁判所に於て正義の要求上必要ありと認むる場合に於ては、刑の輕減の爲め考慮することを得。

対して弁護權に必要な保障を与える。この裁判所は五名の裁判官をもつて構成し、アメリカ合衆國、大ブリテン、フランス、イタリア、日本が各一名の裁判官を任命する。

裁判所は、判決に際し、國際間の約定に基づく崇高な義務と國際道義の存在とを立証するために、國際政策の最高動機を命ずるところに従う。その至当と認める刑罰を決定することは、裁判所の義務である。同盟及び連合國は、審理のために前皇帝の引渡しをオランダ政府に要求するものとす。

●5年半で920人が処刑された
「B/C級戦争犯罪裁判」

四五年八月十四日、日本政府がポツダム宣言の受諾を通告すると、トルーマン米大統領はマッカーサー元帥を連合國軍最高司令官に任命し、降伏文書と一般命令第一号の案文を送付。これらの文書の写しは、アトリー英首相、スターリン・ソ連首相、蔣介石中国主席にも送られた。一般命令は、戦場の日本軍が地域ごとに降伏する相手を選定している。

① 中国本土、台湾、北緯一六度以北の仏領

② 満州、北緯三八度以北の朝鮮、樺太及び千島諸島はソ連極東軍最高司令官に。

③ アンダマン、ニコバル諸島、ビルマ、タイ、北緯一六度以南の仏領インドシナ、マレー、スマトラ、ジャワ、小スンダ諸島、ブル、セラム、アンボン、カイ、アル、タンニバル及びアラフラ海の諸島、セレベス諸島、ハルマヘラ諸島ならびにオランダ領ニューギニアは東南アジア連合軍最高司令官に。

④ ボルネオ、英領ニューギニア、ビスマルク諸島及びソロモン諸島はオーストラリア陸軍最高司令官に。

⑤ 日本国委任統治諸島、小笠原諸島及び他の太平洋諸島はアメリカ太平洋艦隊最高司令官に。

⑥ 日本本土、これに隣接する諸小島、北緯三八度以南の朝鮮、琉球諸島及びフィリピン諸島はアメリカ太平洋陸軍部隊最高司令官に——それぞれ降伏することになった。

投降する日本軍將兵に対して戦犯追及が始まった。西南太平洋の全域を担当し主導権を取った米国はGHQに中枢機関を置いた。一つは「重大な戦争犯罪人」を訴追するための機関である国際検察局、もう一つは「その他の戦争犯罪人」の捜査、発見、逮捕、訴追を

担当する法務局である。法務局は横浜（米陸軍第八軍司令部）とマニラ（米西太平洋陸軍）に二つの支部を置いてフル稼働した。

英国は連合軍東南アジア司令部（最高司令官ルイス・マウントバッテン海軍大将）に戦争犯罪課を設置。記録係（情報照合、戦犯リストの作成）と法務係（証拠の検討、訴追準備）に分けて精力的に捜査を進めた。

BC級戦犯裁判は、四五年十月の米軍マニラ法廷から五一年四月の豪・マヌス島裁判まで五年半にわたった。米、英、蘭、仏、豪、比、中国（国民政府）の連合国七か国、計四十九の法廷で、各国の法律により単独で行われた。裁判の結果（法務省の推計）は、起訴が計五千七百人、死刑判決が九百三十四人（実際の執行は九百二十人）、無期・有期刑三千四百十三人、無罪千八百八十八人など。内外各地で逮捕された戦犯容疑者は五万五千人を超える。A級戦犯と比べ、遙かに地域的広がりや人数の規模が大きいことに圧倒される。

連合国七か国とは別に、中華人民共和国とソ連も独自に戦犯裁判を行った。中国では五六年六月から七月にかけ、瀋陽と太原に設置した最高人民法院特別軍事法廷で、旧日本軍將兵ら四十五人に対する裁判を行い、全員有罪

中国各地で人民裁判で処刑された日本人は約三千五百人に及ぶとも言われる。

ソ連は四九年十二月、ハバロフスク市で元関東軍総司令官山田乙三大将ら十二人の裁判を行った。二十五年から二年の強制労働の判決が宣告されている。四五年八月からソ連領内に送られた日本人は総数五十七万人を超えたと推定され、長期間の抑留生活を強いられた。数年間で約七万人が死亡したとされる。

「俘虜条約の準用」

BC級戦犯の対象とされた戦争犯罪は、捕虜の人道待遇を定めた「陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約」と付属書「陸戦ノ法規慣例ニ関スル規則」（一九〇七年）、「海戦ニ於ケル捕獲権行使ノ制限ニ関スル条約」（同）、「戦地軍隊に於ける傷者及病者の状態改善に関するジュネーヴ条約」（一九二九年）、「俘虜の待遇に関するジュネーヴ条約」（同）などの「戦争の法規又は慣例の違反」である。

「俘虜条約」は、捕虜の待遇について「俘虜捕獲国は俘虜を給養する義務を負う」「俘虜の食糧はその量及び質において補充部隊のも

のと同等であるべきこと」などと規定されている。日本はこの条約に調印したが、陸海軍の反対で批准できなかった。だが、太平洋戦争開始直後、米国の照会に対し、四二年一月二十九日付で「日本ノ権内ニアル『アメリカ』人タル俘虜ニ対シテハ同条約ノ規定ヲ準用スヘシ」と回答した。

太平洋戦争中、日本が捕らえた連合国の捕虜は約三十五万人。終戦時、国内の捕虜収容所（函館、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡）に約三万二千人、外地の捕虜収容所（マニラ、シンガポール、バンコク、ジャワ、ボルネオ、朝鮮、台湾など）に約七万七千人が収容されていた。労働力不足を補うため、鉄道建設、道路補修工事などに捕虜を活用したが、食糧・医薬品不足、栄養失調なども重なって死亡者も少なくない。

捕虜問題に対する日本軍の姿勢は、「生き残る俘虜の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」という「戦陣訓」（四一年一月、陸訓第一号）に象徴される。これに対し、連合国側は「俘虜条約の準用」は「批准と同等」と受けとめていた。

このため、戦後の戦犯裁判では、「捕虜虐待」「捕虜虐待致死」「捕虜への救恤品の横

領」などの罪を厳しく問われ、捕虜収容所関係の事件は、総起訴人数の一七％、全有罪者の二七％、死刑の一％を占めた。

「戦争の法規及び慣例違反」（一九年、パリ平和会議予備会議・戦争に関する責任を調査する十五人委員会）

1・謀殺、集団殺害、組織的テロ行為
2・人質の殺害
3・一般民衆の拷問
4・故意に一般民衆を飢餓に陥らせること
5・強姦
6・強制的売淫のための婦女子の誘拐
7・一般民衆を放逐すること
8・非人道的状態における民衆の抑留
9・一般民衆を強制して、敵の軍事行動に関係ある作業に従事させること
10・軍事占領中における主権の篡奪
11・占領地域住民の強制徴兵
12・占領地域住民の国籍剝奪を企てること
13・略奪
14・財産の没収
15・不法もしくは過重な賦課金または徴発の強要
16・通貨の変造または偽造通貨の発行
17・連座罰を科すること
18・財産をほしほしに荒らし、または破壊すること
19・無防備地域を故意に砲撃すること
20・宗教的、慈善的、教育的、もしくは歴史的建造物または記念物をほしほしに破壊すること
21・無警告で、また

は船客もしくは乗組員の安全のための手段を講ずることなく、客船または商船を破壊すること
22・漁船または救助船の破壊
23・病院を故意に砲撃すること
24・病院船の攻撃または破壊
25・赤十字に関する他の諸規程の違反
26・毒性および窒息性のガスの使用
27・爆発性もしくは飛散性銃弾またはその他の非人道的器具の使用
28・助命するなどの命令を出すこと
29・負傷者または俘虜の虐待
30・許容されない方法で、俘虜を収容させること
31・休戦旗の濫用
32・井泉への毒物混入
33・無差別な集団逮捕（44・5追加）

第2方面軍独立混成第57旅団 独立歩兵第372大隊歴史概要

昭和19年6月21日陸軍大尉相良廣遠は、独立歩兵第372大隊、大隊長に補せられ、6月28日、満洲国黒河省神武屯を出発、一方部隊要員は7月3日門司港出発、途中比島マニラにおいて暫時、駐留部隊の仮編成を行う。

昭和19年8月15日マニラ出発セレベスに向う。輸送途中の8月29日午前2時57分、セレベス海北緯2度15分、東経122度29分の地点において敵潜水艦の魚雷攻撃を受け輸送船沈没せり。

然し兵員のほとんどは8月30日未明までに日本海軍駆潜艇に救助され、8月31日セレベス島メナド港に上陸、直ちにトンダノ郡クロに集結し、9月3日より部隊編成作業に着手、9月8日部隊編成を完結す。

ここに独立歩兵第372大隊は、第2方面軍独立混成第57旅団長の隷下に属することとなり。

翌9日トンダノ郡タタランに移駐して待機す。

大隊はアムラン湾に上陸の意図を有する敵に対し、之を阻止する戦闘任務を受け10月13日タタラン出発、同月16日アムラン郡ツワスンに到着、一部をもってツンパーンに主力をもってツワスンに位置し、アムラン湾一帯の警備に任ず。

ここにおいて大隊は全力を挙げて陣地構築その他各種防禦施設を強化し、戦力の増強に努む。

此の間第119飛行大隊の特設第5機関砲隊及び独立混成第57旅団特設高射砲隊をその指揮下に入れ対空戦闘に任せしむ。

更に又速射砲、自動砲、機関砲をもって対空戦闘を実施す。

12月25日第2中隊を編成、旅団直轄の予備隊として、トモホン地区の警備に任せしむ。

6月25日松号輸送に当り第2中隊之に参加、7月25日新たに第3中隊を編成す。

戦局の推移に伴い光号輸送開始さる。

大隊はその第4梯団となり、8月1日ツワスンを出発、一路南進の行軍中、8月25日停戦命令を受け、一切の戦闘行動を停止せり。

ここにおいて大隊は、ボロコ（一部ロラク）に集結し、その後移動してコタモバク南方25杆、バカン附近に駐留、更に北上して10月30日ビートンに集結を完了す。

集結後は現地目活作業に専念、昭和21年3月、略、その態勢を完成せり。

昭和21年5月5日復員のためビートンを出発メナドに向う。同年5月10日リパティ型輸送船にてメナド港出発、5月19日和歌山県田辺港上陸、田辺引揚援護局に入り防疫その他復員関係業務に当る。

昭和21年5月20日一切の復員業務完結、同年同月同日復員式挙行、解散。

独立歩兵第372大隊 略歴年表		
年	月 日	記 事
昭和19年	6月21日	軍令陸第63号に抛り、編成下令。
	9月3日	編成着手。
	9月8日	セレベス島ミナハサ分県トンダノ郡クロにおいて編成完結、第2方面軍独立混成第57旅団長の隷下に入る。 独立混成第57旅団長初度巡視。 命課布達式挙行。 大 隊 長 陸軍少佐 相 良 廣 遠 副 官 陸軍中尉 野 村 幸 男 一般中隊長 陸軍中尉 石 上 種 樹 銃 砲 隊 長 陸軍大尉 谷 正 幸
		移駐の為、クロ出発。
	9月9日	タタラン着、同地警備。
	9月12日	一般中隊第2小隊ツンパーン附近警備の為任地に向い出発。
	9月17日	一般中隊主力第119飛行場大隊長の指揮下に入りアムラン飛行場警備の為任地に向い出発。
	10月13日	大隊主力移駐の為タタラン出発。
	10月15日	第119飛行場大隊を指揮下に入らしめらる。
	10月16日	アムラン郡ツワスン到着、アムラン附近の警備に任ず。 一般中隊主力所属隊復帰。
	11月14日	特設第5機関砲隊を指揮下に入らしめらる。
	11月20日	自動砲小隊を編成。 大隊本部に所属せしむ。

年	月 日	記 事
昭和19年	12月3日	独立混成第57旅団特設高射砲隊を指揮下に入らしめらる。
	12月25日	日向中尉以下150名転入。 第2中隊編成、中隊長、陸軍中尉、日向徳達トモホン附近に在りて旅団直轄予備隊。 一般中隊を第一中隊と改称す。
	12月30日	ラノヤボ川橋梁復旧作業に一部兵力差出。
昭和20年	3月30日	第119飛行場大隊指揮下を脱す。
	4月7日	特設第5機関砲隊及独立混成第57旅団特設高射砲隊指揮下を脱す。 在アムラン地区陸軍部隊及海軍部隊を新たに指揮下に入らしめらる。
	4月10日	斉藤少尉以下72名転入。 独立小隊編成、小隊長、陸軍少尉 斉藤保クワンタン地区の警備に任ず。
	6月1日	第2中隊ツワスン帰着。
	6月25日	第2中隊松号輸送参加の為ツワスン出発。
	7月25日	第3中隊編成、中隊長、陸軍中尉 井上虎之助。 特設第5機関砲隊を指揮下に入らしめらる。 第1中隊第2小隊原所属(ツワスン)復帰。
	8月1日	臨時召集に依り青山少尉以下180名応召 光号輸送参加の為第1梯隊(銃砲隊)ツワスン出発。
	8月3日	第2梯隊(第1中隊)ツワスン出発。
	8月5日	第3梯隊(大隊本部)ツワスン出発。
	8月7日	第4梯隊(第3中隊)ツワスン出発。
	8月9日	トンパソにおいて特設第5機関砲隊掌握。
	8月25日	大隊主力はボロコにおいて、第4梯隊は、ロラクに於て行動停止。
	9月26日	大隊は、コタモバグ南方25軒、バカン附近に集結。

第 5 地 区 隊 歌

(大隊本部) 大 黒 隆 念 作 詩

- | | |
|---|--|
| 1 嘗て我等はミナハサに
神兵として馳駆したり
今余儀なくて執る鉾を
鍬に替えてぞ土と組む
意気高らかに声和して
第5地区隊振り立つ | 4 水なき森に黙々と
カラバに挑む製油班
波に小舟を乗り出して
岸に網引く漁撈班
塩たく煙槌の音
自治態勢ゆるぎなし |
| 2 地区隊長は呼号せり
礼道常に心せよ
全きを期せ防ぎやくに
徹底してぞ増産に
自給自足の道拓け
これ興国の第1歩 | 5 日は西海に茜色 ^{あかね}
故郷 ^{くに} 偲ばせるメナド富士
新日本の建設を
心に秘めて語らうは
興る世紀の息吹き声
胸は高鳴り腕は哮ゆ |
| 3 朝露踏んで農耕班
はだも焦がす炎熱に
光る鍬先汗しずく
見よあの山は緑して
風に波打つ諸島
ミルの穂先も揃いたり | 6 祖国は今や再生の
炎と燃ゆる朝ぼらけ
いざこぞりてぞこの地にて
国興す業身につけん
ともに力を協せてぞ
励む姿や5地区隊 |

この地区隊歌は隊員に公募されたものの中から選択されたもので、作者は賞として部隊長から乾パン5袋授けられたそうです。

米凡可ヒレ \ 八
ミナサ地区

